

# 東方三界黃龍伝

—東京編—



「東方三界黃龍伝 東京編」

（後編）

文・絵  
小龍

目次

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
私の龍に食われて死にな	歪んだ時間	水神	うけい	じいさまの言い訳	馨の敵は僕の敵	千年の都	京都に遊ぶ	初恋の君と無責任一代男	土御門四郎雅臣	そうだ、京都に行こう	偃月の来訪	うちへ帰ろう	一九九八、夏
248	234	218	198	180	164	146	127	105	84	65	45	25	5

23	22	21	20	19	18	17	16	15
こちら、東新宿探偵社	Things are getting better	居なくなった悠さん	秋嵐	結婚狂想曲	ただいま、東京	親子喧嘩	斎藤新助の正体	黒田家の事情
447	425	402	379	362	343	316	288	270

1 一九九八、夏

ニッポンの夏は緊張の夏だとテレビで言っていた気がするが、ここ、新宿区の片隅の今にも倒れそうな一軒家では、弛み切った腐乱死体一步手前のような身長百四十五センチの物体が畳の上に転がっていた。

「あづい……」

梅雨が明けると、一気に夏になってしまった。

今、部屋の湿度は七十度を軽く超えているだろう。

暗い廊下の先、台所の流し台の下あたりにユラユラと蜃気楼が見える気がする。

「あづ……い……」

さつきから沙龍の呻き声は、全開の窓から流れ込んでくるセミの大合唱によってかき消されている。

暑い。

とにかく暑い。

東京のこの湿気を含んだ暑さはもはやサウナである。

寒さには異常なほど耐性があるのに、高温多湿が思わぬ弱点であったか、と沙龍は齡十七にして悟った。

ノースリーブに短パンという田舎の小学生のようなスタイルで、髪は木佐が器用に結んでくれたが、それだけで涼しくなるわけではない。

うちわを仰ぐ元気もなく、七月に入って最初の日曜日になにもせずにとららたと過ごしていた。

いまだき、日本の夏場にクーラーを入れずに過ごすのは自殺行為である。が、敢えてこのボロ家の家主は過酷な道を選んだ。

否、選ぶ余地は最初からなかった。

この築七十年の家にはそもそもエアコンがないのだ。

「ねー、キサさん……、クーラー、買おうよ……。お金は私が出すから、さ……」

廊下までずるずると匍匐前進をしてきて、台所でソーメンを茹でている木佐に

言った。

火のそばには極力近寄りたくない。

木佐は甚平姿で、頭にタオルを巻いているが、沙龍よりはシャキつとした顔をしている。

「馨の貯金を使うのは禁止って言っただろ」

それは、沙龍がこの家に居候するにあたって木佐が出した条件の一つだった。自力で生活すること。

木佐はそこにこだわっている。

つまり、日々稼いだ金で生活をまわすのが基本であって、日用品を買うのに貯金を使つてはならない、というのが木佐のやや行き過ぎた主張なのである。

「いつなんどきトラブルに見舞われるか分からないんだぞ？ 明日、急に働けなくなるかもしれないし、株が暴落するかもしれない。貯金なんて『あ、あつたの忘れてた』くらいで丁度いいんだ」

木佐はそう言うのだが、

「いやー、でも、高校生でそこまで考えてる人、いないと思うよ……」

こればかりは沙龍の意見のほうが世間の支持を得そうだ。

大体、高校生の本分は学業であつて、株の売り買いではない。

「でもさー、私の貯金は、私が上海で働いてた時の給料とも言えるんだから、どう使おうが自由じゃん？ キサさんだつて、中学の時に株でためたお金で、この家買ったんでしょ？」

「さすがに不動産は別だ。それに、馨が裏社会で得ていたお金を、普通のサラリーマンや苦学生が必死に働いて得た給料と同じ扱いにしていいはずはない」

「いや、まあ、それを言われると確かに心苦しいんですが……」

上海では椅子にふんぞり返っていればよかつたのだ。

汗水たらして働いてはいない。

そのあたりのことは木佐には包み隠さず話した。

自分がどこで生まれて、どういう風に育ってきたのか、上海ではどういう生活をしていたのか――。

いまさら、隠すことなどなにもない。

「それに、今後、組織と縁を切るつもりなら、組織で得た金は突っ返すべきだろ



う

「まーた、なにをサムライ根性出してんだか……」

もらっちゃったもん勝ちという沙龍のこだわりなさ、日本の美学に基づく木佐の主張は、こうしてたびたび食い違いをみるわけだが、そのことで喧嘩になるようなことはなかった。

沙龍はやはり木佐の中では外国人なのである。

思想や信条が違って当然、と思っっているのだろう。

しかし、

(あの口座からエアコン代引いたところで、大人が飴玉買うようなもんじゃんか……)

沙龍はそう思っている。

貯金額を言ったら、木佐が卒倒しそうなので、そのあたりはぼかしているのだが、実は沙龍でさえ、具体的な金額は知らない。

『蒼龍会』の老板時代に使っていた口座には常時億単位の額が入っていたし、日本に来るに当たって作った口座は「なにかあった時のために、マンション一棟

が買えるくらいは入れておきますね」と、董天が言っていた。

「えー、じゃあさー……、貯金じゃなきゃいいんだよね？ 例えば、私がそこらへんで大道芸でもして稼いできたお金でクーラー買うのはいいんだよね？」

「大道芸、舐めてんな？ そんなにすぐ稼げるもんか」

木佐は、大鍋で茹でたソーメンを水で冷やして、大きな器に盛っていた。

十人前くらいありそうだが、これを二人で食べるのだ。

生姜や大根おろし、白ネギなどもちゃんと用意されている。

「いただきまーす！」

この時ばかりは沙龍も少し元気になる。

「ソーメンはおいひいふえふお、これらは、たんぱく質が足りまふえぬぞ、料理長」

「口に物を入れたまま話すな。夜にササミ入りの茶碗蒸しを作ってやるから我慢しろ」

「やった！」

ここ三日ほどうるさく言った甲斐があった。

いくら木佐の作る茶碗蒸しが絶品とはいえ、毎日作ってくれるわけではないので、食べたくなったら二、三日は言い続けなければならぬ。

ちなみに、沙龍は台所に立つことは禁止されている。

引越した当初、カレーくらい作れると豪語してやってみたら、台所が半分なくなっただからだ。

どこをどうしたらコンロそのものが背後の壁とともに吹き飛ぶ展開になったのか、ちつとも分からないのだが、引火したフライパンを力技で消そうとした結果らしい。

密集した住宅地じゃなかったのが幸いした。隣は竹やぶになっているので、少々騒いでも文句は言われない。

木佐がこの東新宿の一軒家を買おうと決めたのは、単純に、値段が破格だったからだ。

北側はお寺の敷地で墓地になっており、両隣は竹やぶ、駅までは歩いて三十分、という物件だ。それだけでも安いのは分かるが、相場よりもはるかに安い値段だったので、松木ゴローにも霊視してもらったが、特にそっちの問題はないと

いう。

なんでも一家惨殺の事件現場になったとかいう噂があつて、買い手がつかず、どんどん売値が下がったという話のようだ。

「そりゃさー、いまどき、エアコンもない、雨漏りもする、大型台風がきたら一発で崩れそうな、こんなボロ家に平気で住める人、なかなか居ないよー？」  
沙龍は付き添いの不動産屋さんの前で遠慮なく言った。

しかし、木佐は「屋根は修理すればいいし、エアコンは心頭滅却すれば不要」と言い放ち、ここに決めてしまった。

文京区のワンルームマンションは狭い上に家賃も高いので、どっちみち引越しするつもりだったようだが、もういつそのこと賃貸ではなく、買ってしまえ、と思つたらしい。

どうせ東京に根をおろすつもりなのだ。そういう時、木佐の決断は早い。

浅草寺の一件以来、木佐への嫌がらせはピタリと止まったらしいので、当面は静かに、平穩に暮らせるはずである。

そう。はずだったのだ。

この大飯食らいの居候が転がりこんで来るまでは。

「郵便、取りにいかなくていいのか？」

沙龍はもう一週間くらい西新宿には帰っていない。

新聞は取っていないから郵便受けが溢れるといったことはないだろうが、大事な『俊先生からの手紙』が来てるかもしれないので木佐は言っているのだ。

「明日、学校帰りに寄ってみる。今日は暑くて外に行く気力ないもん」

沙龍は、というと「なんか西新宿のマンション、見張られてる気がするんだよね」と言っつて、木佐が買ったばかりの一軒家に転がりこむことになった。

なまじつか武道の達人である分、「それは自意識過剰からくる気のせいだ」とも言えず、また、自分の作った料理を絶賛しながら美味しそうに食べる居候の存在が本音の部分ではありがたかったので、ぶつぶつ言いながらも木佐は同居を許可した。

学校には一緒に行つて、ばらばらに帰る、という日々だ。

弁当は「一人分も二人分も手間は同じ」と言つて木佐が作ってくれる。

おかげで栄養バランスにあれこれ心を砕かなくてもいい食生活となった。

「そうだな。今日はおとなしくテスト勉強でもするか」

「ええええ〜この暑いのに〜」

来週から期末テストなのである。

毎回首位の木佐はいいとしても、底辺をうろろしている沙龍は勉強せねばなるまい。

仕方なく居間のちゃぶ台に勉強道具を持ってきてノートを開いてみるも、開始早々五分でギブアップした。

「あづい……」

畳の上にうつ伏せに寝そべる。

長い髪はあげているので、ノースリーブの大きく開いた背中に傷跡が見える。

「……」

木佐は、今朝も髪を結う間にこれを見て、なにか言おうと思ったのだが結局やめた。

あれは明らかに刀傷である。しかも、かなり深い傷だったのだろうということ分かる。「綺麗な育ち方はしてないからね」と沙龍は苦笑しながら言っていた

が、普段の彼女を見ている限り、とてもこういう傷を負う経験をしてきた人物には見えないのだ。

「あづい……」

「心頭滅却しろ」

「すみません……、それ、私にはできません」

「僕は馨に会って初めて武術の達人にも煩惱まみれの人間が居ることを知ったよ」

「そりゃさー、キサさんの周りにはあの師範みたいなストイックな人しか居なかったんでしょー。私の村には……」

そこまで言って沙龍は、「あ、そうだ！」と体を起こした。

「さ来週あたり、テストが終わった頃、弟が日本に来るって言ってるんだけど、ここに泊めてもいい？」

「別に構わないけど……。西新宿じゃダメなのか？ 自分で言うのもなんだが、こんなボロ家に寝泊りするんじゃ、日本の印象悪くならないか？」

「それは大丈夫だと思う。ムカデと一緒に野宿も全然平気っていう子だから」

「そりや、たくましいことで……」

弟の偃月は昔から泣き虫ではあったが、サバイバル面では沙龍よりも優れていた。

なんでも食べるし、どこでも眠れる。

それがあの村全体の子育て方針でもあったのだが、偃月ほど素直にそれらの知識と技術を受け継いだ子は居ないだろう。

沙龍はなんだかんだ言って上海で贅沢を覚えてしまったので、すぐに野生には戻れない。

「そういや、二姐アルチェのほうは連絡ないな。いつ来るんだろう」

「前に言ってた医者のお姉さんのことか？」

「うん。これがまた弟以上に風来坊でねー、弟とは血が繋がってないのに、いったい誰に似たんだか……」

「……？」

木佐が不可解な顔をする。

「あ、それから、弟に言わなきやいけない大事なことがあってさ。できれば成人



するまで待つてくれって、月のお母さんには頼まれたんだけど、もう向こうは故人だし、ユエにもいつ会えるか分かんないから今度来た時に言うつもりなんだけど……。キサさんにもちよつと説明しておく」

沙龍はノートの余白に、家系図を書き出した。

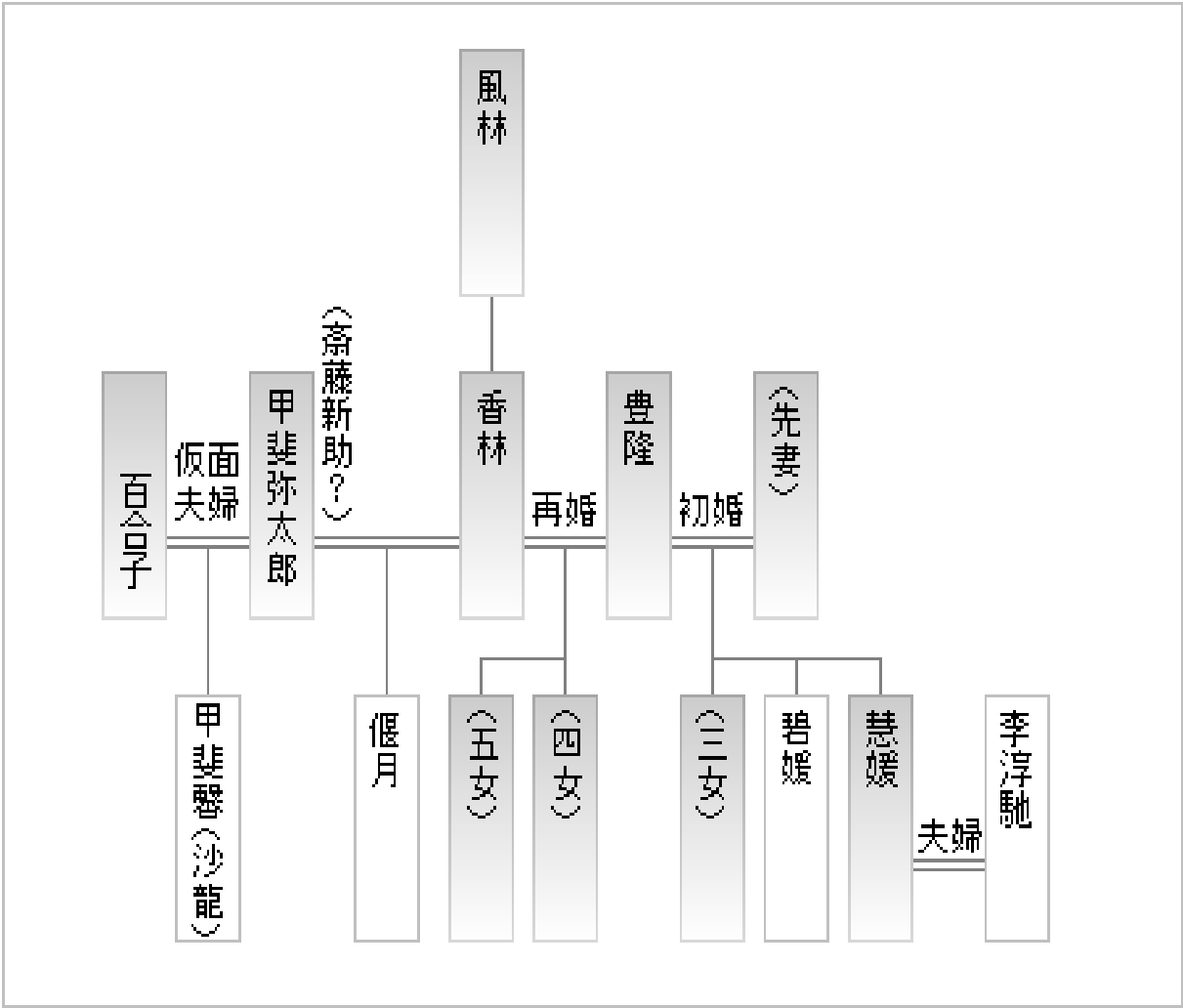
その図の通り、沙龍と偃月は腹違いの姉弟なのだが、偃月はそれを知らず、自分の父親は豊隆ほうりゅうだと思っっているらしい。

「顔が似てるんだから気付きそうなもんなんだけど、あの子はちよつと天然でね……」

「つまり、この香林さんこうりんってのは、豊隆と離婚して、甲斐弥太郎と再婚して、偃月君を産んだってことか？」

「いや、違う。離婚も再婚もしてない。偃月は世間的には不倫してできた子ってことになるの。しかも、弥太郎的には嫁さんが死んだ直後くらいの話だから、チョー不謹慎なわけ」

「はあ……」



「だから、香林としては偃月が成人するまで真実を教えたくなかったようなんだけど、実は私はかなり早い段階で知ってたんだよね。っていうのも、あの村がそもそも『黄龍の保持者』を作るためなら何でもするっていうような、ちよつとイカれた人たちの集まりでさ。弥太郎の最初の子が女の私だったもんだから、早く男子を作らなきゃってことで、弥太郎に香林を『あてがった』みたい。私のお母さんは私を産んですぐ亡くなったからね」

「『黄龍の保持者』ってのは男子限定なのか？」

「そう……だったらしいよ、言い伝えでは」

「でも、結局、馨がなったわけだろう？」

「うん。だから、偃月という『甲斐弥太郎の遺伝子を持つ男子』を無理矢理作った意味はなかったわけ。〈保持者創生計画〉の推進派にとっては、ね」

「殺伐とした話だな……。それを、偃月君に言っているのか？」

「もう十六だし、私や碧姐々にとって大事な弟であることは変わらないわけだから、いいかかって」

「こういうところは、非常にドライである。」

日本人にはない感性かもしれない。

「これは、なにか意味があるのか？」

木佐が指したのは、甲斐弥太郎と百合子の関係である。

『仮面夫婦』と書いてある。

「意味があるのかないのかも分かんないんだけど、とりあえず香林や二姐から聞いたことを書いただけ。私の両親ってのは、話に聞いてるだけでも不思議な夫婦でさ、いったいなんで結婚したの？ とか、なんで中国に行ったの？ とか、私ですら疑問が満載なわけよ」

「それで、お父さんのことを色々調べてるのか」

「うん。この半年で確定的な真実にはなに一つたどりつけていないんだけどね」  
人事ひんじのように言う。

沙龍にとって、そこは重要な話ではないようだ。

「ちよつと気になるんだが」

眉を寄せて家系図を見ていた木佐が少し妙なことを言いだした。

「“弥太郎”っていうのは、僕らの父親世代の名前としてはだいたい古めかしく思

えるんだよな……」

「そうなの？」

「ああ。少なくとも昭和の名前じゃない。もう少し前の世代にありがちな名前だ。明治とか、ひよつとすると、もつと前か……？」

よく時代小説を読んでいる木佐の感覚だと、そうなるらしい。

沙龍はもとより、日本名のこととはよく分かっている。

「このカツコの斎藤新助っていうのは？」

「それもまだ未確定というか、もしかしたら、甲斐弥太郎の別名かもしれないっていうだけ」

「以前、師匠が言っていた『斎藤弥九郎』とは関係あるのか？」

「それも分からないんだ。あるかもしれないし、ないかもしれない……。この件に関してはプロにも調べてもらってるんだけど、いまだ成果なしなんだ。よつぽど慎重に世間からその存在を隠してきた一族なのかもしれないって思うよ」

「そうか……。なにか分かれるといいな」

木佐は優しさでそう言ってくれているのだろうが、沙龍はやはりドライだっ

た。

「実は、分からなくてもいいや、ぐらいの気持ちなんだけどね。父親のことは、上海を出る口実だったただけだし」

「クールだな」

「だってさ、顔も素性も知らないんだよ？ 知られざる中国の龍穴のことはどうやって知ったの？ とか、そういう好奇心みたいなものはあるけど、それ以上はねー……、ぶっちゃけ死んだ人のことはどうでもいいっていかさー……」

「……」

「私は日本にはキサさんを探しに来たんだよ。それ以上に大事で大切なことなんてないんだよ」

「……」

こういうところも、紛れもなく外人だ、と木佐は思う。

「あーづーいー！」

沙龍がまた畳の上に体を投げ出した。

テスト勉強をする気は全くないらしい。

「水風呂でも入ってる」

この雨漏りのするボロ家にもいいことが一つあった。風呂が広いのだ。ワンルームマンションのシャワールームの狭苦しさに比べれば天国である。それだけでも引越す価値はあったと木佐は思っている。

「風呂場の水はなまぬるいからヤダ」

「じゃあ、郵便を取りにいくついでに西新宿のマンションで涼んでくればいじゃないか」

「うーん……、だからそれは明日でいいって……」

歯切れが悪い。

こういう物言いをする時は、絶対なにかあるのだ。

「戻りたくない事情でもあるのか？」

「……」

案の定、黙る。

「さしずめ、今日は日曜日だから誰か来たら面倒だなーとか思ってるんじゃないか？」

「……」

「それが、誰のことかも当ててみせようか？　以前、駅前で会ったサラリーマン  
だろうか？」

「……。あづい……」

都合が悪い時は人の話は聞き流す。

それも一緒に暮らしてみても分かった甲斐馨の特徴だった。



## 2 うちへ帰ろう

規則正しい生活をしている木佐に迷惑がかからない程度に、それから怒られない程度に、沙龍は夜更かしもするし、ジャンクフードも買い込んでいます。

しかし、床をポテトチップスまみれにすれば当然怒られるし、朝は何度起こしても起きてこないと終いには蹴り起こされる。

制服のネクタイをゆるくしめていれば直されるし、宿題のダメ出しもされる。

「なんか、真面目なお母さんと手のかかる息子みたいだね」

松木ゴローはそう言っていたが、沙龍がこの口うるさい母役になにも言わないのは、既に木佐が家族扱いになっているのと、小言というものは昔から半分以上右から左に抜けてしまうからである。

そして、木佐は木佐で、この二年間、かなり孤独に生きてきたことをひそかに痛感していた。人と話すことに飢えていたのかもしれない。脳天気な沙龍に小言を言うことが、木佐のストレス発散にもなっているようだった。

「僕の母が、わりとこういう人でね、木佐君みたいに、きつちりしてるの。で、手のかかるのが四番目の兄でね、人の話を聞かないところとか、馨君とちよつと似てるかなあ」

このボロ家に引越してしばらくした頃、やっぱりお化けがいるかもしれないから泊まりにきて、と沙龍に言われ、いそいそとやって来た松木が、翌朝、木佐のきつちりしたお母さんぶりと、沙龍の手のかかる息子ぶりを見て言った言葉である。

ちなみに、この時のお化け騒動は結局ネズミだったというオチがあるのだが、今度は、沙龍がそのネズミを駆除しようとして、結果、甚大な被害を巻き起こしたことは既にこの家の黒歴史になっている。

「失礼な。私だって人の話は半分くらいならちゃんと聞いている。それよりもマツキー、お兄さんが四人も居るの？ あ、そうか。名前が『五郎』だもんね」

「うん、上から三人目までは死んじゃったんだけどね。残ってるのは、その問題の四番目と僕だけ」

「へー……？」

三人とも亡くなっているということは、なにか事故にでもあったのだろうか。しかし、あまり立ち入ったことを聞くのも悪いし、朝の慌ただしさもあって、この時は聞かなかつた。

沙龍は普段通りに、というよりも、普段以上にリラックスしてこのボロ家で暮らしている。

さすがに心配になった木佐が、一度、振りだけで寝込みを襲ったことがあるのだが、逆に組み敷かれてこう言われた。

「私は続けてもいいけど？ キサさんのほうが “できない” んじゃ？」

「……はい？」

さすがに、焦った。

こんな経験は人生初である。

自分よりも小柄な、しかも女の子に寝技に持ち込まれるとは。

「いや、そうじゃなくて……。前々から言おうと思ってたんだけど、君は何故、

男の家に平気で上がりこんで、あまつさえ、無防備に寝れるんだ」

腕っ節に自信があるからです、と言われれば「あ、そうですか、すみませんで

した」と納得せざるを得ないシチュエーションなのだ（なにせ組み敷かれてる）、一応は説教するつもりで言った。

「いや、だって、キサさん、女相手にはどうせタタナイじゃん？」

これには驚いた。

周囲には当然内緒にしていることだ。

水神の加護といわれる特殊能力と、ゲイであること。その二つは、木佐が守り通している秘密なのだ。

「知ってたのか」

「まあ……、なんとなく」

聞けば、上海ではごく普通に周囲に居たという。

地下組織には多いらしいが、彼らは先天的にそうなのであり、普通の社会では生きにくいから、アウトローになってアンダーグラウンドに行き着くのもかもしれない。

「ゲイもダイクも居たよ。おかげで、小さい頃から、そっち系の人は一目見れば分かるようになった。マッキーは分からなかったけど」

「あの人は、生まれつきじゃないんだろう」

「そうなの？」

「ああ、そんな気がする。しかし……」

木佐はなにやら考え込んでしまった。

沙龍はお腹の上に乗ったままだが、確かに、これは小さい子供と遊んでいるだけの凶だ。

艶かしいなにかは、どこにも漂ってこない。

「つまり、最初から馨にとって僕は『おともだち候補』だったってことか？」

「それ以外のなにが？」

「まあ、そうだよな……。むしろ、そのほうがよかったのかもしれない。馨のカレン候補の扱い方は厳しそうだ」

木佐は、水上のことを言っているのだろう。

確かにあのサラリーマンのことは避けているし、引いてる部分はあるのだが、思わせぶりの態度を取るほうがよっぽど罪悪だと沙龍は思っているので、距離を置いているのだ。それを「厳しい」というなら、なにが「優しい」といえるのだ

ろう。

一方、木佐は木佐で『きっちりした母役』のイメージとは裏腹に、恋愛面ではかなりきっちりしていない——つまり、非道な——タイプであるということがすぐに分かった。

朝の通学中に、学校の近くで、制服の違う高校生に待ち伏せされたことがあった。

運動部で活躍しているような、よく陽に焼けた肌を持つ、目元涼しい、筋肉質の男子だった。実際、野球部のエースであるらしい。

しばらく木佐と連絡が取れなくなって、心配と疑心暗鬼で、学校までやって来たようだった。

そして、当然、その疑心暗鬼は、一緒に居た沙龍に向けられた。

「つまり、宗旨替えしたってことか？」

野球部のエースが言う。

「多分、言っても信じないだろうが、彼女は君が考えているような人じゃない」  
痴話喧嘩になりそうな雰囲気だったので、沙龍は気を利かせた風を装い、否、

つまり面倒くさかったので逃げようとした。

「んじや、私は先に行ってるね」

その行きかけた沙龍の腕を、野球部のエースが掴んだ。

「待てよ、あんた——」

以前、ここを掴まれて振りほどいた（※正確には振りほどくために腕をねじ上げて転ばした）結果、江戸川渡に追い掛け回されるといふ面倒くさい展開になった（ちなみにそれは現在進行形である）ので、沙龍は咄嗟に反応するのは我慢した。

それでも我慢するのは一秒くらいで済んだ。

木佐が、そのがちり掴まれた腕を外してくれたからだ。

「こっちに八つ当たりするのはやめろ」

そう言って、沙龍に「早く行け」という仕草をした。

その後、二人がどうなったのかは知らないが、二度と目元涼しい野球部のエースに会うことはなかった。「穏便に」別れたのだろう。

沙龍が遭遇した木佐の修羅場では、もつと酷かったケースもある。

要するに、木佐は恋人には永続的な関係も相互理解も求めていないのだ。

だから、のぼせあがった相手が、痺れを切らして、木佐に無理矢理会いに来る。

沙龍はいい面の皮である。もし普通の女の子だったら、直接的な被害もこうむったかもしれない。

「キサさん、もう少し相手は選ぼうよ……」

さすがにジャックナイフが出た時は沙龍も反撃して、岡田直也に似た感じの華奢な少年を一撃で沈めた。

こういう素人は軽く殴打するだけで済む。

「悪い……」

歩道の植え込みのあたりまで、気絶した少年を引っ張っていく木佐は、本当にすまなさそうな顔をしている。

「直也くんに刺されそうになるのは、まあ、しょうがないかな、とは思うけど、初対面の男の子に刺されるのはちよつと勘弁だなー」

岡田直也に対してはなんだかんだ言って「木佐を取り上げてしまった」という



自覚があるのだろうか。

それでも「刺されるような場面になっても許容する」であって「刺されてやっ  
てもいい」ではない。

「直也には手は出してないよ。さすがに恩師の息子に手を出すほど外道じゃない」

「そすか……」

「それに、最近、あいつはどうしたわけか僕に執着しなくなった」

「それは、若鶏が巣立ったということでは？」

「さあ……」

と、木佐が意味深に視線を向けてくるが、それは無視した。

沙龍とて、はつきりは知らないのだ。松木がなにかしたのだろう、ということ  
くらいしか分からない。その件もいつか聞こうと思いつつ、機会を逸している。

木佐に改めて聞こうと思っていたことは、週明けの月曜日の通学中にようやく  
聞くことができた。

といっても沙龍も半分忘れていて、沿道の桜の木にヒバリが停まっているのを

見て、思い出したのである。

「ねえ、キサさん。前に、私がヒバリを捕まえた時、暴れていたヒバリをキサさんが魔法のように大人しくさせたよね？」

「ああ、あれか……」

「あれはなに？」

「本当はあんな風に知らない人の前で披露すべきじゃなかったのかもしれないが、ついやってしまったんだよな。あの時、馨の手から血が出てたから、早く大人しくさせないと、と思つて——」

「血……？」

大した怪我ではない。かすり傷である。沙龍は忘れていた。

しかし、木佐の言動の裏にはこの仏頂面からは到底信じられないような優しさがあるのだと分かつて、沙龍は感動していた。

「あれも、小さい頃からの力なんだ。なぜか野生動物が大人しくなるんだよ」

「手懐ける能力ってこと？ どういうからくりなんだろう」

「あの時、ヒバリは命の危機だと思つて暴れたんだ。だから命の危機じゃないと

分かれれば大人しくなるってことじゃないか」

「それを『分からせてあげた』ってこと？」

「多分」

「ふーん……」

その時、朝の陽光にビルの窓ガラスが反射して、沙龍の目に入った。

「……？」

なにか、白い影を見た気がする。

時間が一瞬止まったその隙に、割り込んできたぼやけた景色は、いつかテレビで見た映画のシーンか、それとも、今朝見ていた夢の続きかもしれない。

——どうして誰にも懐かない……がお前には懐くんだ？

誰かが自分の口でそんなことを言っていた。

——さあ、なんでだろうね。私のことが好きなんじゃないかな。

黒い髪、黒い瞳の人がそんなことを言った気がする。

穏やかな男の人だ、ということは分かる。

これは、誰だろう。知っているような、全く知らないような。

「……馨？」

ハツとして見上げると、木佐の無表情の顔がある。

これでもだいぶ能面は剥がしたつもりだが、制服を着るとやはりこうなってしまうらしい。

「大丈夫か？　なんか、今、夢の世界に逝ってたぞ」

「うん、大丈夫。昨日、一生懸命テスト勉強したので、ちよっとお疲れみたい」

「一生懸命？　九割寝てただろう……」

期末テストは今週末の金曜日からはじまって、週末をはさんで来週の水曜日まである。

そろそろ真面目にテスト勉強を開始しなければならぬのだが、昨日は暑さに負けて、結局一時間もできなかつた。

木佐は同じちやぶ台できちんと物理の勉強をしていたのだが。

「甲斐馨——ッ！」

朝の登校時間のお馴染みになってしまった怒声が背後から聞こえてくると、

「悪い、先に行く」

沙龍はダッシュで逃走した。

「なんだ、動けるんじゃないか」

木佐はそう呟く。

暑さに弱くとも、必然に迫られればちゃんと全速力で走れるのだ。

要するに、あれは贅沢病なのだ、と木佐は思った。

月曜日は木佐の部活があるので帰りは別々なのだが、沙龍は放課後、学校の図書館で時間をつぶしていた。

あのボロ家に帰ってもうだるような暑さが待っているだけなので、できるだけ学校で涼んでいこうという腹だ。

一応、テスト勉強らしきものをしてる。

苦手な古文の教科書を広げ、木佐から借りたノートを見ている。

しかし、今日はあまり遅くならないうちに西新宿のマンションまで郵便を取りに行かねばならない。保科俊からの手紙が来ているだろう。

(ごめんね、俊先生、返事が遅れちゃって)

沙龍が西新宿のマンションにあまり帰っていないということは、もう水上サイドには気付かれているだろう。

探るようなメールは数日おきにくるし、電話も一回あった。

そのたびになんとか誤魔化しているが、保護者というわけでもないし、スポンサーでもない、水上の立場というのは微妙である。だから、彼の物言いはいつもソフトなのだ。その微妙な関係がずっと続いている。

夕暮れになる前には学校を出て、六時前にはマンションの鍵を開けていた。

「オカエリナサイ」

ブリキのロボットが動くものを捉えて久しぶりに仕事をする。

「ハイハイ、ただいま」

沙龍はそう言ったが、ふと立ち止まって、二十センチほどのロボットを掴みあげた。

「……お前も、一緒に来る？」

「」

ロボットはもちろん無言である。

しかし、無機質なプラスチックの目は「お供します」と言っているように見えた。

生活に必要なものはだいたい木佐邸に運び込んであるし、郵便受けは一階にあるので、部屋まであがってくる必要はなかったのだが、ひとつだけ心残りがあったのだ。

上海から持ってきたチャイナドレスである。

数え切れないほどあったドレスや服は、そのほとんどを上海に置いてきたが、張大哥がオーダーメイドしてくれたこの青いシルクの一着だけは、なぜか日本にまで持ってきてしまった。

途中、何度か手放そうとしたのだが、結局、まだここにある。

上海にはあまりいい思い出はないし、こんなブルーの龍が刺繍されたチャイナドレスを後生大事に持っていたところで利はないのだが、捨てるにしても、ちゃんと自分の手で始末をつけようと思ったのだ。

「……」

ブリキのロボットとチャイナドレスを鞆に詰め込んで、玄関の鍵をかけた。多分、もうここには戻ってこないだろう。

一階の郵便受けのほうは、宅配ピザや出張サービスのチラシで溢れ返っていた。

そのチラシ群の中に、細長い白い封筒がある。いつもの保科俊の手紙だ。歩きながら読むことにした。

辞書がなくてもだいたい読めるようになったのだ。最初の頃に比べれば進歩である。



初夏の候、ますますご繁栄の事とお喜び申し上げます。

この手紙が届く頃にはもう梅雨も明けているかもしれませんが、東京の夏は如何でしょうか。体調を崩してなどおられませんでしょうか。

北海道には梅雨がないといわれていますが、それでもこの季節、やはり雨の日は多く感じます。

子供たちは外で遊べないせい、六月は小児科は少し暇になる気がします。

医者が暇なのはいいことですが、余計なことを色々考えてしまつて、夏の雨はあまり好きではありません。

しかし、馨さんの方は少しいいことがあつたのではないのでしょうか。前回いただいた御手紙で、はつきりとは書いていなかったのですが、書の端端にそんな踊るような感じがありました。違つていたらご免なさい。

夏休みは京都に行かれるとか。

私は修学旅行で一回行つただけですが、今思えば、もっとよく見ておくんだつたと思う場所がいくつもあつて悔やまれます。

興味の対象は年と共に変わるものなので仕方がないのですが、馨さんも色んなものを見て来てくださいね。多分、後になって「ここに行っておいてよかった」と思える場所もあると思いますから。

学業のほうはその後順調ですか？

七月に入ったらそろそろ期末テストでしょうか。

実は私は医者のかせに理系の科目が苦手で、数学はいつも赤点ギリギリでしたね。

書道をたしなんでいる関係上、古典や漢文は得意でした。

馨さんも以前、古文が苦手だとおっしゃっていましたが、一度、源氏物語や、平家物語など、平安時代の頃を舞台にした映画などを見られてはいかがでしょうか。

文字ばかりだと気が滅入りますからね。映像から入ると、また違ったモチベーションも生まれるかもしれません。

それでは今回はこのあたりで。

これから益々暑くなりますので、くれぐれもご自愛ください。

馨さんからのお便りを楽しみにして筆を置くことにします。

保科俊

相変わらず美しい筆跡である。

これを読めるようになったことが嬉しい。

(さて、うちへ帰ろう)

なにげなくそう思った時、沙龍は、小さい頃、偃月の袖を引っ張ってそう言ったことを思い出していた。

今と同じような、だいたい橙 色に染まりはじめた空の中で、確かにそう言った。

「さあ、ユエ、泣いてないで、うちへ帰ろう」

それは、家族が居て、あたたかいご飯の待っている場所のことだ。



### 3 偃月の来訪

期末テストが無事終了し、結果も配られ、相変わらずの底辺をさすらう成績に、沙龍はもしかしたら自分は馬鹿なのではないかと思った。人生初めての挫折感である。

今までは比較対象がいなかったし、家庭教師たちはお世辞しか言わなかったの  
で、客観的な自分の学力に気付かなかったただけではないか——？

「ありうる……」

そう考えると、意外にも落ち込んだ。

「都内でも一、二を争う進学校で底辺ってことは、普通の高校ではそこそこの成績  
績ってことだ。それに、日本語がネイティブでないことを考慮すれば、頑張った  
ほうだと思うけどな」

木佐は慰めてくれたが、万年首位の人に言われても虚しいだけである。

終業式の日には人生初の通知表も渡された。十段階評価なのだが、教科ごとに

かなりバラつきがある。あまりよい成績とはいえなかった。

体育と漢文は「十」だったが、家庭科は「一」だった。調理実習で備長炭のよ  
うな黒々としたなにかを作ったのだから、これは覚悟していた。

しかし、美術が「二」なのは納得がいかない。自分ではピカソみたいでかっこ  
いいと自信満々に提出した水彩画の、どこがまずかったのだろう。

「……キサさん、私、馬鹿かもしれない」

通知表に顔をつっ込んだまま、沙龍はそんなことを言っている。

木佐は後ろからそれをヒョイと取り上げて眺めた。確かに、全体的によくはな  
い。

「それに気付かない人生は、果たして幸せか否か——」

木佐が哲学的なことを言っている。

己の程度に気付いたことは僥倖であると木佐は示唆しているのだ。

「“無知の知”は前進だ。確か、論語にもなかったか？ それに似た言葉が」

「知之爲知之、不知爲不知、是知也——」（知るを知るとなし、知らざるを知ら  
ずとなす、これ知るなり）

沙龍がスラスラと原文を諳そらんじたので、木佐は素直に賞賛した。

「さすがだな」

「中国の鼻持ちならぬ知識階級の子女は、大抵丸暗記させられるんだから、全然大したことないんだよ……」

ホームルームが終わって、がやがやとした中、立ち上がった須藤が木佐に雑誌を手渡す。

「前に借りてたやつだ」

「……？」

木佐は受け取ったものの、貸した覚えはない。

しかも、表紙はNBAの選手らしき写真で、どう見てもバスケットボール誌である。木佐が買うはずもないし、読むはずもない。

が、すぐ気付いた。どうやら中に封筒が挟んである。

（掛け金か）

今日は一学期の終業式なので、例の賭けが終了し、配当が配られたのだろう。いくら入っているのか確かめなくなったが、沙龍の前なのでやめた。

「さて、しばらくは学校も休みだが、俺は土日以外、練習に出てる。もし夏休み中に学校に来ることがあったら、差し入れでも持ってきてくれ」

「気が向いたらな」

木佐が無表情に答える。

「じゃ、良い夏休みを。甲斐もな」

まだ通知表に見入っていた沙龍は顔を上げて、笑顔を作った。

「キャプテンもねー」

小川タマミはもう部活に行ってしまったようだ。

長期休みの前なので挨拶をしたかったが、間に合わなかった。

帰る準備をしていると、渡部ユウコが寄ってきた。

「甲斐さん、演劇部の件は色々ありがとう。部長のことは、迷惑かけてホントごめんね」

「いや、神田川くんも考えようによっては被害者だし、まあ、夏休み挟んだらもうそろそろ忘れてくれるでしょ」

「……江戸川だけだね」



どうやら、沙龍は江戸川の名前を本当に覚えていないようだ。

「二学期の文化祭にさ、私にとっては最後の舞台があるから、夏休みはその練習と受験勉強で終わりそうだよ」

「そっか。楽しみにしてるね」

「うん、ありがとう。じゃあ、良い夏休みを」

「渡部さんもねー」

「……」

木佐はごく自然にクラスに溶け込んでいる沙龍に、改めて敬意のこもった視線を送る。

人付き合いのスキルというのは、生まれつき持っているものと、育った環境で得るものと、半々だと思う。

松木などは、どちらも恵まれていた結果、ああなったという典型である。

では、沙龍はどうだろう。

小さい頃は冷めたクソガキだったし、上海では権謀術数しか学ばなかったと本人も言っていたが、そんな生まれと環境で、なぜ普通の高校生活が送れるのだから

う。

それが、木佐にとつては、ちよつとした謎だった。

「じゃ、キサさん、行こう。時間、大丈夫かな」

今日は偃月を向かえに成田空港まで行くのだ。

一人で行くと言ったのだが、木佐も着いていくという。なぜかはよく分からない。

ただ、同居するようになってからの木佐は、今までの沙龍が『木佐小次郎ウオッチャー』であつたように、『甲斐馨ウオッチャー』になっている部分がある。

その人を理解したい、という気持ちの顕れなのだろう。

「大丈夫だろう。馨が途中で買い食いしなければ」

「今日はしないよ」

「空港まで結構かかるんだぞ？ バスだと一回乗ったら降りれないからな」

「うぐ……、だ、大丈夫。我慢する」

そんな話をしながら早足で駅に向かった。

片道二時間の道のりで、何の話をしたかというところ、八月からの京都行きの話である。

木佐はまだぐずっている。行きたくないらしい。

しかし、沙龍はテスト勉強中にいやと言うほど木佐に言われた言葉を、そっくりそのまま返していた。

「嫌なものを先延ばしにしたって、嫌がつてる時間が増えるだけじゃん。だって早いところ終わらせた方がいいに決まってる」

正論ではあるが、木佐はもう一度と戻らないつもりで京都の家を出てきたのだ。その決意を簡単に覆すわけにはいかない。

夏休みが始まる前に沙龍が「どこか旅行に行きたい」と言い出したまではよかった。

しかし「どうせなら観光名所の京都に行きたい」と言い出し、さらに「キサさんも一緒に行こう」と言い出し、挙句の果てには「もう新幹線の切符、二人分買っちゃったから」と言っているのだ。

ぐずりたくもなるというものである。

「湯豆腐が食べたいだけだったら、東京にもいい店はある」

「料理だけじゃなくてー、外人はキョートに行きたいもんなのー」

「だったら、松木さんとでも行ってくればいいじゃないか。彼なら色々と詳しそうだ」

この前、ふとした会話から松木も京都出身であることが判明したのだ。

大学以降は東京住まいだというが、今でも、一年に数度は京都に帰っているらしい。

「マッキーはセレブだから、金銭感覚あわないだもん……」

「でも、僕は中学までしか居なかったし、観光地なんてロクに行ったことないから案内もできない」

「じゃあ、なおさら、一緒に観光しようよ。キサさんと一緒にピカピカのお寺とか見たいよ」

「……」

ため息をつかれた。

あれは金閣寺または鹿苑寺というんだ、という言葉を飲み込んだわけではない

だろう。

本当は観光したいわけじゃないんだろう？ そう言いたいに違いない。

やはり、そこをきちんと説明しないと、木佐を京都まで引っ張っていくことはできそうにない。

「キサさんがもう実家と関わりたくないっていう気持ちは分かるけどさ……、おじいちゃんが明日死んじゃったとして、絶対、後悔しない？ 恨みつらみがあるなら、生きてるうちに、ぶつけに行こうよ。付き合うからさ」

「……」

「それでも絶対家には戻りたくないっていうならそれでもいいからさ、京都旅行だけは行こうよ。観光だけしてうまいもの食べて帰ろうよ」

「……」

木佐は反応しなかった。

仏頂面で窓の外を見ている。

景色といえは、広い畑の中に民家が点在しているような、ありきたりの田舎の風景しかないのだが、そういえば、半年前、この高速道路を通ったんだったな、

と沙龍は思い出した。あの時は小雨が降っていて、空は暗く、景色は全て灰色に見えた。

空港に着いたのは一時過ぎである。少し時間の余裕があったので、遅い昼食にした。

その前に、木佐はトイレで須藤にもらった封筒をやっと確認することができた。十万円には満たなかったが、千円札と五千円札でかなりの厚みになっている。

嬉しい臨時収入である。

一生懸命稼いだ金を「嫌なこと」に使うのはまっぴらご免だが、このあぶく銭で京都に行くのも悪くはないか、と思った。

(あの脳天気が一緒なら、最悪の事態にはならないだろう)

そんな予感もある。

しかし、沙龍の手前、まだ仏頂面はしていようと思った。そんなに簡単にゴリ押しが通ると思われても困るのだ。

偃月の乗る飛行機が到着したというアナウンスが流れる頃になると、沙龍は

「もう二年くらい会ってないから分かるかなあ……」としきりに言っていたが、その心配はまったく無用だった。

木佐でさえ「あ、あれだ」とすぐ分かったのだ。それほど、二人の顔の雰囲気はよく似ているのである。

「ユエー！」

沙龍が叫ぶと、

「哥ココ々ー！」

満面笑顔の偃月が、走ってきた。

そして、外国人のように抱き合ってはしゃぐ二人を、木佐は少し離れたところから見ていた。非常に微笑ましい。

沙龍は百パーセント日本人で、偃月も半分は日本人のだが、二人とも言動はほとんど外国人である。当然だ。日本で育っていないのだから、「こう」もなるだろう。

「前に会った時よりだいぶ背が伸びたよね？」

「うん、伸びたと思う。前に会ったの、上海だよな？ あれから十センチは伸び

た。しかし、哥々は変わらないなあ。ちっちゃいときのままで可愛い」と、くしゃくしゃにされる。

「コラー」

さんざんはしゃいだ後、沙龍は木佐のことを「朋友」と紹介した。

「エート、ハジメマシテ？」

偃月はあるちよこを取り出して片言の日本語で話してみるのだが、日本語歴は一時間という危うさだ。

「もしかして、キサさん、英語喋れる？」

聞いてみると、「日常会話なら」というお答え。

かくして、この二人の意思疎通は英語となった。

偃月は八歳頃からずっと香港育ちなので、ネイティブと変わらない英語が喋れる。一緒に暮らしている義兄の淳馳チュンチーとも普段は英語だそうだ。

沙龍は、英語教育を受けた日本人よりは英語が喋れるという程度で、最近は日本語のほうが得意である。

そして、木佐はというと、何故かとても流暢な英語を喋ることができなのだ



が、京都生まれ京都市育ちのどこで英会話を習ったのだろうかと思いついてから、なんのことはない。実家に外国人がよく出入していたそうさ。

武芸を重んじる黒田家では代々剣術道場も運営している。

そこに日本マニアのセレブリティたちが「ジャパニーズ・ケンドー」を習いにくるそうである。

かれらは数ヶ月、または物好きになると数年単位で弟子入りをするそうなので、幼い木佐小次郎も彼らに遊んでもらったりしていたようだ。

偃月と沙龍が二人きりで喋るときは当然、故郷で使っていた北京語なのだが、木佐が居る時は英語となった。

そして、木佐と沙龍が話すのは日本語だが、これも偃月が居る時は英語になる。

なかなか不思議な光景だった。東洋系の顔立ちの三人が英語を喋り、たまに中国語や日本語がまじるのだ。

「えーと、それでね、キサさんは私の家主でもあるんだけど……」

バスの中でその話をした時は木佐に分からないように北京語を使った。

「家主？」

「今、同居してるんだよね。といつても『そうゆう関係』じゃなくて——」  
木佐がゲイであることは言わないに越したことはないのだが、そこを抜きにして説明するのは難しい。

「は……？ え？ 同居？」

「ルームシェアっていえばいいの？ 家賃とかの関係で」  
最終的にはそう言って誤魔化した。

偃月は素直なので、これで事足りる。

「ああ、ルームシェアか」

「うん、ボロイけど結構広いから、居心地は悪くないと思うよ」  
エアコンはないけどね、と心の中で付け足した。

陽が落ちると少しだけ気温が下がる。窓を開けて扇風機を回せば灼熱のボロ家も少しはマシになった。

ちなみに、この扇風機は粗大ゴミ集積場で沙龍がこっそり拾ってきたものだ。木佐が修理して動けるようにしたのである。

その夜は、木佐の料理がいつも以上に豪華にちやぶ台に並び、偃月はすっかり気に入ったようだった。

同じ顔で同じ食べ方という、誰が見ても紛れもなく姉弟だと分かるのだが、当人は何故気付かないのだろう、と木佐は思ったものだ。

沙龍は食後しばらくしてから、その大事な話を切り出した。

「今日ね、ユエが到着口から出てくる時、会ったことのないキサさんがすぐ分かったっていうんだけど——」

「へえ？ 哥々と俺、似てるのかな？」

「いやー、だいぶ似てると思うんだけど、ユエはそう思ったことないの？」

「まあ、同じ家で育つと同じような顔つきになるのかなーとは思う」

「そ、そう……。じゃあさ、碧姐々とユエは？ 似てると思う？ 私はあんまり似てないと思うんだけど」

「そうかー？ んー、そうかなー？ そういうの考えたことないけど……。言わ

れてみれば似てないかな？」

「だってさ……」

木佐は後片付けをしているし、二人は北京語で喋っているので細かいところまでは分からないが、例の話をしているのだろうということは分かる。

しばらく、偃月の声が聞こえなくなった。

真実を知って放心しているのかと思って見に行ってみると、そうでもない。

「ごめんね。驚いたでしょ？ 言わない方がよかった？ って、言ってから聞くことじゃないんだけど」

「いやー、驚いたけど……、うん、ショックではないかな……？ あれ……？」

えーと？ ということは、俺と哥々って、腹違いの姉弟なん!？」

「うん。だから、さつきからそう言ってる」

「豊爸爸が父親じゃないってことより、そっちが驚くわ!!」

「そ、そう？」

「哥々が本当は哥々じゃなくて姐々チエチエだって知った時以上に驚いたわ!!」

「アハハ……」

偃月が沙龍のことを「哥々」と呼ぶのは最近でこそ冗談だが、昔は大真面目だったのである。

小さい頃の沙龍は性格も体型も少年のようだったし、偃月にはもともと五人も姉が居たので、一人くらいお兄ちゃんが欲しいという願望もあって、そう思い込んでいたのだ。

そして、偃月のその勘違いを、大人たちは面白がって訂正することなくきてしまったので、七歳くらいになった時に、ずっと兄だと思っていた人が実は姉だったと初めて気付いた偃月の驚愕は、天地がひっくり返るほどであった。

「そっかあ……、弥太郎さんが父親なんだな……。だから、俺にも龍穴の場所が分かったのかな」

遠くを見るような瞳で、偃月が呟いた。

さつき自分で言っていたように、ショックはそれほど受けていないように見える。

彼もまた、故郷の村の異常性をすっかり認識していたのだろう。

自分達は漢王朝の臣下の末裔なのだと言偃月は聞かされて育った。

そして、役割はただ一つ。この中華の大陸を統べる、ただ一つの龍穴を守ることなのだ、と――。

「そういえば、小さい頃、大人たちに内緒で一緒に行ったよね。村外れにあるあの大きな洞窟」

その時、沙龍は迷ったのだ。

普段は近付いてはいけないといわれているその場所に、偃月と冒険気分で出かけた時、広い洞窟の中で方向感覚を失い、あやうく遭難しかけた。

しかし、偃月には行く道が分かっていたようだ。

「哥々、こつち――」

なにかに導かれるように、その場所に赴いた。

そこだけ天井が抜けたようになっていて、洞窟内の色んなものが月光に反射し、幻想的な風景を作っていた。

「わあ、キレイだねー」

あれは水晶だったのだろうか。

ヒカリゴケかもしれない。

十年以上経って、なお、忘れられない風景だ。

そこそが、故郷の村が二千年間守っている龍穴だと知ったのはその後しばらくしてからのことである。

「今ね、その甲斐弥太郎のことを調べてる。判明したことはほとんどないんだけど」

木佐が食後のコーヒを持ってきてくれたので、英語に変えて言った。

「そうか。俺も独自に調べてみるかな……」

「え、なんで？」

「そりゃ、父親だと分かったからには調べたいもんだろう？ ただでさえ謎多き人だし。……っていうか、じゃあ、哥々はなんで調べてるんだ？」

「うーん？ まあ、成り行きというか……」

この前もそんな風に説明した。

甲斐弥太郎のことを調べるのは、あくまでもついでであって、メインではない、と。

「哥々は変わってるよな。自分のルーツが気にならないのか？」

「それは僕も聞きたい」

木佐が横から口を挟んだ。

こだわりがないというのはドライにも自由にも見えるのだが、もしかしたら感情が壊れてしまった結果でもあるのではないかと木佐は思うのだ。

「うーん？ それはよく分かんないな」

沙龍は恐らくそれをドライだとも壊れたとも自覚していない。

そういうものだと思っただけなのである。



#### 4 そうだ、京都に行こう

木佐邸にマグカップが一つ増え、しばらくは木佐と偃月が一日置きに料理番をすることになった。

偃月の作る料理は基本的には中華なのだが、マニユアルさえあればわりと何でも作れるタイプだということを、沙龍は初めて知った。

「我が弟ながらたいしたものよ……」

台所の小さなテーブルについて、冷たい麦茶を飲みながらその雄姿を見守る。

このキッチンテーブルは手狭なので、食事には使われない。料理人たちがサブテーブルとして使うだけである。

あとは、沙龍がたまに深夜一人でカップラーメンをすすする時に使う程度である。

「淳兄は料理作れないんだ。いつも外食で、それだと体壊すから、仕方なく俺が作るようになった、って感じかなー」

偃月が香港で同居している義兄は、李家の長女と結婚した人で、故郷の村にもよく来ていた。

学者なので、自分の専門以外はなににも知らない、という典型のような人物である。

「まあ、居候だし、それくらいはしないとな」

「そ、そっか……」

だいぶ前に、木佐にも似たようなことを言われた気がする。料理を覚えるのは「必然」だと。

自分は今まさに「居候」の身だが、いつも上げ膳据え膳でいいのだろうか、と殊勝にも思つて、やはりカレーくらいは作れるようにならなければ、と思つた。そして、また、家を壊す羽目になつて、木佐に怒られるのは別の話である。

七月の猛暑を三人で過ごすのは楽しかった。

松木を呼んで麻雀もしたし、鎌倉の海にも行つた。

木佐にとっては、初めての若者らしい夏休みになつたといえる。

偃月は一人でもあちこち出かけていた。昨日はアメ横、今日は東京タワー、と

いった具合である。

そうして一週間が過ぎた頃、朝食の席でアジの干物をほぐしながら沙龍が言った。

「そうだ、ユエも一緒に京都に行こうよ。学校は八月いっぱいまでお休みなんだよね？」

香港の教育システムは日本とほぼ同じである。夏休みの日程もだいたい重なるのだ。

「キョート？」

「……」

木佐はその単語が出ると険しい顔になる。

「うん、マツキーにも声かけて、既にこっちはOKもらえたんだけど、ただ行くだけじゃつまらないから、四人でゲームをするの」

「ゲームって？ どんな？」

なんのことはない。

沙龍の言う「ゲーム」とは、所持金ゼロの状態で同日同時刻に東京をスタート

し、誰が一番早く京都に到着できるか、というゲームである。

そのために、せっかく購入した新幹線のチケットは金券ショップで売ってしまったようだ。

「行き先が京都じゃなきや、面白そうなんだがな」

意外にも木佐が反応した。

「京都くらいが一番距離的にいいと思うんだよね。大阪より西だと遠いし、名古屋だと近すぎるし」

これはかなりこじつけである。

「へえ、面白そうだなー」

偃月はすでに乗り気だ。

「こういうのはユエが一番得意そうだけど、日本語ができないハンデがあるから、プラマイゼロな感じでちようどいいし、マツキーは今までセレブな旅しかしたことないだろうけど、あの誰とでも仲良くなれる会話術があるからあなどれないし、木佐さんはコミュニケーションスキルは絶望的だとしても一番手段を知ってそうだから、無問題だと思うんだよね」

「フム……、哥々は？」

「ほら、私は女の子だからそれだけで得するというのがあるじゃん」

「あー……」

「あー……」

と、やる気のない二人の棒読みな反応に、沙龍はムツとした。

「方法はなんでもいいことにしよう。ヒッチハイクでもいいし、一時間で稼いだお金で飛行機のチケットを買ってもいいし、歩いていくのも走っていくのもあり、野生馬を乗り慣らしてもよし」

「日本に野生馬は居ないと思うが……」

木佐が突っ込む。

「強請りたかりの類はNGか？」

「そうだね。それは反則にしよう。車を強奪とかも。人にお金を借りるのも、詐欺も禁止ね」

「フム……」

「それで、一番のりの人にはなにがあるんだ？ 名誉以外でって意味だけど」

優月が聞いてきた。意外にもちやつかりしている。

「ん？ 賞品、あったほうがいい？ 特に考えてなかったけど……、じゃあ、到着した後の旅費、一位の人はタダになるとか？」

「それがいい。乗った」

即答したのは木佐である。

「……」

「……」

あれだけ京都行きをぐずっていたのがこれなので、今後、木佐のことは影で守銭奴またはカネゴンまたはゼニゲバと呼ぶことにした。

ゲームは八月一日、朝八時スタートである。

八月二日が終わるまでに京都駅に到着できなければ、棄権とみなされる。その場合は、一位の人の旅費を、棄権した人が全負担するというルールである。

全員無事に期間内に到着できれば、二位から四位までの人が傾斜配分というこ

とになる。

飲料水一リットルとカロリーメイト一箱、地図、それからテレホンカード三枚だけを持って、四人は東京駅の『銀のすず』に集合した。

現金、クレジットカード、その他金券の所持は禁止なので、財布は審判役に預けることになっている。

その審判役兼連絡係として現れたのは英国紳士風の初老の男性だった。

彫りの深い顔立ちで、それだけでも充分目立つのだが、映画の中でしたかお目にかかれないようなタキシードを着ているので、周囲から浮きまくっている。

「彼は西園寺。僕の実家の執事をしていて、今日のために京都から来てもらったんだ」

松木がそう紹介した。

「お初にお目にかかります。西園寺と申します。皆様、よろしくお願いいたします」

直角に頭を下げた西園寺に対して、

「……あ、はい（ひつじ、さん？）」

「……よろしくお願い（うわー、前時代的だー！）」

「……します（執事だって？ やっぱりこの人、どこかの御曹司なのか……）」  
と、三人三様の反応である。

西園寺から四人に小さなボタンのような発信器が渡され、各自それを身につけることとなった。

「わたくしはこれからすぐ京都に戻りまして、京都駅のVIPルームにて皆様をお待ちいたします。発信器の信号をモニターしておりますので、くれぐれも紛失なさいませんように。ゲームをギブアップしたい時、またはなんらかのトラブルに見舞われた時には、わたくしめの携帯電話にご連絡ください。なお、他の参加者の現在位置などについてはゴールするまでお教えできません」

この紳士、フルネームは西園寺ピエールというらしい。日英のハーフなのだそうだ。当然、英語が堪能である。偃月も一安心というわけだ。

「では、皆様のご健闘をお祈りしております。……若、ファイトですぞ！」  
西園寺が激励するも、松木は少し及び腰である。

「んー、馨君の見立て通り、みんなそれぞれ得意、不得意分野があるから、それ



ほど不公平ではなさそうだけど……、やっぱり運次第かなあ」

松木はトレッキングをするつもりなど毛頭ない、といったおしやれな格好である。

対して、偃月は今からゴビ砂漠を横断しそうな格好だ。

このあたりにも、既に意気込みの差が出ている。

沙龍はTシャツに短パン、木佐はなぜか制服姿で、今はネクタイを外している。

そうして、午前八時、四人はめいめいにスタートを切った。

偃月は、王道のヒッチハイクを行うつもりで、東京駅を出ると徒歩で谷町ジャンクションまで行くことにした。そこで車が拾えないようだったら、さらに用賀まで歩くつもりである。要するに、高速道路に入る手前で効率よく西行きの車をつかまえるつもりなのだ。

松木も似たような思考で、しかし、彼の場合は皇居をぐるっと北側に回って四谷に向かった。東京から京都まで自動車で行く人というのは意外と少ない。仕事で往復する人はほぼ新幹線を使うはずである。だから、こまぎれに行く方が却つ

て早いのではないかと踏んだ。四谷から甲州街道に入り、さらに八王子から小牧まで中央道を使うルートのほうが有利だと考えたのだ。

沙龍はというとそのまま東京駅周辺に居残り、なんとか新幹線代を稼ぐ金策に出た。雀荘さえあれば一財産は作れるのだ。ただし、八重洲方面には少し繁華街があるとはいえ、朝からやっている雀荘があるとは思えなかった。半日くらいは無駄にするしかない。

そして、木佐はネクタイをきっちり締めてから迷うことなくみどりの窓口に向かった。人に金を借りるのも強請るのも禁止だが、「もらう」のは特に禁止されていない。その盲点をついたのである。

若い女性は警戒心が強いので、年配の女性をターゲットにした。自分の容姿をいまこそ最大限に利用する時である。

「あの、すみません……」

「……はい？」

眼鏡をかけた老婦人が振り向いて、少し驚いたように目を見開いた。

その反応に、

(いける)

と木佐は直感した。

土曜日の朝である。婦人の洒落た格好は、週末を利用して、遠方の友のところ  
に遊びに行くといったところだろうか。

連れは見当たらないので、未亡人かもしれない。

「突然こんなことを言って恐縮ですが、京都までの交通費を融通してもらえない  
でしょうか」

案の定、婦人は眉をひそめる。

しかし、これは普通の反応だ。

まずはこの警戒を解かなくてはならない。

学生証を手渡して、じっくり見てもらうことにした。

「僕は木佐小次郎といいます。新宿高校の三年生です。帰省しなければなら  
ないんですが、交通費が足りず、まことに自分勝手な申し出なのですが、いくら融  
通していただけると助かります。しかし、苦学生なので、正直に言いますと、お  
返しできるアテはありません。ですので、拝借するのではなく、無心する、とい

うことになりますが」

「……」

婦人は少し考えているようだった。

木佐の全身を失礼ではない程度に見回すと、そつと学生証を返し、こう言った。

「わたくし、今から大阪に行くのですけど、お話相手になっていたただけるなら、切符を二枚買いますわ」

自分で仕掛けておきながら、世の中こんなに簡単にいっていいのだろうか、と思ってしまった。

「よろこんで——」

二時間ちよつとご婦人の話相手をするくらい、安いものである。

乗車してみると、驚くことにグリーン席だった。

老婦人は六本木で働く女社長で、夫とはとうに死に別れ、息子は二人とも独立し、今は仕事は部下に任せ、悠々自適な老後を過ごしている、と言っていた。

彼女は、木佐が正直に「返すアテがない」と言ったところが気に入ったよう

ある。勿論、それも木佐の計算なのだ。

そうして、偃月が用賀近辺をうろろし、松木が四谷で女子大生をナンパし、沙龍が八重洲でぶらぶらしている頃、木佐は既に京都駅の冷房の効いた待合室でアイスコーヒーを飲んでいた。

「三時間でご到着とは素晴らしいですな。手腕を伺っても？」  
預かっていた財布を返しながら西園寺が聞いた。

審判役も兼ねているので、木佐が取った方法を吟味しなければならない。

木佐はざっと説明し、

「嘘はついてないですよ」

と言っておいた。

そして、老婦人からもらった名刺を西園寺に渡した。

「この人に直接聞いてくれてもいいんですが、ゲームの詳細を伝えるのは、ちよつと……。『気の毒な苦学生を助けた』と思っっているでしょうから」

「ご安心を、そんな野暮な真似はいたしません」

もともとが沙龍発案のゆるいゲームなのである。そこまで厳密に審査するよう

なものでもない。それを、松木もうまく西園寺に言い含めてあるようだった。

「お、若は車に乗られたようすな」

発信器のモニタリングしている西園寺が言った。

木佐もその画面を見にいくと、甲州街道と思われる道路を、松木の目印が移動している。

その右隣のモニターには、偃月の目印があった。こちらは用賀から大きく動いていない。

左隣の沙龍のモニターは八重洲の地図のままだ。拡大してみると、目印は『マクドナルド』の中にあつた。かなり細かい場所まで分かるようだ。

（こんな高性能な機材一式を、貸切の待合室に運び込むなんて、酔狂だな……）  
たかが若者の遊びに、テレビ番組を制作できそうなほどの機材をそろえているのだ。よっぽどお金と閑のある人種である。

「木佐様は退屈でしょう。よければ、配下の者に街を案内させますが」

「いや……、僕も京都は初めてではないので、ちよつと一人で歩いてきます」

「そうですか。では、ご休憩されたいときは、ここではなく、土御門家のお屋敷

まで直接お越しいただけますか？ タクシーの運転手に言っていただければ場所はすぐに分かると思いますし、名乗っていたただければすぐお通しできるよう、手配してありますので」

「……え？ 土御門家って？ あの、安倍晴明を輩出した土御門家のことですか？」

木佐はギョツとして聞いた。

「左様でございます」

「……なぜ、そんなお屋敷に？」

「あ、若は何も言っていないのでしょいか……。五郎様のご実家です」

「はい？」

最近、驚いてばかりいるような気がする。

木佐は松木が陰陽師であることも知らなかったし、まして、日本で一番有名な陰陽師である「安倍晴明」の子孫だとは夢にも思っていなかったので、開いた口がふさがらなかつた。

京都育ちの人間にはその名前の重さが分かる。

松木が『土御門』を名乗っていないのも、なにか理由があるのだろう。もしかしたら、境遇は自分と似ているのかもしれない。

(いやー、驚いた、驚いた……)

祇園祭の終わったばかりの京都は、どこか気の抜けた炭酸のようでもあった。外国人の沙龍や偃月は、その名物祭を見たかったのではないかと思っていたのだが、当人たちは「混んでいるのは嫌」と言つて、敢えて七月は避けたのだ。

「まあ、いつでも行けるしね」

いつでもどこでも行こうと思えば行ける——、と沙龍は言う。

実際、この半年で、東京の名所と呼ばれるような場所はだいたい行ったようだ。

その行動力はどこから来るのだろうか。一人で観光名所に行って楽しいのだろうか。それとも観光というよりも、沙龍があちこち巡るのは仕事や義務に近いのだろうか——。最近の木佐は、そうやってあれこれと考えるのが癖になっていた。

未知のものを理解したいという思いもあるのだが、もともと、分析するのが好きなのである。



(やっぱり、東京より暑いな……)

久しぶりの街を歩きながら、木佐は少し後悔していた。

ここにはいい思い出がないのだ。当然である。

それでも沙龍の策に乗せられてここまで来てしまった。妙な気分である。

木佐は烏丸通りでバスに乗り、墓参りに行くことにした。母と祖母の眠る墓所はここからそんなに遠くはない。

その夜の八時頃、土御門邸に李偃月が現れた。

日本語ができないにも関わらず、十二時間で到着したのだから、大したものがある。

既に京都駅で待機している西園寺から木佐の先着を知らされており、自分が二位であることを知っていたようだが、それほど悔しがってはいなかった。

「なかなか西行きの車が見つからなくて。最初に乗せてくれたのは名古屋行きの一運送トラックだったんですが、その後は三台乗り継いでこんな時間になってし

まったんです。でも、楽しかったですよ。日本人はみんな親切で優しいですね！」

偃月は木佐に対してはやや硬い英語、つまり敬語になる。

小さい頃に年功序列を叩き込まれたせいだ。

「そうか。まあ、たまたまだろう。中には賢いのとか、礼儀のなっていないヤツもいるから気をつけてくれよ」

偃月は人がよさそうに見えるので外野はカモられはしないかと心配になるのだが、それでも沙龍と同じ武当拳をマスターしているし、本人はいざとなれば立ち回りも厭わないタイプである。

「哥々はさつき見た限り、まだ東京に居るみたいだったけどな」

「なにやってんだ、あいつは……」

「マツキさんは名神で京都に向かっている最中だったんだけど、どうも途中下車したらしいです。街道沿いのお城で休憩しているんじゃないか、ってミスター・サイオンジが渋い顔で言っていました。意味がよく分からないんだけど、もしかしてお城って隠語ですか……？」

「はあ……。まあ、多分、君のご想像通りだよ」  
ありうる。

ゲームの勝敗よりも、その時その時の刹那的恋愛に全てを賭ける松木ゴローのことだから（しかも彼の場合、対象は老若男女を問わないので始末に負えない）、そういったことを優先させるのは大いにありうる。

結局、松木が到着したのは翌朝で、沙龍はというと、その日の最終の新幹線に乗った、という連絡がさつきあった。

いったい、どうやってお金を稼いで、なぜこんなにも時間がかかったのだろう、と木佐は少し嫌な予感がした。

## 5 土御門四郎雅臣

その日の土御門四郎雅臣は経営している会社の一つがちよつとしたトラブルを報告してきたので、いささか不機嫌であつたかもしれない。

しかし、彼は大抵いつも不機嫌な顔をしていたし、ここ十年、機嫌がよかつたためしなどないので、側近の宮脇はさして気にも留めなかつた。

一九九八年八月二日の夜のことである。

伝統的な寝殿造りを、現代風に改築した土御門邸の母屋の一室で、四郎は眉間に皺を寄せたまま呻っていた。

「ん……？ 誰か京都に来たか？」

独り言である。

宮脇はかたわらに立っているが、返答を求められているわけではないと、長い付き合いで分かっていた。

放っておけば、やがて「じいさまが遊んでいるのか」などと言って、独り言は

終わるのだが、今日は違った。

「東からだ。なにか大きな力が来た」

今度は、明らかに宮脇になんらかのリアクションを求める言い方だ。

「はあ、そうですか……」

とりあえず、そう言うしておく。

こういうことがたまにあるので、宮脇は四郎のことを「鼻が利く」という意味で「犬っころ」とひそかに呼んでいた。勿論、口にはしない。そんなことを言うてしまったら生ゴミを見るような目で「お前は明日から来なくていいよ」と言われるに決まっている。

ただ、宮脇は揶揄しているのでも蔑んでいるのでもない。むしろ畏敬の念でそう思っているのだ。それは宮脇が四郎の高校の後輩だった頃と変わりはない。

土御門家の当主として——ただし本人はあくまでも「姪の藤子とうしが成人するまでの仮の当主」と言っている——の四郎雅臣は、全てにおいて完璧な人物であった。

鍛え抜かれた肉体、磨かれた知性、陰陽師としての技、経営者としての胆力――

。その実力は亡き長兄の一郎よりも数段上ではないか、と宮脇は鼻屑目で思っているのだが、四郎の勘のよさは誰もが認めるものだった。

特に、人の嘘はすぐ分かるらしい。

知り合いの府警の刑事などは「ウソ発見器要らず」などと言って四郎を尊敬しつつからかっている。

さらに、天候の変化や幽霊の気配まで分かるというのだから、もうそれらは観察眼に優れているというより、靈感や第六感ともいべき力なのだろう、と宮脇は勝手に思っていた。

「五郎様がお見えになっっているようですが」

四郎の言う『誰か』は同じように天才的な力を持つ、四郎の弟のことだろうと思っただけなのだが、彼の表情は動かない。

「いや、あんなへっぴこな『氣』じゃない。これは……」

魔王クラスだ、という言葉で四郎は飲み込んだ。

（誰だ……？　なぜ、今、京都に——？）

この街で大きな氣が動けばだいたい分かる。小鬼や妖魔たちがざわめくし、必要なら『じいさま』が教えてくれるからだ。

しかし、こんなにも静まり返ることはない。

まるで京都中の妖異が、ひっそりと息をつめている感じだ。

こんな不気味に静かな夜は人生初かもしれない。

「五郎は離れだな？」

いても立ってもいられず、大股で部屋から出て行った。

広い屋敷なので、誰がどこで何をしているか、いちいち把握していないのだが、今朝から藤子がはしゃいでいるのは知っている。

大好きな『ゴロー叔父様』が帰省したということで、まとわりついているのだろう。

「し、四郎様……？」

宮脇は慌ててついて行った。

普段、四郎がこの母屋から出ることはないし「用がある奴が私に会いにukればいい」というのが彼のモットーなので、客用の離れや、一応は残してある五郎の

部屋などは足を踏み入れたことすらない。

しかし、今日は違った。まっすぐ離れに向かう。そこには昨日から客人が二名、滞在している。挨拶は無用、と最初から伝えてある。なぜなら、自分はこの屋敷の主ではないからだ。現在、この広大な屋敷の所有者は、土御門家の嫡男だった一郎の遺児、土御門藤子なのである。

「五郎！」

両開きの襖を思いつきりよく開くと、部屋の中央でトランプをしていた松木ゴローが驚いて顔を上げた。

十歳くらいの可愛らしい女の子が松木の膝を占領し、その向かいには木佐と偃月が同じく「七ならば」に参加している。

和やかなムードだった。

そこに、いきなり三つ揃いのスーツを着た中年の四郎が現れたのだから、修学旅行中に見回りにきた教師に見えなくもない。

事実、女の子は「やばい」という顔をした。この女の子が土御門藤子とらこである。

普段の就寝時間をだいぶ過ぎているのだから、「シロー叔父様」に怒られても



仕方がない。四郎は藤子の父がわりなのだ。

「シロー兄さん……、母屋から出るとはお珍しい。どうしたんです？ あ、すみません、家主への挨拶が後回しで」

「いや、この家はトーコのものだと何度も言ってるだろう。いや、そんなことはどうでもいい。お前、なにか知ってるな？ 京都に誰を呼んだ？」

最初から詰問態勢である。

松木は慣れているからどうということはないが、偃月などは目を丸くしていた。

「……あゝ、えゝと、正確には僕が呼んだわけじゃないんですけど、そういう結果になっちゃいましたね。事後報告ですみません。誰、といえば、普通の可愛い女の子なんですけど」

兄とはいえ、十歳以上年が離れているので、口調も多少かしまったものになる。

四郎相手にできえそうなるのだから、松木にとって、亡き一郎などは兄というよりは父親に近い存在だった。

「はつきりしないな。で、誰なんだ」

「……」

木佐が松木に「お兄さんですか？」という無言の目配せをしたので、松木はあやふやに頷いた。

だから、短く「お邪魔してます」と言ったのだ。偃月も、木佐を真似て同じように「オジヤマシテマス」と言った。

四郎はそれを受けて鷹揚に頷いただけである。

が、急に思い出したように、木佐をまじまじと見つめた。

「いや、待てよ？ その顔には見覚えがある……」

「……？」

「十二家の黒田に嫁いだ、評判の美人が居たな。それと同じ顔だ。君は彼女の縁者か？」

「……」

いきなり不躰なことを聞く四郎と、その猛烈な勢いに、木佐も押され気味になつたが、

「恐らく、仰る通りですが、初対面の人間に聞くようなことですか？」  
かろうじてそう言い返すことができた。

「無礼なのは承知だ。君のお家事情など知ったことではないからな」

「……」

啞然とする。

久しぶりにこれだけ傍若無人な人間に出会ったような気がしていた。沙龍だつて最初に会った時は随分傍若無人な人間だと思っただが、それとはまったく質が違ふ。

四郎のこれは、自分は特別だからなにをやっても許される、という思考ではなく、「面倒だが、自分以外には居ないので、特別な存在でいてやってもいいぞ」とでもいうようなレベルだ。

木佐がどう言い返そうかと迷っているうちに、四郎の中ではもうその話は終わってしまった、勝手に弟との会話を再開する。

「分かっているのか、五郎。お前はとんでもない厄災を呼び込んだかもしれないぞぞぞ？」

「それは、大丈夫ですよ、兄さん」

その言い方がいつものものにこやかな松木と少し違っていた。

「責任は取れるのか？」

「ええ、多分」

「『多分』じゃ困る。『絶対』と言え」

「この世に『絶対』はないですよ、兄さん。あ、そろそろトークが限界なので、母屋に連れて行って下さい」

「えー、この回が終わるまでって言ったよー？」

四郎に反論させないための、ダシに使われたということが分かって、藤子は口をとがらせた。

それに、夏休み中はいつもの就寝時間を過ぎても大目に見てもらっていたので、今日だけ強制されるのは納得がいかない。

「そうか、もう十一時過ぎか。行くぞ、トーク」

「やだ！ もう少しここに居る！」

藤子は眠そうな顔をしているのに頑として譲らない。

四郎もなんだか言って姪には甘いので、最終的には折れて一人で母屋に戻ったのだが、四郎に追従してきていた宮脇がうまく藤子を言いくるめて連れていくことになった。こういうことは、従者のほうが得意なのである。

「悪いね、宮脇」

「いえ、お気になさらず」

西園寺とはまた違った立ち位置で土御門家のことを知り尽くしている人物である。

しかし、この家の雰囲気は、同じ「京都の旧家」でも自分のところとは全く違うな、と木佐はひっそり思っていた。

四郎という大黒柱が居るせいだろうか。

その点では、当主不在の黒田家がうまく回るはずはない。先代は所詮、先代なのである。

「……で、哥々は本当に最終の新幹線で到着したんですか？」

急に用のなくなってしまうたランプの札を弄びながら偃月が言った。

「西園寺は電話でそう言ってたけど。でも、大丈夫なのかな、馨君。なんでこん

なに遅れたんだらうね？」

「さしずめ金策に失敗したんでしようが……。到着したのならじき来るでしよう」

木佐はそう言ってさっさと寝る仕度をしていたが、沙龍はその日、土御門邸には現れなかったのだ。

土御門四郎が自宅の屋敷の母屋からほとんど出ることがないのは、あそこには安倍晴明ゆかりの「五芒陣」がぎっちり張られており、そのエリア内では彼が無敵だからである——と、ライバルの蘆屋家の人間たちなどは、みな、疑いもなく思っている。

が、実情は少し違う。

五芒陣の中にあってパワーアップされるのは確かだが、そんな鎧などなくとも四郎は外を歩けるし、陰陽師としての力が落ちるわけではない。

ただ、彼が終始母屋で過ごしているのは、庭に封印してあるものから長時間離

れるわけにはいかないからだ。

そこには、三人の兄たちの魂も眠っている。

十年前のことだ。一九八八年（昭和六十三年）の年末――。

三人の命を飲み込んでかろうじて食い止めることのできた禍津神まがつかみの暴走。

しかし、京都という街がなくなりかけたこの事件のことについては、蘆屋家ですら詳細を把握していない。

なぜなら、その禍津神を呼び出し、暴走を引き起こしたのは、あつてはならない人物だったからだ。全てが終わった後、四郎は身内の恥としてこの事件のことについては徹底的に緘口令を敷いた。

この時の元凶ともいうべき土御門晴信はるのぶは行方不明である。生死も分からない。

（奴のことだ、生きてはいるだろうが……）

晴信を完全に打倒することが、藤子が成人して土御門を継ぐまでに自分がやらなければならないことだとも思っている。

だが、気まぐれにやって来る『じいさま』はよくこう言っている。

「そう気負うな、シロー。アレは現世を生きているお前がまともに相手をして勝

てるものではない。そのうちいい案も見つかるよ」

まったく、時間の制約のない世界に生きている輩は脳天気で困る、と四郎は思っているのだった。

今夜も蒸し暑い夜だった。

『じいさま』の気配はわりと近くにある。

が、これ以上は近付いてこないだろう、と四郎は分かっていた。

あの気まぐれな老人は、どうでもいい時にひょっこり出てきて仕事の邪魔をしたりするくせに、切実に助言が欲しい時などにはちつとも出てきてくれないのだ。

宮脇を屋敷に残し、四郎は街に出た。

そろそろ日付の変わる時間である。

こんな時間に外に出ることは珍しいし、さらに一人で歩くというのも滅多にないことだ。

しかし、四郎はそうしなげばならなかった。京都の命運を握る人間として、この禍々しい力の正体は自分の目で見極めなければならぬ。



一方、その頃、京都駅のVIPルームで撤収作業をしている西園寺の隣では、沙龍がソファにふんぞり返って缶ビールを開けていた。当然、この中学生にしか見えない容姿ではアルコールは売ってもらえないので、さきほど西園寺に買ってきてもらったものだ。

「いやー、それでさー、賭け麻雀しようにも、元の掛け金がないってことに気付いたわけ！」

「さようでございますな……」

「我ながらミスったなーって思っで。でも今更ヒツチハイクする時間もないし、で、どうしようかと途方に暮れているところに、なんと、その雀荘にさ、昔の知り合いのことを知ってるって人が居てねー」

沙龍の話はそんな感じで、延々と続く。

木佐なら苛立って「要点だけを的確に言え」と言うところを、西園寺は淡々と相槌を打っていた。さすが、プロである。執事のプロ、といえばいいだろうか。

「その昔の知り合いってのは、嬉し恥ずかし初恋の君っていうか……、ん？ お迎えが来た？」

沙龍が急に話を切って、立ち上がった。

「……？ いえ、特に頼んでませんが。甲斐様はわたくしがお屋敷までお送りする予定です」

「いや……、もう来てる」

沙龍はそう呟きながら、勝手にVIPルームを出て行ってしまった。

シンと静まった京都駅は、まだシャッターは降りていないものの、人っ子一人居なかった。

いや、一人だけ居た。

この蒸し暑い夜に、三つ揃えの上品なスーツを着た男性が立っているのだ。スラリと背が高い。

天井の高い駅構内に、その人はとても自然な佇まいでそこに居た。

いきなり本命だ——、と沙龍はわけもなく思った。

「ようこそ、京都へ」

男性はそう言うものの、あきらかにそこには社交辞令の響きがあった。本音では歓迎していない、と言いたげだ。

「……」

沙龍は男性の三メートルほど手前で立ち止まって、拱手をしてみせた。拳を作って、もう片方の手で包み込むようにする。中国ではポピュラーな挨拶の方法だが、現代ではこれをする人もほとんど居なくなった。

あとは、

「こんばんわ」

一言日本語でそう言っておけば、ひとまず「挨拶」したことになるだろう。

「……五郎がお世話になっているようで」

男性がそう言ったことで、沙龍には彼の正体が分かった。

そういうえば、整った顔立ちはどこか松木に似ている。が、松木よりはずっとシャープだ。

目が細いからそう思うのだろうか。いや、全体的な印象のせいもあるだろう。

「世話になっているのはこちらです、多分」

「……そうですか。京都へは何をしに？」

いきなり本題だ——、と今度は思った。

どうやら、腹の探りあいには苦手なようである。

沙龍はというと、実はそうでもない。政治的なやりとりはむしろ得意な方だ。大抵、相手が沙龍を子供だと思つて侮るからである。

「キサさんの……、いや、黒田の爺さんを説得しに」

「なるほど。ウチに十二家の御曹司が居たのはそういうわけか……」

四郎は溜めていた息を大きく吐いて、天井を仰いだ。

予期せぬトラブルであることは確かだが、沙龍の言うことが本当なら——事実、四郎にはそこに嘘がないことは分かるのだが——、どういう事態を想定すればいいのか大体分かる。

その上で、さて、どうしたものか、と四郎はこの短い間に考えた。

つまり、端的に言えば、沙龍の京都での行動を認めるか、認めないか、である。

もし、沙龍が普通の一般人なら四郎が介入するまでもない。勝手に、親友のお

家騒動に首を突っ込んで、引っ掻き回すなり、解決するなりすればいいのである。

しかし、四郎の目の前に居るのは、四郎に成り代わることのできる存在だ。この脅威を放置していいはずはない。

「……」

沙龍は、それ以上、なにをするつもりもなかった。

媚びる必要も、脅す必要もない。

こちらが脅されるようなことになったら、なにか対抗策を考えなければならぬが、問答無用でいきなり結界に閉じ込められるよりははるかにマシだ、と思っていた。

話を通じるのなら、それに越したことはない。

四郎はひとまずここでは保留にしよう、と思っただけだ。

少し、緊張を解いて言った。

「名乗るのが遅れました。私は土御門四郎雅臣。我が家にご案内しましょう」  
この時、沙龍がなにかを思い出していれば早かったのだ。

が、半年以上前に聞いたその長い名前は、長すぎて、沙龍の脳内からはこぼれ落ちていたようだ。

「甲斐馨です。よろしく。でも、ちよつとやることがあるので、今日はそちらにはお伺いできません」

「……？」

四郎は訝しんだが、沙龍は適当に笑ってみせた。

その沙龍の後ろからは西園寺がやって来る。

「おや、四郎様、なぜこちらに？」

「客人を迎えに来たが、先約があるようだ。我々は帰るぞ、西園寺」

「は、はあ……」

四郎がチラツと視線を向けた外の広場には、宇佐美が居るはずだが、ここからは見えなかった。

シヤオチエ

「小姐——」

行きかけた四郎が立ち止まる。

「もし、この街が、貴女の凶暴な力に侵されるようなことになるのであれば——」

「私を殺します？」

あけすけに言うのだが、四郎もそれを当然のように続けた。

「それしか止める手段がないのであれば」

「うーん、でもそれは、多分、大丈夫だと……」

「多分、か。こころもとないな」

吐き捨てるように言われて、沙龍はなにかを思い出しかけた。

以前、木佐にも指摘された「多分」という自分の口癖は、テレビで聞いたものを真似したはずだったが、それだけではないような気がする。

じゃあ、「ソレ」はなんだろう。

どうして、自分はそんな言葉を使うようになったのだろう。

なにか、大切なことを忘れている気がする。

「シローさん。私は貴方の街を壊したりしないよ。それに、もし最悪の事態になっても、私を止めてくれるのはキサさんであって、貴方じゃない」

「十二家の御曹司にそれほどの力があるとも思えないが……。まあ、いいだろ

う。長旅でお疲れのところ、お時間を取らせた。どちらにお泊りになるのかは知らないが、ごゆるりの滞在を」

「謝謝。そうゆっくりもできないんだけどね」

そうなのだ。皆と合流する前にやっておかなければならないことがある。

実をいうと、東京でもあれこれとやってきた。

この京都市のゲームで、沙龍は最初から一位になるつもりはなかったのだ、と木佐が気付いたのはだいぶ後になってのことだった。



## 6 初恋の君と無責任一代男

二十四時間前に、沙龍が八重洲の雀荘で一儲けしようとしたのは事実である。賭け金などどうとでもなると思った。負ける気はないので、自分自身を賭けてもいいし、いくらか持っているふりをして、あとは圧勝すればいいだけの話である。

しかし、事はそううまく運ばなかったのだ。

「お嬢ちゃん、お父さんを探しに来たのおく？」

「ダメだよ、女の子が一人でこんなところに来ちゃ」

「お？ 家出少女か？ 夏休みだもんな。警察呼ばれないうちに帰りな？ 悪いこと言わないからさ」

などとさんざん言われて、そもそも雀荘に入れてもらえなかったのである。

「まったく、日本はどこまでやかましい国なの？ 上海では子供でも麻雀やってくるよ？」

そう愚痴ったら雀荘の常連らしき中年が反応した。

ハンティング帽を被った怪しげな男だ。

「嬢ちゃん、上海に居たのかい？ おじさんのダチも昔住んでたとかで、たまにあそこの街の話をするよ」

「……ふーん？」

見れば、人相は悪いが身なりはそう崩れてもいない。

八重洲の雀荘なのだから、ここには背広族のサラリーマンか、元サラリーマンたちが集うのだろう。新宿の歌舞伎町とはまた違った毛色である。

「上海に居た日本人なんて、鉄さん以外には知らないけど」

沙龍が言うと、中年男は目を丸くした。

「あれ？ 鉄さんって、鉄太郎さんのことかい？ そのダチのことだよ」

「え……？」

ということ、この中年男と雀荘の入り口で、しばらく興奮気味に話すことになった。

男の名は塩谷<sup>しおや</sup>。数年前に葛飾のほうで“鉄さん”と知り合ったという。

秀囲気からしてただものではないと思ったそうだが、雀荘での鉄さんは負け知らずで、界限ではちよつとした有名人なのだそうだ。

「鉄さんはもう賭け事からは足を洗ったみたいだね。遊びでしか一緒に打つてくれないんだけど、これが強いなのって、もう鬼神のようだね、ありや」  
(ふふん、そりやそうでしょうよ！)

と、沙龍はまるで自分が褒められたような気分である。

鉄太郎に敵う者など、上海の『ラオシー老師』以外には居ない。

「で、その負け知らずの鉄さんは今どこに居るの？」

「仕事変えてないんだったら、まだ葛飾じゃないかな。連絡先知ってるから、電話してみようか？」

塩谷は沙龍の「鉄さんは私のお父さんの友達」という言を信じたようだ。

その信じやすい性質を、却って沙龍の方が訝ったくらいだ。

「ぜひ！」

ということ、沙龍は七年ぶりに鉄太郎に会うことになった。それが八月一日の夜のことである。

しかし、その日は土曜日だったので鉄太郎の都合がつかず、会うのは翌日の日曜日になった。

電話で話す際に塩谷には自分のことは言わないでくれ、と頼んだ。驚かせたい、という意味ではなく、鉄太郎が自分のことを覚えているかどうか、自信がなかったからだ。

「面子が足りないからって口実で来てもらうことになったけど、大丈夫かい？」  
「うん、会えば私のほうはすぐ分かると思うし。待ち合わせは雀荘じゃなくて、東京駅にしてくれたんではしょ？」

「嬢ちゃんの言う通りにはしたけど……。鉄さん、ちょっと怪しんでたよ。やっぱり勘がいいね」

「そりゃ、昔はデカとヤクザの両方に追いかけてたって人だからね」  
もともと、上海には“日本に居られなくなつて”逃げてきた人物なのである。  
そこで老師と出会い、沙龍と出会ったのだ。

「なんか、感動の再会っぽいし、おじさんは行くの遠慮するよ」  
塩谷はそう言ってくれた。

ハンティング帽の奥から覗く瞳はどこか卑屈な感じがするが、わりとどこにも居る下町のおじさんだった。

サラリーマンの成れの果て、なのかもしれない。

そうして、鉄太郎に会いたいがためにゲームを放棄した、という体裁は偶然にも整ったわけである。

ただ、会いたかったのは事実だし、この偶然の出来事があるうとなかろうと、沙龍はゲームなどそっちのけで工作をするつもりだったわけである。

その後は、配給されたテレホンカードを使って、まずは宇佐美に電話した。

そして、迎えに来させると、都内のホテルに向かう。そこには、宇佐美が確保した黒田倫太郎が居るはずだ。

「で、そのリントローさんはおとなしくしてんの？」

狭いビートルの中で、それに文句を言いながら沙龍が聞いた。

答えるのは相変わらずしよぼくれた風体のウサミミこと宇佐美穂である。

「やー、それが、勝手に出張のコンパニオンたちを呼んでの乱痴気騒ぎで、ホテル側に文句言われちゃってー」

「はあ？ 妻子を捨てて逃亡した男が何様よ!? お勤め明けの前科者みたいにしおらしくしてなさいってのよ、ねえ！ いったい、どんなヤツなの？」

「んー、見た目はなにか勘違いしたカントリーウエスタンの出演者って感じだったけどねえ。面構えも不敵な感じでさ……」

木佐小次郎の父親のことである。

その黒田倫太郎については、優秀なウサミミが二週間で見つけた。これには沙龍も特別報酬を出したくらいである。

もしかすると甲斐弥太郎のように手がかりすら見つからないかもしれない、と思っていたのだが、やはり死んだ人よりも生きた人を探す方が幾分簡単らしい。それに、今回のように顔が割れている場合は比較的見つけやすいとのこと。

彼は名前を変えて仙台に居た。一応、警備員のような仕事はしているようだが、正社員ではない。

「キサさんに代わって、きつつーい説教かましてやる。なんか会う前からムカムカしてきた！」

「いや、あの、馨ちゃん、やめてね？ ホテルのワンフロアーぶち抜くとか、そ

ういうのは絶対やめてね？ 損害賠償とか、洒落にならないからね？ ね？」

「私の怒りを少しでも鎮めたいなら、ホテルに着くまでに食事をさせた方がいいな。なにせ、今日はカロリーメイト一箱しか食べてないもんでね」

「そうなの？ まったくへんなゲーム始めちゃったもんだねえ……」

宇佐美はラーメン屋の灯りが見えたところでビートルを停めた。

もう十時過ぎだったが、店内は盛況だった。つまり人気店ということだろう。

その後、ラーメン三杯でお腹のふくれた沙龍が、黒田倫太郎に会うまでにしたことといえば、ホテルの一階のラウンジで待っていた八雲から色々な報告を聞き、ホテルの受付では迷惑料として札束を置き、目を丸くしたスタッフ相手に、ルームサービスのメニューを全品頼んだくらいである。

ちなみに、短パンのポケットに入れてあった発信器はコンビニの袋に入れてラーメン屋の前の植木に引っ掛けてきた。明日、朝になったら回収する予定である。

「私はご当主に会わずに去りますが、どうか、甲斐様、ご寛容に願います。倫太郎様は昔から一癖ある方なので……」

「むしろ、癖がなかったら驚くよ」

そう言ったら、八雲は安心したようだった。

「では、私は一足先に京都に戻っております」

そう言って、影のように去る。

最終の新幹線はとうに終わっている時間なので、車で行くつもりだろう。

彼の現在の雇い主である黒田達彦は、アメリカに出張中である。

その隙を狙っての上洛なのだ。

「よし、行くぞ、ウサミミ」

まるで戦闘態勢のような形相でエレベーターを降りると、既にそこから、笑い声が盛大に廊下に響いているのが分かった。

ロックミュージシャンが打ち上げパーティーでもやっているのか、というくらい騒ぎっぷりだ。

「静まれ、この馬鹿どもが——っ！」

沙龍がドアを蹴破って怒鳴ると、さすがに一瞬シン、となったが、怒鳴ったのが中学生のような女の子だと分かると、水着のような姿の女性たちからは失笑さ



え漏れた。

そうなのだ。ボディコンのドレスはどれも極端に布地が少なく、まるで水着である。

何人かの女性はやかましいディスコミュージックに体をのせて踊っており、何人かは浴びるように酒を飲んでおり、真つ白なミニスカートの女性はこの騒ぎの中心に居るごつい男に抱きすがつているところだった。

「いよー、ルシア！」

男が片手をあげて沙龍を歓迎する。

沙龍の険しい表情は見えていないし、さっきの怒声も聞こえてはいない、といわんばかりの態度だ。

「新しいオネーチャンがきたぞー。さ、マーガレットは、いい子だからしばらく休んでろ。な？ エレイン、俺にも水割り作ってくれ」

なにごともなかったかのようにパーティーは再開される。が、沙龍はこれしきのこと動揺したりはしない。

「ウサミミ、音楽を止めろ」

そう言っておいて、自分はバーの上のアイスバケツを引つつかむと、部屋の中  
央に氷水をぶちまけた。

「資本主義における絶対者、スポンサーが静まれって言ってんだよ！ このプロ  
レタリアートどもが！」

短く悲鳴を上げた女性たちだったが、ただならぬ事態だとやっと理解したの  
か、誰も文句を言わなかった。

宇佐美がはいつくばって電源を引っこ抜いたので、音楽も止まった。

「……」

黒田倫太郎は場違いなテンガロンハットを被った、陽に焼けた肌を持つ、筋肉  
質な男だった。

背は木佐より少し高いはずだが、太い腕や胸板のせいで、だいぶ大柄に見え  
る。

顔立ちは、木佐にはちつとも似ていなかった。似ていなくて心底よかった、と  
沙龍は思った。

最初から気付いていただろうに、倫太郎は今気付いたとでも言わんばかりの

オーバーリアクションをして、こう言った。

「あれ？ お嬢ちゃんがカオルちゃん？ ウサミちゃんのクライアントっていう？ ええっ？ こんなに若いの？ うわー、驚いたな」

なにかこう、深夜の通販番組を彷彿させる。

アメリカ人の男女が大袈裟に宣伝する、例のアレだ。

「エグザクトリー」

この似非アメリカンな男に対する最大の嫌味で言ったのである。

が、倫太郎は嫌味の通じないタイプの男だった。

「もしかしてその気合の入った顔は怒ってるのか？ 勝手にオネーチャンたちを呼んだりしちやまずかったとか？ でも、こんな堅苦しいホテルに缶詰にされちや、女の子と愉快に過ごすくらいしかねえだろ？」

「既にホテル側からうるさいって文句がきてんだよ、バカヤロウ」

「あー、ちよつとはしやぎすぎちやった感じ？」

その後ろではウサミが忙しく名刺を配っていた。

「はい。キミたちは解散、解散。出張費もらってない、とか、そういう人は

居ないよね？ なにかあったら事務所からここに連絡してね」

さつき沙龍に氷水をぶっかけられた女性が、一人、ぶつぶつ言っていたが、最後にはため息をついて部屋を出て行った。

「さて、黒田倫太郎殿——」

沙龍は一人がけのロココ調のソファに腰をおろすと、足を組んで言った。

Tシャツに短パンという子供のような格好だが、その仕草は明らかに十七歳のそれではない。倫太郎にもそれは分かる。

しかし、彼は彼で、十七歳の『老板』にかしづく理由はないし、強い人間に無条件でへつらう男でもない。

「仙台で平穩に暮らしているところいきなり訪ねて行って、こんなホテルに缶詰にして悪かった。しかし、ここまでやって来たということは、私の計画に賛同したからだろうか？」

倫太郎は大袈裟に肩をすくめる。

「まあ、条件つきでな」

「条件？ 聞いてないぞ、ウサミミ」

背後を振り向くと、宇佐美がコーヒーの用意をしていた。

ジュニアスイートなので、簡易キッチンがある。

「いや、言ったよ？ 小次郎君と話す機会を作ってくれるならっていう条件」

「ああ、それか。それは、努力してみる。というか、キサさんを騙してでも機会は作るようにする。その時にキサさんがちゃんと話し合いに応じてくれるかどうか、ってところまでは保証できないけど」

「それでいいさ。あいつには一言言っておかないと、俺も死に切れないからな」  
「……」

その対決の時に、倫太郎の口から出るのが謝罪なのか恨み言なのかは知らないが、どちらでも大して変わらないだろう、と沙龍は思っている。

この工作をしたことで、木佐に文句を言われることも覚悟の上だ。

しかし、和解するにしろ、殺し合うにしろ、なにか行動を起こさなければならぬ、ない、と思った。

木佐はこのままでは前に進めないのだ。

「なら、あとは頃合を見計らって京都の黒田邸に来てくれればいい。順次、連絡

はする」

「あんた、ずいぶん自信があるようだが、黒田の爺さんは俺の父親ながら難物だぜ？ 今は病に臥せってるって話だが、気力は衰えてないだろう。それをどう説得するってんだ？」

「私の育ったところでは、金で買収できないヤツは、金以外で買収しろっていうことわざがある」

「金以外……？」

「つまり、弱みのない人間など居ないって話さ」

「……」

コーヒーのいい匂いが漂う頃になって、ルームサービスが届いた。いいタイミングである。

ラーメン三杯を食べておきながら、さらに夜食メニューを腹に収めるつもりらしい。

その凄まじい食欲を目の当たりにしながら、黒田倫太郎が言った。

「……で、スターリンですら敵になりそうにないあんたの弱みってのはなんなん

だ？」

「昔は弟だったけど、今は倫爸爸パーパの息子かな」

そう言ったら、倫太郎がフツと笑った。

「カレシは二の次かい。昔と随分変わったな」

「……？ カレシはいつも二の次だけど？」

上品な出汁のきいた鯛茶漬をかきこみながらも、いくら夜食メニューとはいえ、もつと腹にたまるものもラインアップに入れてくれるようにホテル側に言うておこう、と沙龍は思った。

翌、八月二日の午後である。

前の晩に、倫太郎と同じホテルの最上階のエグゼクティブスイート——つまり一番いい部屋——に泊まった沙龍はだいぶ緊張した面持ちで東京駅の八重洲口に居た。

なにを着ていくかはあれこれ迷って、最終的には今の自分の身分がすぐに分か

るものがないのではないかと思い、制服にした。日曜日に制服というのもおかしな話だが、部活をしている者などは休みでも制服を着て学校に行くのだから、世間的には問題ないだろう。

勿論、制服は東新宿の木佐の家まで朝一でわざわざ取りにいったのである。

(キサさんが昨日、制服を着てたのも、同じ発想なのかな……)

ふと、そう思った。

ゲームの勝敗は分からないが、木佐が要領よく勝ちにいったのではないかと、という気はする。

偃月は地道だが要領はよくないし、松木はそこまで「勝ち」に執着していなかった。

「……」

昼時になっても日曜日の東京駅は空いていた。

だから、すぐに分かった。

いや、人混みの中ですれ違っても分かるだろう。

七年というブランクがあっても、鉄太郎のイメージは変わっていない。



薄汚れた都会の中にあつて、鈍く光る瞳をした、けだるい獣――。そんな形容をしたくなる男だ。

沙龍いわくの「若い頃に色々無茶やりすぎて、それに懲りて、少し丸くなった感じの人」そのものである。

やや猫背で歩いてくる鉄太郎は、伏せ目がちの目で実は周囲をちゃんと観察している。デカとヤクザに追いかけられていた頃の癖だ、と言っていた。

「……」

グレイのシャツをだらしなく着ており、それだけでも沙龍にとっては懐かしい。

鉄太郎が黒っぽい服ばかり着るのは「汚れが目立たないから」らしい。

だから、黒い服は着ない。あくまでも「黒っぽい服」なのである。

目が合った。

思わず、そらしてしまつたのは沙龍のほうである。

鉄太郎は思い出してはいないが、珍種の猫でも見るような顔をした。

もう一度、沙龍が顔を上げてチラッと盗み見ると、驚くことに鉄太郎がまつす

ぐこつちにやって来る。

(あばばばば……)

逃げたくなった。

心の準備がまだ出来ていない。

なんとさえばいいんだろう。

久しぶり？ いや、そんなありきたりな言葉ではなく――。

えっと、昔はどういう風に話してたんだっけ？

昔は……。

昔は……。

「ナンパじゃないんだが、どつかで会ったか？」

気軽にそんな風に声を掛けられた。

まるで、駅の売店で新聞を売っているおばちゃんに話しかけるような気安さだ。

「……っ」

詰まった。

何も言葉が出てこない。

「いや、女子高生に知り合いは居ないはずなんだが……」

「……」

「その髪の色、どつかで……」

「ネガ那个……」

思わず出てしまったのは母国語のほうだった。日本語での「えーと」という意味である。

それで記憶がよみがえったのか、鉄太郎が「あ！」という顔をした。

「沙龍!？」

完璧な発音で鉄太郎が叫んだ声が、改札口のホールに響いた。

「そ、そう」

「嘘だろ！ お前、今、高校生なのか!？」

「だって、あれから七年経ってるんだよ？ 高校生くらいなるって……」

「はあ、そっか。まあ、俺の七年とお前の七年じゃだいぶ違うんだろが……」

……。いやあ、びっくりした。なんか可愛い女の子が俺のこと凝視してるから、

てつきり、どっかで引っ掛けたヤツかと冷や汗たらしてたんだが……」

「鉄さん、女子高生に手出してるの？」

「んなわけないだろう。真面目に受けるなよ。……って、そうじゃなくて、なんでお前ここに居るんだ？ しかも、あれ？ 日本語？ お前、日本語喋れたのか？」

鉄太郎のほうが狼狽気味になって、やっと沙龍も普通に話せるようになった。

「昨日、八重洲の雀荘で塩谷さんに会ってね、鉄さんのこと知ってるっていうから、連絡してもらったの」

「……？ じゃあ、もしかして面子が足りないってのは……」

「うん、鉄さん呼び出す口実。塩谷さんは今日は来ないよ」

「お前……、まさか、そのナリで雀荘に出入してんじやないだろうな」

「制服ではないよ。それに、そもそも、日本の雀荘に入ったのは昨日が初めてだよ。いや、入れてももらえなかったんだけど……」

鉄太郎には嘘をつかない範囲で説明した。

友達と競って、お金を使わずに旅行をするというゲームをしていること。

雀荘で一儲けしようとしたが、入店拒否されたこと。

「楽しそうな高校生活じゃねえか。それで？ どうやって京都まで行くつもりなんだ？」

「うん、鉄さんに旅費を『もらおう』と思って。ルール上、借りることはできないからさ」

「まあ、二、三万くらい貸す……、いや、都合するのは構わないが……」

「謝謝。じゃあ、今日は半日付き合っつて。南京東路の屋台に行こうつて約束したのに、結局、連れていってもらってないし」

「ああ、そんなこともあったなあ……」

鉄太郎は目を細めて苦笑した。

それは果たせなかった約束として鉄太郎もしっかり覚えてる。

あの頃は、本当にいい加減で投げやりな毎日を送っていた。

今だって大して更生しちやいないが、少なくとも小さな子供と約束したら、それは絶対に守らなければならぬ、とは思ふ。

「日本語はね、半年前につめこみで勉強したの」

「大したもんだよ。俺の中国語よりずっと」話せてる」

そうして、最終の新幹線の時間まで鉄太郎と過ごしたのである。

せつかくだから皇居が見たいという沙龍の要望に応えて、東御苑を散歩し、夕飯は東京ステーションホテルのレストランにした。ほとんどデートである。

鉄太郎は、昔から沙龍のややこしい背景をなんとなく察している。

上海で老師や鉄太郎に会いにきていた時も、必ず黒服が影のようについていたし、子供が知らないようなことも当然のように知っていた。

しかし、はつきりと正体を聞いたことはない。

鉄太郎は、沙龍の本名も、両親が日本人であることも、『蒼龍会』の老板であつたことも知らないのだ。

そして、沙龍もまた鉄太郎の本名さえ知らなかった。

初恋を初恋で終わらせるのなら、それで充分だろう。

十七歳の沙龍はそう思っていた。

## 7 京都に遊ぶ

昨日、沙龍と鉄太郎が皇居を散歩している頃、木佐と偃月は奇しくも京都の二条城を見学していた。

徳川幕府が始まった場所と、終わった場所である。

現在の皇居、つまり江戸城は、徳川家康が入城する百三十年も前に太田道灌どうかんが造ったものだ。

大田道灌の死後、上杉家の所有となっていたところを、北条氏が奪い、さらに、その北条氏から領地を奪った秀吉が家康に下賜した、という込み入った歴史がある。

沙龍と鉄太郎はパンフレットの概要をさらりと読んだ程度だろうが、木佐はそのあたりの歴史の知識を披露しながら、偃月に説明していた。

「徳川家は約二百六十年の長き繁栄を、この二条城での大政奉還をもって終わらせた。時間的には少し前後するけど、清朝と同じ歴史を辿っている。僕が思う

に、一つの血による政治は三百年くらいが限界なのかという気がするよ」

じわじわと汗ばむ気温の中で、二人は天主台の立派な石垣を見上げていた。

日曜ということもあってそれなりに混んではいるが、やはりこの真夏日に好んで観光名所を巡る人はそう多くはない。

が、李偃月は日本の高温多湿はさして気にならないようだった。

「そうか。ヌルハチが後金（※清の前身）を建てたのが一六一六年……。その後、一九一一年の辛亥革命まで三百年弱か。なるほどなー。そういえば、それ以前の明朝も似たような歴史だ」

偃月は香港でも真面目な高校生なので、沙龍よりは中国の歴史に詳しい。

二人は英語で喋っているのだが、偃月の口調はだいぶ同年代相手に使うものになってきた。木佐がそんなビジネス英語じゃなくていいよ、と言ったせいでもある。

そして、二人の流暢な英語には、数人の見物客が思わず振り返っていた。木佐の整った顔立ちも、彼らを振り返らせるのに十分な理由になっているのだろう。

「鎌倉幕府は百五十年で終わったが、これは後継者に恵まれなかったせいだ。室



町幕府は戦国時代を含めて、細々と生き延びていた分を合わせればやはり二百五十年くらいにはなる」

「ふーん……」

その相槌の仕方が沙龍にそっくりだったので、木佐は声を立てずに笑っていた。

早朝に京都に到着した松木は疲れているというので、屋敷の自室で寝ている。沙龍もまだ到着する気配はないし、なら二人で観光でもしようとして出てきたのだ。

そうして、二条城を一通り見た後、偃月が妙なことを言い出した。

「京都で文句なく一番有名な建造物っていうと何になる？」

「“一番”？ それは人によるし、見方にもよると思うんだが……」

「んー、じゃあ一番集客力があるって言えばいいのかな」

「集客力か。だとしたら、清水寺か、金閣寺ってことになるのか。でも、外国人に圧倒的に人気なのは伏見稲荷だっという話だしな……」

「つまり、誰もが認める“一番”がないってこと？ それはちよっと困ったな」

「……？」

なぜ偃月がそんなことを言い出したのかこの時は分からなかった。

木佐の感覚でいうところの「京都で一番有名な建造物」は小さい頃から見上げていた京都タワーになるのだが、集客力は残念ながら一番ではないだろう。

それに、あの悪名高き建造物を外国人の偃月に推薦するわけにもいかないの一言及するのは避けたのだ。

「二姐アルチエにメッセージを残しておかなきゃいけないんだが……」

偃月はそれを中国語で言ったので、木佐には分からなかった。

東京では迷うことはなかったのだ。

誰に聞いてもそれは東京タワーだと答える。

近年、集客力という点では東京ドームや浅草に負けるかもしれないが、東京の顔として、東京で一番有名な建造物として、東京タワーは不動のポジションにある。

「まあ、それだけ京都がずっと歴史の中心地だったってことか……」  
今度は英語で呟いた。この使い分けは無意識である。

その日は夕方から松木と合流し、松木にべったりな藤子とうこも加えて夕飯を食べべ

行った。

翌、八月三日の朝、土御門邸――。

七時という、まだ早い時間なのだが、ちやっかりと朝食の席に沙龍の姿がある。

沙龍は木佐を見ると、卵焼きを頬張りながら「あ、おはよー」と言った。

「……」

なにか言わなければいけないことがあつた気がしたが、この極楽な顔を見ると、どうでもよくなる。

食事中の沙龍は本当に幸せそうな顔をして食べるので、木佐でなくとも小言は後まわしにしたくなるのだ。

沙龍の隣には年配の婦人が居て、おひつからご飯をよそっていた。

「いやー、とても美味しいですー。この卵焼きも絶品ですが、なによりお米が美味しいです！」

「かまどで炊いてるんですよ。息子も孫もそれが当然になつてるので、あまり有り難がつてくれないんですけどね」

この朝食を用意してくれているのは数名の使用人たちであるが、その指揮を取っているのは四郎、五郎の母親にして、藤子の祖母である土御門武子たけこである。

今、沙龍の隣に座って、甲斐甲斐しく世話を焼いている女性だ。上品な和装姿である。

若くして嫁いだので、五人の息子を産んで、孫の居る年になってもまだ充分美しい。

現在は仮の当主である息子の四郎をたてつつ、屋敷の裏方を取り仕切っているようだ。

「……おはようございます」

木佐は広い畳部屋の、沙龍の正面に座って、武子に挨拶をした。

「あら、おはよう」

松木も藤子もまだ寝ている。偃月はなんと五時に起きておにぎりを頬張った後、周囲を走ってくる、と言って出ていったそうだ。なんとも協調性のない面子である。

この朝食の席で、なぜ松木だけが姓が違うのか、武子の口から聞くことができ

た。

といつても、それほどややこしい事情があるわけではない。

成人する前、分家に養子縁組をしたそう。それも、松木の意味で、である。

「兄が四人も居ましたからねえ、アイデンティティーっていうんですか？ やつぱり、土御門の末弟で居るよりは、別の名前を名乗って自由に生きたかったんだと思います」

母親の解釈だとそうなるらしい。

が、松木が後に語ったところによると、遠縁の松木家が子供が居ないので、名前を継いでくれないかと言われたところ、軽い気持ちで応じたというだけの話らしい。

気軽に実家に寝泊りするくらいだから、土御門家を嫌っているわけでもないのだろう。

「……」

木佐は我が身と比べざるを得ない。

松木には理解者も味方も居たのだ。そこが自分と決定的に違うところである。

彼の朗らかな性格は、結局、恵まれた環境が作ったものでないか。

ならば、沙龍いわくの、自分の『絶望的なコミュニケーションスキル』は仕方がない。

ひねくれた思春期を送ってきたのだ。今さら、これは変えられない。

「……キサさん、食べないの？ すっごい美味しいよ？ ご飯のつぶがねー、光ってるの！」

「すみませんね、うちの安物の炊飯器では光らなくて」

ひがみ根性ついでに、そんな言葉も出た。

「まあまあ、そう言わずに食べてみなさいって。あ、おかーさん、ご飯、もう一杯いただけますかね」

何杯目かは知らないが、この調子では三杯は軽くいつてるな、と木佐は思った。

この無遠慮さで気に入られるのだから、世の中、分からない。

「遠慮しないでどんどん食べてね。なんだか、食べ盛りの息子たちに、こうしてよそつてたのを思い出すわあ。あ、そろそろ弟さんも帰ってくる頃かしら？」

そのうち、藤子が目をこすりながら現れ、偃月が汗まみれで戻ってきた頃になって、やっと松木も起き出して来た。

四郎はいつも一人で自室で食べるらしい。

孤高の人なんだね、と沙龍が言ったら、松木が否定していた。

「シロー兄さんはね、新聞を読みながら食事をするのを、みんなにとがめられるのが煩わしいんだよ」

「食事する時くらい食することに集中すればいいのに……」

「食事をしながら何かをしないと、人生無駄にしてる気分なんだってさ」

「うわー、それこそ、人生損してるなー」

シャワーを浴びてきた偃月がさっぱりした顔で言っていた。

晴れてゲームの参加者四人が集合できたということで、昼前に西園寺が現れ、順位を発表し、それぞれの上洛方法などを軽く説明した。

一応、反則行為はなかったという判定である。

「……以上ですので、傾斜配分しますと、二位の偃月様が一割、三位の若が二割、四位の甲斐様が七割負担ということでもよろしいですか？」

「オツケーです」

沙龍は軽く返事したが、木佐に釘をさされた。

「貯金を使うのは禁止だぞ？」

「えー、旅行は『普段の生活』に入らないじゃん？」

「いや、趣味の範疇だ」

最初に『趣味に使うお金も生活費に含める』と決めたのだ。

そのルールからすれば、木佐の言うことは正しい。

「えー、でも、私、貯金以外、お金持ってないし……」

「どっかで稼いでこい」

譲りそうにない木佐に沙龍が途方に暮れていると、松木が助け船を出してくれた。

「木佐君、厳しいねえ。いいじゃない。お金なんて天下の回り物なんだからさ」

「それとこれとは話が……」



「ねえ、知ってる？ 儉約の鬼だった吉宗公の時代、江戸の人たちはみみっちい生活を強いられて辟易していたけど、名古屋では徳川宗春が逆に金をばら撒いて、経済が活性化していたんだよね。それもあって、いまだにあそこの人たちは宗春が大好きなんだけど、僕のところにも、名古屋からわざわざ来てくれるお客さんが居てさ。毎回、気前よくおごってくれたりするんだよ」

「ああ、伝説のシャチホコの国、ナゴヤ民族の話？ 世界一派手な結婚式をするという？」

へんな知識を仕入れてきたらしい偃月が即座に反応した。これが、わざとか天然かは分からない。

「つまり、お金を貯めるのが好きなんじゃないやなくて、使うことが好きな人たちってこと？」

沙龍が聞いた。

「いや、彼らはね、お金をばら撒くことで、それ以上のお金を回収するんだよ。先行投資ってやつかな」

松木の言っていることは木佐のポリシーに対する解決策にはならないのだが、

場の雰囲気はよくなった。

それが彼の役割でもあるのだろう。

「……」

木佐も、十歳上の松木に遠まわしに諭されては黙るしかない。

いくらきちんと自力で生活しているとはいえ、自分達は社会的にはなんの力もない未成年なのだ。

その焦りが木佐をよりストイックにしているのかもしれない。

午後は二手に別れて観光をすることになった。当初からずっと「ピカピカのお寺を見たい」といつていた沙龍は木佐と一緒にいわゆる修学旅行生のようなコースをめぐることになって、少し遠くなるが宇治の平等院が見たいと言い出した。偃月は松木と一緒に行動することになった。

土御門邸を出て、路線バスに乗る。

偃月・松木組はロールスロイスで移動するようだが、「あんな大きな車では却って時間がかかるだろう」と木佐は呟いていた。

車社会のために整備された近代都市ではないのだ。

道幅も狭いし、駐車場も限られている。

「……」

比較的空いているバスの席に座った。木佐は微妙に口数が少ない。

ずっと不機嫌なのは京都という嫌いな街に来たせいなのだが、沙龍の前でそれが顕著に出るのは、やはり気を許した相手だからだろう。

だから、沙龍も気にしていなかった。木佐が朝から自分に何を言いたいのかも分かっていてる。

なぜこんなにも京都着が遅れたのか、昨夜はなにしてたんだ——、と言いたいのだろう。

しかし、自身の複雑な心境もあって、口にはしない。それも分かっている。

「……そんなに早く大人にならなくてもいいじゃん」

さつき松木にたしなめられたことを気にしていると思っただけだ。

が、木佐の反応はない。

「どうせ大人になったら、大人のまま、嫌ってほど寿命まで時間があるんだしー。ハイ」

そう言つて、さつき松木にもらつたキャラクターの箱から、一粒を取り出して木佐に渡した。

遭難した時の非常食にもなるから持つてて、などと言つていたが、松木は大学時代の友人からその習慣を受け継いだらしい。

「早死にするという可能性は考えてないのか」

木佐がやっと反応してくれた。

キャラクターを受け取り、しばらくそれを凝視していたが、最終的には自棄気味に口に放り込んでいた。

また、無言が続く。

窓の外は低い建物の街並みが淡々と続いていた。

天気はいいが、その分、暑い。

沙龍は今日もTシャツと短パンだ。木佐も半袖とGパンである。

「一昨日、母と祖母の墓参りに行ってきたんだ」

二つ目の停留所を過ぎたあたりで木佐が口を開いた。

「そうなんだ」

「なぜか綺麗に掃除されていたよ。もう、木佐の家に血縁は居ないし、土地家屋も売り払ったんだが……」

「そうなんだ」

そこで会話は一旦止まる。

木佐が話さないのなら、そこで終わる話だ。沙龍は聞くだけである。

「母は、戸籍上は黒田姓のまま死んだが、遺骨は木佐家の墓に入れたんだ。祖母と僕で、その方がいいだろう、と判断したから」

「うん」

「でも、今になって、もしかしたら母はそれを望んではいなかったんじゃないかとも思う」

「どうして？」

「よく分からない。なんとなく、そう思うだけなんだけど」

頬杖ついた木佐の横顔は、いつものように無表情ではあったが、余分な力が抜けていた。

これは、そんなに悪くはない状態である。沙龍にはそれが分かる。

「……」

「いや、違うな。母は、父を嫌ってはいなかったんだよ。なのに、僕はそれを認めたくなかったから……」

「それが、ずっと引つかかかってるんだね？」

「多分ね。でも……、女の人は勝手に出て行った連れ合いのこと、どう思うものなんだろう？ どこかで野垂れ死んでいればいいと思ったりはしないのか？ 馨なら、僕よりは分かるんじゃないか？」

「うーん……、私は結婚したことないし、旦那に逃げられたこともないからなあ……。でも」

言いかけて、やめた。

あの旦那じゃ、どこかで野垂れ死んでろ、って思いたくもなるね、と言おうとしたのだ。

だが、黒田倫太郎に会ったことは木佐には内緒だ。

「でも、魂は遺骨や亡骸には執着しないと思うよ」

代わりにそう言った。

「大陸的な考え方もしれないけど、キサさんのお母さんはもし旦那が心配だったり、息子が心配だったりしたら、既にこの世のどこかに転生してると思う」

「……転生？」

「うん。そういう話をよく一番上の姉が教えてくれた。現世に未練がある人ほど早く転生するんだって。でも、魂は記憶をリセットされて別人になって別の生を生きるから、結局、意味ないんだよね」

「そうか……」

「だからさ、キサさんが思うようにすればいいと思うよ。きっと、お母さんは南米あたりで別の人生を生きてるか、あの世で暇つぶしに麻雀してるか、どっちかだもん」

「……」

そんな風に考えることができたら幸せだろう、と思う。

いや、そんな風に言ってくれる人が居ることが幸せなのか。

「次だ」

「うん？」

「降りるぞ——」

木佐が降車ボタンを押して、次の停留所で降りた。

「うわ、ホントにピカピカだー！」

金閣寺を見て、沙龍はひとしきりそんなことを言っていた。

夏休み中だが、平日ということもあって、それほど混んではない。

二人は、この猛暑に京都観光をする物好きなカップルと映るのだろうか。

「んじゃ、次はキサさんリクエストの龍安寺に行つて、その後はお楽しみうずまきの

太秦ー！」

「五時には平安神宮で松木さんと待ち合わせだからな」

寺社はわりと早く閉門するイメージがあるが、夏は六時まで開いているらし

い。

とはいえ、映画村をすみずみまで見学するつもりならあまりのんびりもして  
られない。

「忍者屋敷でネコのサムライと遊ぶんだー」

子供のようにはしゃぐ沙龍が、この時ばかりは見かけと中身が釣り合っている



ように見える。

いつもはどこかアンバランスなのだ。

少なくとも、木佐にはそう見えている。

「日光江戸村と勘違いしてないか……？」

おそらく人生最後の京都だから思いっきり遊ぼう、と木佐は思った。

## 8 千年の都

太秦映画村では沙龍でも知っている時代劇俳優に偶然会えたし、チャンバラ体験もできて、十分に楽しんだ。

見学の最後のメとして、実際に撮影にも使われる蕎麦屋で掛けそばをすするところにした。撮影がない時は、観光客やスタッフ相手に営業しているようである。

机が四脚置いてあるだけの小さな店で、外で立って食べている人も居るし、店の前の床机しょうぎに座って食べている人も居る。沙龍と木佐は店内の机に座らせてもらった。

「美味しいんだけど、なんか違うと思ったら、出汁か」  
井の中の、澄んだ汁を見てしみじみと沙龍が言う。

「東京のは真っ黒だもんな」  
木佐も半日経って、だいぶ表情が和やかになってきた。

掛けそばといえ、ざるそばのツユとそう変わらない色の汁が掛けられて出て

くるのが東京である。あれは濃口醤油の色だ。

対して、京都では薄口醤油を使う。

慣れていないと物足りない気分になるだろうが、沙龍はどちらもいける口だった。

木佐が家では薄味の料理を作るからである。

（あ、そうか。キサさんの料理は基本的に京都の味なんだ。だから抵抗ないんだな、私）

沙龍はそこに気付いたが、木佐に言うへとへソを曲げられるような気がしたので口にはしなかった。

「……夜には料亭に行くんだから、あまり詰め込むなよ」

沙龍がレジ横に並べられたテイクアウト用の稲荷寿司を熱心に見ていたのをそう言ったのだが、既に遅かった。店の人に、五個入りのパックをビニール袋に入れてもらっている。そして、なにやら話し込んでいた。

知らない人と臆せず話せるのはもはや特技だな、と思い、木佐は諦めて眺めていた。

「東京のとだいぶ違うんだね」

今、詰めてもらった稲荷寿司は三角形をしていたので言ったのだ。

「そうですねえ。東京は四角いんですって？ 京都は千年前からずっとこの形ですよ」

と、五十代くらいのおかみさんが素っ気無い感じで教えてくれた。

「へえー」

「……といっても私自身は名古屋出身でしてね、地元では五目寿司を中に入れて、上にいろいろ乗せたりもしますねえ」

「そうなんだ。面白いね」

「お嬢さんはずっと東京の人？」

「いや、実は中国出身です」

「中国地方？ 鳥取とか島根？」

「いやいや、そうじゃなくて、上海です」

「あらー、外人さんだったの。日本語、上手ねえ」

「謝辞。あ、ちなみにその名古屋の稲荷寿司はどこで買えるかなあ？ とつても」

食べてみたい」

最初はちよつと無愛想だったおかみさんが、段々と打ちとけてくるのが木佐にも分かった。

そして、最後はから揚げ二個入りの小さなパックを、サービスとしてつけてくれたのだ。

そういえば、前にもこんなことがあった。二人で歌舞伎町の中華料理店に行った時だ。馴染みのおかみさんが、胡麻団子などをサービスしてくれた。

沙龍が「健気に頑張っている外国人だから」だろうか？

日本の中年女性はそういった部分に同情して優しくしてくれるのだろうか？

いや、少なくとも「健気」はないな、と木佐は思う。普段の沙龍の堂々とした態度に「健気」という言葉はどこを探しても出てこない。ふてぶてしいとさえいえるのだ。

なら、どこだろう。周囲の人間は、この不遜なミニラのどこに親和性を感じるのか。

「……」

木佐が、歩きながら稲荷寿司を頬張っている沙龍をじつと見ていると、

「なに？ 欲しいの？」

そう思われたようだ。

「いや……」

「……？」

「さつき、殺陣たてをやらせてもらったとき」

「うん？」

「ほとんどの人が気付いていなかったようだけど……。あまり本気を出すなよ」

「あー、あれね」

木佐の言は杞憂だ。

沙龍は刀の握り方も、振り方もめっちゃくちゃだったし、指導してくれた先生も半分笑っていたのだ。

しかし、木佐にはその一見むちゃくちゃな型こそが「人間を効率的に殺せる方法」だと分かった。

武術としてはまったく洗練されていない。が、沙龍の槍術に似た日本刀の使い

方は、沙龍にとっては長すぎる武器を最大限に有効活用できる方法なのだ。

斬ったところで、よほど血を流させない限り人は死なない。確実に殺せるのは「突き」である。

Tシャツに短パンで稲荷寿司を頬張っている、この見た目に騙されてはいけない、と木佐はつくづく思う。

「刀は、使ったことあるのか？」

「中国武術で使うものなら大抵触ったかな」

「そうか……」

「ユエはね、日本刀に少し似た、片刃の柳葉刀を使う。私より扱いは巧いよ。私は無手のほうが得意だからね」

「まあ、武器は手放したら、おしまいだからな」

夕方になってもまだ暑さのやわらぐ気配すらない。

冷房の効いたバスに乗って、待ち合わせの場所に向かった。そろそろ五時になる。

「あれ？　ここは、前にも一緒に来たよね？」

沙龍が平安神宮の入り口、応天門の真下に立ってそう言ったのは、明らかに寝ぼけているとしか思えない。

確かにバスの中では数分ウトウトしていたようだが、そこまで意識が混濁するほど寝こけていたわけではあるまい。

「ハア？ 京都初心者が、なに言ってるんだ？」

「……え？ あ、そうか、ここ、京都か……」

ますます意味不明なことを言っている。

沙龍の視線は、まっすぐ前、数十メートル先の大極殿にある。特徴的な赤い柱と緑の屋根瓦の建物だ。

しかし、沙龍の視界の中で、色はあまり関係なかった。

目の前に広がる白い砂だけがかろうじて「私は白です」と自己主張しているが、それだけだ。

そう、色に意味はない。

少なくとも、沙龍が知っている景色の中で、この建物の屋根は緑色ではなかった。



そう、アレは茶色だったはずだ。

北京で見た、故宮の太和殿は。

(ん？ 故宮……？ 確かに似てるけど……)

なにかが違うな、と思った。

自分の記憶の中に、これと似た景色があるのだろう、と漠然と思ったが、それは紫禁城ではない。

根拠はないがそう感じる。

「……馨？」

木佐は心配そうに隣のつむじを見下ろす。

一秒遅れて、沙龍はあいまいに笑顔を作った。

「ん、大丈夫。なんか、お腹すいてボーっとしちやった」

「三十分前にたこ焼きと掛けそばと稲荷寿司を五個食べた人間の言う言葉か？」

「うわあ、改めて聞くと炭水化物ばっかだな。ちゃんとたんぱく質も食べなければ！」

そう言って、本殿の方に歩き出す。

ため息をついて、木佐は辺りを見回した。

「松木さんはまだ来てないみたいだな……」

門の中にいざ足を踏み入れたとき、急に陽がかげった気がした。

入道雲でも出てきたか、と思う間もなく、辺りが見る見る暗くなっていく。

しかし、まだ陽の落ちる時間ではない。

「……!？」

木佐が今度は明確な目的を持って周囲を見回すと、さっきまでちらほらと歩いていた参拝客たちが誰も居ない。

迂闊だった。

新宿の熊野神社で正体不明のものに襲われたことを、もう少し沙龍に追求しておくべきだったかもしれない。

「馨——！」

こんな大きな装置の中では、閉じ込められた側が圧倒的に不利だ。

ちやうど白洲の中央で立ち止まっていた沙龍が振り返って、走ってきた木佐と視線を合わせた後、空を見上げた。

真っ青だった夏の空が、真冬の夜のような墨色に変わっている。

しかし、真っ暗ではなかった。

灯りなどどこにもないのに、視界が利く。

「キサさん、おかしい、コレ……」

沙龍が眩いた。

「ああ、おかしいさ。なにもかも——」

なにか尋常じゃないことが起こったのだ。

少し遠くでは火の粉が舞っている。

火事だ。

街のあちこちで炎が立ち昇っていた。

しかし、音はほとんどなかった。これだけの災害の中では、人の悲鳴や、なにかが倒れる音などが聞こえるはずなのだが、今、この場には風が渡る音しか聞こえてこない。

不気味なくらい静かだった。

「どうということ……?」

数メートル先、闇になっている部分に目を凝らせば、不自然に地面が盛り上がっている。

死体だ。しかも複数。甲冑のようなものを着た、おびただしい数の人間が、重なり合って死んでいる。

「それは僕が聞きたい。以前、新宿でも似たようなことがあったな？ 馨の敵はいつたい誰なんだ？」

「スサノオ」

沙龍はそう答えた。

それ以外の言葉は知らない。

「スサノオ？ それは神の名だろう」

「でも、多分、そうだと思う」

沙龍のはっきりしない返答に木佐は苛立ったが、それ以上は取り合わなかった。

色のない死体の隙間から大きめの太刀を取り出して、刃を確認した。ずいぶん鍛え上げられている。これなら実用に耐えうるだろう。

沙龍を見ると、首を横に振った。自分は要らない、ということだ。

「私も聞きたい。キサさん、ここはどういった場所？ なにかいわくとかあるの？」

「平安神宮は、明治に入ってから新しく作られた場所で、歴史的価値はほとんどないんだよ」

「そうなの。だったら、なぜここなんだろう……？」

歴史的な背景があつてこの場所を選んだのかと思つたのだが、どうやら違うらしい。

ならば、考えても分かるはずのないことは、今は考えるまい。

「熊野神社の時と同じだとすれば、さつき通つてきたあの大きい鳥居を抜ければ、多分、元に戻れると思う。この前よりはいろいろとサイズが違ふけど、まあ、走れない距離でもないし。……あれ？ 鳥居、見えないな……」

応天門から大鳥居までは数百メートルあるのだが、「大鳥居」と呼ばれるだけあつて巨大サイズなので、ここから見えないはずはない。

実際、さつきまでは見えていたのだ。

「……」

木佐もその大鳥居が “あつたはずの場所” を見つめていた。

いくら停電しているとはいえ、これだけ火事で視界が明るいのだから、見えな  
いのはおかしい。

(停電……？ いや、もしかして、最初から電気はない……？)

木佐はやっとその可能性に気付いた。

あの甲冑を見てすぐ気付くべきだったのだ。日本人が見慣れている、戦国時代の甲冑とはだいぶ違って、もっとシンプルなものだった。

手にした太刀の拵えもだいぶ古めかしい。

「で、逃げるのか？」

「いや、私はそろそろストーリーカー野郎を目の前に引きずり出して説教してワンパ  
ン入りたい。キサさんは無理に付き合わなくていいよ」

そう言うと、木佐が苦笑した。

「ここに誘い込まれたのが百パーセント敵の術中で、僕はただ巻き込まれただけ  
というなら、一人で逃げるのもありかもしれないけど……」

「……違うの？」

「いろいろ違うんじゃないかって気がしてきた。今、思い出したんだけど、平安神宮は四神の加護があるんだよ。西の建物を白虎楼、東を蒼龍楼というんだ」

その時、閃光が走った。

しかし、木佐は落ち着いて、襲い掛かってきた白いなにかを斬り捨てていた。

一瞬の抜刀技だ。思わず、見惚れてしまう。

白いなにかは短く悲鳴を上げ、地面にぼとり、と落ちた。

キツネよりは一回り小さい動物だった。物の怪、といったほうがいいかもしれない。全身が刃のようになってる。

熊野神社で襲ってきたものと同じだろう。

「……えーと、つまり？」

沙龍も、次々と襲ってくるイタチのようなものを避けつつ撃ち倒していたが、途中で飽きてきたので、反則技を使うことにした。

精神を集中し、体内に巡る『氣』を一点に集め、それを維持する。放出はしな

い。

これで、悪意を持った弱いものは誰も近付いてはこれない。

いつでも黄龍を呼び出せる状態だ。

案の定、イタチたちは消えてしまった。離れた場所で息をひそめているのだからか。

「つまり、敵に有利なんじゃなくて、この場所は、僕たちにとって有利なんだよ」

木佐は、沙龍のわずかに発光した全身と、額に浮き上がる梵字に気付いた。これは見たことがある。歌舞伎町の乱闘のときにも頭れた印だ。

「四神の加護……？」

なら、なぜ、スサノオはそんな間抜けなことをしたのか。

それは分からない。

が、確かに、いつでも黄龍を撃てるというものすごい負荷のかかった状態なのに体が軽い。こんなに軽いのは初めてである。

「誰か、味方がいるのかな……」



そう言ったところで、四郎の顔が浮かんだ。

彼は間違いなく、現在の京都という街の所有者である。いや、今は守護者といつたほうがいい。

所有できる人はそれを壊せる人、と沙龍は松木に語ったことがあるが、破壊も守護も沙龍の中では同義語である。

壊すことができなければ、守ることもできない。

そういう簡単な理屈だ。

「よし、キサさん、行こう」

今のところ百パーセント味方ではないが、四郎がこの地を選んでくれたのかもしれない。

それは裏を返せば「現在の京都に危害が及ばないように隔離された」ということかもしれないが、どっちみち、沙龍は自分に牙を向く存在を放っておくつもりはないのだ。

当然、殴る気マンマンでいる。

だが、そうそう沙龍の好きにはならないだろう。

この見知らぬ場所と、日時も分からぬ時の中では。

東京で仕掛けてきた沙龍の敵が、黄龍を排除するのに、京都という場所をわざわざ選んだわけではない。

むしろ『彼』はそれを避けたかったはずだ。

なぜなら『彼』の本拠地は神話通りなら出雲であって、京都に縁はないし、最初、東京に現れたのも関東に氷川神社が多く点在するからだ。

神は無敵ではない。そういった足場がなければ『彼ら』は本領を發揮できないのである。

それを、李碧媛へきえんは知っている。

「ん？ もう始まつてるな……」

京都タワーの展望台で、サングラスをかけた背の高い女性が呟いた。

「まったく、探すのに時間がかかったじゃないか。偃月め……」

隣に居たカップルには彼女がなにを言っているのかは分からなかった。それが

中国語だったからだ。

碧媛は長い手足を振り回して踵を返すと、そこらじゅうを走り回って遊んでいた子供に「公共の場で騒ぐな！」と一喝してからエレベーターに乗り込んだ。

## 9 馨の敵は僕の敵

町のあちこちで上がっている火の手は、ちょうどよい灯りになっていた。

すぐに分かることだが、最初、喧騒がまったく聞こえなかったのは、この大火のまさに始まりの時に飛ばされて来たからである。

徐々に人々のざわめき、悲鳴、逃げ惑う足音が聞こえてきた。

木造建築は火のまわりが早い。民家は音を立てて、次々に崩れていく。

そこここに放置された死体は、逃げ惑う人々に踏みつけられ、焼けた柱の下敷きにされるだけだった。

沙龍と木佐の居た現実世界は、一九九八年八月三日の夕方、場所は京都御所からだいぶ東に位置する平安神宮だったはずだが、今、ここは、まったく別の時間、別の場所になっていた。

ただ、平安神宮の本殿も、白虎楼も蒼龍楼も、沙龍のしている景色の中にはちやんと存在している。

「よし、キサさん、行こう」

本殿に向かおうとする沙龍は、そこになにがあるか知っているわけではない。ただ、なにかあるとしたらそこにしかない、という思考で行動しているだけだ。

「ちよつと待て——」

木佐は折れた枝を拾ってきて、湿気を含んだ土の上になにやら描き出した。コンクリートの地面ではできないことだ。

「……？ なにが始まるの？」

「今から、僕が覚えている限りの、千年前の京都の地図を書く。それを頭に入れておいてくれ」

「千年前？ なんで？」

「今、ここが、多分、そうだからさ」

「はい……？」

木佐にそう言われても、にわかには反応できなかった。

（はあ？ 千年前？ あなた、バカですか？）

普通なら逆に木佐に言われそんな言葉を、かろうじて喉の奥に飲み込んだだけだ。

しかし、これはいったいどういうことだろう。

超常現象など、冷やややかな顔で思いつきり小馬鹿にしそうな木佐が、あつさりタイムスリップ説を認めている。

どうやら木佐は、視界が利く限りの、周囲の数少ない情報だけで、その結論にいたったようなのだが、沙龍にはなにがなにやらチンプンカンプンである。

「千年前っていうと、アレですかね。ヒミコとかが居て、占いやってたっていう……」

「遡りすぎだ。千年前は貴族が蹴鞠して、歌会して、夜這いして、怨霊がいて、陰陽寮があつて……」

そう言ったところで木佐も、ハッと気付いた。

（まさか、この状況を作ったのは四郎雅臣か？）

彼ならできるだろうし、やりかねない。

「い、いやあー……、それはないでしょー、ないない。ホラ、こんなん、ただの

白昼夢のちよつとスペシヤル版っていうか？ オズの魔法使いを倒したらすぐ戻れるやつっていうか？」

「じゃあ、そこいらに転がっている甲冑はなんだ？ 映画のロケでもやってんのか？ 違うだろ。彼らは間違いなく死んでるし、身に着けているものは『本物』だ」

「……んー、この人たちはなんで死んでるんだろね。火事を消しにきて殉職したって感じでもなさそうだし……」

沙龍がぶつぶつ言う間にも、木佐はかなり細かい碁盤目状の地図と、それぞれの道の名前を書き終えていた。

そして、おもむろに説明をはじめた。

「京の都は正方形になっているから、迷うことはないはずだ。大内裏はここ。朱雀門はここ。羅城門はここ。この二つの門を結ぶのが朱雀大路だ。幅は滑走路ほどもある」

「形はほとんど大興城（※隋の都）と一緒にだね……」

沙龍も木佐の隣に来て、その詳細な地図を覗き込んだ。

「そして、僕らが居たはずの平安神宮は、実はこの正方形からは少し東に外れた  
ここらへんにある」

つまり、洛外なのである。

平安京は広いようで、やはり現代の都市の規模に比べれば、狭いといわざるを得ない。

「これで、大体、位置関係が分かるだろう？ たとえば、今から大内裏の東側にある陽明門まで行ってこいといわれれば、一人でも行けるな？」

だいぶ無茶なことを言っている。普通の人間なら、今、自分が東西南北のどこを向いているのかさえ分からないだろう。

しかし、沙龍も木佐も「天子南面」（注二）を知っている。つまり、中国の宮殿建築では、天子は必ず北を背にして、南を向くように造られているのだ。

長安を模した平安京、さらにその内裏の再現である平安神宮も、当然、これに倣っているはずである。今、沙龍は平安神宮の応天門を背に、本殿に体を向ける形で、木佐が描いた地図を見ている。

ということは、木佐の言う『大内裏の陽明門』は、沙龍から見て十時の方向に



あるはずなのだ。それさえ知っていれば道に迷うことはない。

「ちよ、ちよっと待って？ 分かるとは思うけど、一人で行動しなきゃいけない事態になりそうなの？」

そんな事態はご免こうむりたいのだが、木佐の顔は大真面目だった。

「はぐれた時のためだ。それに、地理を把握しておくことは、戦術としては基本だからな」

「ああ、そうだね……。確かに」

「僕の実家が守っている偉鑒いかんもん門は大内裏の真北になる。ここだ。現代では遺構すら残っていないんだが、なぜか霊的なパワーはある」

「そういうの、分かるの？」

「分かる。靈感のない僕でも分かるんだから、馨でも分かるだろう」

きっぱりと言いつ切る。

なにか根拠があるのだろうか。

「まあ、ここが本当に千年前の京都なら、今は現物が存在していると思うが……」

……

それならそれで見てみたいという気持ちが木佐にはあった。

あれだけ嫌った実家であり、黒田の血も役目も呪っているはずなのだが、それでもあの門自体をうとましく思ったことはない。

「偉鑿門……って、玄武門だよね？」

「ああ、そう呼ぶ人もいる」

「開かずの門——。何代目かの天皇が出家する際に使って以来、二度と開けられることのなかった門——だよね？」

「よく知ってるな」

玄武門というものは、そういう性質を持っている。

内裏の責任者でもある天子が、その門を使って北側に行くということは、敗走や死を意味する。出家もある意味においては現世における「死」の形の一つだろう。

だからこそ、玄武門はいつの時代も半永久的に固く閉じられているのである。

十二門を守る十二家の中でも、正面玄関である朱雀門を守る藤原家と、北の玄武門を守る黒田家が強い発言権を持っているのも、門の重要性に比例しているわ

けだ。

「うん。キサさんにその門の話聞いた後、いろいろ調べたんだ」  
その言葉には部分的に嘘がある。

本当は「ミスター・ヤクモに聞いた後に調べた」が正解だ。

「じゃあ、地理を把握したところで、今後の対策をしよう」

しやがんでいた木佐が立ち上がった。その顔にはだいぶ余裕がある。  
不可解な現象に遭遇しているというのに、沙龍よりも冷静だ。

「キサさんは、敵がどこに居るのか分かる？」

「少なくともこの本殿じゃないだろうな」

「どうして？」

「さっきも言ったように、ここは敵にとって不利な場所だからさ」

「そっか……」

大鳥居がなくなってしまう以上「鳥居を抜けて元の世界に戻る」というのは叶わない。

ならば、早いところ“本命”を倒して、出口を探しだし、松木が予約してくれ

たという老舗の料亭に行きたいものである。

「じゃあ、どこだと思う？」

「単純に考えれば、敵にとつて有利な場所だろうが……。しかし、  
“つてのは本物なのか？ 八岐大蛇を倒した神だろう？”  
やまたのおろち

「らしいね」

「いったい、なんだって、そんなご大層な神様に喧嘩をふっかけられるようなことになったんだ？」

「原因が分かれば苦労しないよ……」

ため息をついた。

チャンネルコ  
張大哥にはくれぐれも面倒を起こすなど言われてきたので、その言いつけは  
しっかり守っているつもりである。

なのに、沙龍にしてみればトラブルのほうから勝手にやって来てしまった、  
という感じなのだ。

「どんな奴なんだ？」

「顔は見えないんだ。というか、実体があるのかどうかも分からない。一度、渋

谷の氷川神社で、一般人に憑依したような状態で接触してきたけど、あの人は無関係だろうし」

「フム、氷川神社か。京都に、同系列の神社、あつたかな……」

木佐は脳内の引き出しをイメージの中でひっくり返しながらか、探した。その数秒後、

「ああ、系列は違うが、ドンピシヤリなのがあるな」

あつさりと言う。

「どこ？」

「八坂神社だ。ご丁寧に、というか、厄介なことに、一家総勢で祀られている」

「一家？」

「スサノオの奥さんがクシナダ姫というんだが、八坂神社はその二人プラス、愛人やら子供やらが全員ごちやつと祀られている」

「愛人まで？ 大らかだねえ……。じゃあ、もしかして、そのファミリー全員を相手にしなきゃいけないってこと？」

「家庭内別居同然で、誰が何をしているのか把握していないような、ドライな家

族であることを祈ろう」

真顔で冗談を言う木佐に、沙龍も笑った。

頼もしいではないか。

今から死線を越えなければならぬというのに、木佐のこの冷静な落ち着きぶりはまったく称賛に値する。

沙龍は、何度も死地を抜けて、このふてぶてしさを養ってきたのだ。

しかし、木佐はそうではない。彼にはそんな過酷な経験はない。とすれば、やはり、諸々の才能や度胸は天賦なのだろう。

「八坂神社はここから一キロちよつと南に下ったところだ」

「んー、じゃあ、行ってみよつか」

というノリで決めてしまった。

沙龍もさすがに力技だけで解決できるとは思っていないのだが、こういう場面ではまず「do or not」を決めなければならぬ。

しかし「not」の場合は餓死するだけなのだから、選択肢は決まっているようなものだ。

「大内裏におびき寄せることができればベストなんだろうが……。朝堂院を模しただけの平安神宮とは規模が違う。あそこなら広い上に、がっちり四神が四方を護っている」

「そっか。あっちには朱雀門も玄武門もあるんだよね」

もともと、平安京に四神の加護を呼び込んだのは桓武天皇本人だといわれている。

前の都である長岡京は早良親王の崇りによって放棄せざるを得なかったからだ。

都の造営は一大事業である。それを一謀反人の怨霊なごときに邪魔されるわけにはいかない――。

そこで、土地神との契約を成し、四方を四神に護られた強力な都を造ったというのである。

「しかしなー、あのプライドがチョモランマ並の自称カミサマが誘いに乗ってくれるはずもないし……。もう参ったなー、こんなわけのわからない場所に放り込まれてなにが困るってさー、食べ物はどこで調達すりゃいいのよって話で……」

沙龍が文句を言い出したそばで、

「この火事、まさか、安元の大火か……？」

だんだん大きくなる火の手と喧騒に対して、木佐が呟いた。

平安時代末期に起こった大火災のことである。都の三分の一が灰になったという。

木佐は、さつき甲冑の武士から失敬してきた太刀の拵えを見て大体の年代を推測し、「千年前」と言ったのだが、もしこれが本当に安元の大火だとすれば時代は少しずれているかもしれない。といっても百年、二百年は誤差の範囲だ。

「あ、そうだ！」

険しい顔つきの木佐のまえで、沙龍がリュックサックからキャラメルの箱を取り出していった。

「この際、甘いのは嫌とか、そういう贅沢はおいといて、とりあえずこれで三日は生き延びられるな。はい、これ、キサさんの分」

そう言って、箱に残っていた六粒のキャラメルを律儀に三粒ずつに分けた。

「空腹のあまり幻覚が見える手前あたりで一粒目を食べてね」



「……」

そんな極限の状態に陥ったときに、そんな難しい判断ができるかどうかとも怪しいのだが、沙龍は普段と同じ調子で言う。

恐らく、彼女はそういった訓練もしたことがあるのだろう。

「まあ……、そうならないように最大限の努力をするよ……」  
風が強くなってきた。

火事が起こっている場所では酸素がなくなるので、そこに自然と空気が流れていく現象が起こる。この空気の流れは、大規模火災になると、暴風にまでなるのだ。

「時計、もってるか？」

木佐がふと聞いてきた。

「携帯ならある。時間合わせしておこう」

木佐のGショックは軍隊でも使われるほどのタフさが売りなのでこんな状況でもどうということはないが、沙龍の携帯電話は少々こころもとない。

バッテリーは通話に使わないのなら一ヶ月以上はもつだろうが、この精密機械

はあまりアテにしないほうがいいだろうと沙龍は思った。

そして、いざ、出陣という段になって、

「あのさ……」

沙龍が今更とまどい気味に木佐の背中に声をかけた。

「こんな無茶な喧嘩に、本当に付き合ってくれちゃうの？」

そう聞いたら、なぜかムツとした顔で振り向かれた。

「当然だろ。馨の敵は僕の敵だ」

平安神宮の敷地から一步外に出ると、火事の熱気が現実のものとして襲ってきた。

逃げ惑う人の姿はちらほら見かけるが、彼らは沙龍と木佐にはまるで気付いていない。そんな余裕がないのか、あるいは……。

振り返ってみると平安神宮の敷地も建物もごっそり消えている。

「この時代に平安神宮はないから、”あるべき姿”に戻ったってことだろうな」

木佐が言っていた。

“安全地帯”がなくなったことで却って度胸も据わる。

「じゃあ、やっぱり、この時代に存在していない私たちの姿も、ここに住んでいる人たちには見えてないんだらうか」

さつきすれ違った一家は、明らかにそんな挙動だった。

木佐が甲冑の死体から太刀を抜き取れたことからしても、死体には干渉できない。しかし、生者には触れることすらできない。そういうことだらう。

「着いたぞ。笑えるほど、変わってないな」

八坂神社の入り口で、木佐は本当に笑っていた。

この町では時間が止まっているのではないか、と思いたくなる。

赤い柱を持った西の楼門が、火事で明るい夜空の中に粛々と立っていた。

(注一) 『周易』の「聖人南面而聽天下嚮明而治 (聖人南面して天下を聴き、明に嚮ひて治む)」から来ている思想。余談ながら、この一文が「明治」という元号の元にもなっている。

10 じいさまの言い訳

一方、一九九八年八月三日、午後五時十分の平安神宮では松木ゴローと李偃月が到着したばかりだった。いたって平穏な風景のままである。

「ちよつと遅れちゃったねー。木佐君たちは来てるかな」

松木があたりを見渡しても、見える範囲に知っている顔は居ない。

車で移動するから多少遅れるかもしれないと事前に伝えてはいるが、それを見越して向こうもゆっくりしているのだろうか、と思った。

「……」

偃月はなにかを感じている。

風景に異常なところはない。人がまばらに居て、車の行き交う音がして、ただ、暑いだけだ。

どこにも綻ほころびはないし、怪しい気配もない。

しかし、動物的な第六感がなにかを告げていた。

「マツキさん。ちよつと警戒したほうがいいかも」

「……？」

「哥々はああ見えて、時間にはものっそ厳しい。待ち合わせに遅れるってことは今までに一度たりともなかった。なにかあったんじゃないか……？」

「そう……。キミがそう言うなら、おおいに警戒しようか」

松木は、沙龍が東京でなにやら因縁をつけられたことを知っている。

しかも、それは一回ではないし、一人ではない。

相手は人でないものから、ヤクザのチンピラまで、とにかく、幅広く、色々なト

ラブルに見舞われるのが沙龍である。

（そりゃ、あんなご大層なモノを抱えてればね……）

因縁つけられるのも仕方がないのかもしれない。

李沙龍がその魂に宿しているモノの正体を、松木はかなり早い段階で察するこ  
とができた。

最初に沙龍に会った時、『安倍のじいさま』から預かっている十二天将たちが  
ひどく動揺を見せたからである。特に、東西南北を司る四つの力は異常なほど沙

龍に反応した。

式神である十二天将は、自我を持たない。正確に言えば「自我を持つ者から力の一端を借りている」という状態に過ぎないのだが、それでも、「彼ら」は沙龍の潜在的な力の前にかつてない反応を見せたのだ。

「……」

松木は応天門をくぐって、白洲の方を見た。

沙龍と木佐の姿はない。

代わりに、物言わぬ白虎楼と蒼龍楼が視界の左右に鎮座していた。

松木が待ち合わせをここにしたのは、ほどよい中間地点だったからで、大した意味はない。

しかし、考えてみれば、『じいさま』がフラフラしているのは大抵ここか晴明神社だし、なにかあればその『じいさま』が助けしてくれるだろうと無意識で思ったのかもしれない。

「偃月君、もしかしてなんだけど……」

白い砂の上に落ちていた小さな発信器を拾って、松木がつぶやいた。

「うちの身内が、馨君を助けるどころか、とんでもないことをしちやっただとしたら……」

「……？」

偃月がその言葉の意味を聞こうとした時、

「いや……、その前に、あの脚線美の美女に馨君らしき人を見かけなかったか、聞いてみよう」

松木が相好を崩して、門前に佇む女性に近付く。

同時にそちらを見た偃月は思わず息を呑んだ。それは、既に条件反射のようになっっている。

サングラスをしているので女性の顔はよく分からないが、すらりとしたモデル体型だ。ノースリーブの民族衣装のようなものを着ている。

スカートの裾は長いが、大胆にスリットがはいつていて、白い脚が覗いている。松木が「脚線美」を強調したのも頷ける。

「あー……、その人はナンパ男には厳しいから、やめたほうがいいと思うんだけどー……」

偃月の忠告は聞こえない振りをして、ニコニコ顔で女性に話しかけた松木だったが、案の定、短い説教を食らう羽目になってしまった。

「この国のモノノフ武士はいつから、イタリア男の真似ごとを？」

肩を抱こうとした松木の手を、李碧媛の白い手が流れるように動いて阻止した。

「武士ぶしじゃないし……」

いきなり柳葉刀を突きつけられるような事態にならなかつただけマシである。

普段ならそうなってもおかしくはない展開なのだが、碧媛のほうも松木の得体の知れない潜在能力の前に躊躇したのかもしれない。

それに、目の端に偃月の姿が映ったことも、自制をした理由だった。

「二姐アルチエ、なんでここが分かった？」

「久しぶりだな、ユエ」

碧媛はサングラスを外して、微笑んだ。

メールや、一族特有の方法でやり取りはしているが、実際に会うのは数年ぶりである。



わが子を慈しむような抱擁をした後、碧媛は沙龍と同じことを言った。

「ずいぶん背が伸びたな？」

碧媛は百七十センチあるのだが、その女性にしては高い身長を十六歳の偃月に追い越されていることに驚く。

あの「ちっちゃい泣き虫偃月」はどこに行ったのか。

沙龍は「小さな、小さな、砂つぶほどに小さな龍」のままだというのに。

「あれ？ お知り合い？」

きよとんとしている松木には簡単に「姉です」と紹介して、偃月はこの場所をつきとめた経緯を聞こうとしたのだが、碧媛に目配せされたのでやめた。

なにか事情があるのだろう。

「で、一番問題を起こしそうな我が妹はどこに？」

既になにかを予想している言い方だ。

「あー、それが……、どこに行ったのやら」

「やはりここには居ないか。……とところでユエ、沙龍からびっくりするような話  
はもう聞いたか？」

「本当の父親のことか？ それなら聞いた」

「そうか。なら話は早い。お前なら沙龍がどこに飛ばされたのか分かるだろう。お前も保持者の因子を持っているんだからな」

「飛ばされた？ 因子？ って……」

偃月はわけが分からず、碧媛と松木を交互に見た。

といっても、松木も、事情は偃月以上に分かっていないので、説明を求められなくても、なにも返すことはできない。

「その御仁、この神社はどういったいわくが？」

松木を地元の人間とみて、碧媛が聞いた。

「うーん、平安神宮ねえ。大していわくもないんだけど、まあ、あるとしたら……」

と、松木が言い終わる前に碧媛がなにかを短く叫んだ。

そして、腰を落とし、電光石火の早業で手にした細長い札を、松木の背後に投げつけたのだ。

「……!？」

「ちよっ……、アルチエ!?」

松木も、偃月も、驚きつつ身構えたのだが、

「こらこら、そういう反則の技は、堅気の人が驚くから」

そんな間延びした声がした。

どこからともなく姿を現した一人の男性が、松木の横に立っている。

年齢は松木とそう変わらず、顔立ちもどこか似ている。違うところといえば、

えらい時代がかった衣装を着ている点だ。

『彼』が着ているのは狩衣かりぎぬと呼ばれる、平安時代の貴族の普段着である。上品

な薄い色合いで、目鼻立ちの整った『彼』にはとてもよく似合っていた。

「出たな、妖怪——」

碧媛は「普通の人には見えないもの」（それは大抵『物の怪』と呼ばれる低級の化け物であるが、今回ばかりはどうも違うようだ）を、強制的に可視化させたのである。

札を使ったのは師匠の力を借りたからだ。自力だけではできない。

「すみません、ここしばらくはおとなしかったんですが。えっと、一応、妖怪

じゃありませんので……」

松木が恐縮するように言うと、碧媛も第一戦闘配備を第二くらいに切り替えた。

が、まだ、札は構えている。

「じゃあ、なにものなんだ？」

「僕のご先祖ですね」

「——“先祖”？」

碧媛が素っ頓狂な調子で聞き返した。

先祖が子孫に取り憑くなど、そんな例は聞いたことがない。

日本特有の文化なのだろうか。

「ええ、なんか役立たずの背後霊みたいになってるんですけど、正真正銘、千年くらい前に生きていたご先祖様です。若く見えますが、見えるだけで、じじいです。最近の陰陽師ブームで、チャホヤされるもんだから、それに味を占めちゃつて、今のところ成仏する気はないみたいですね」

「こらこら、ゴローよ、偉大なるご先祖を紹介する言葉がそれか？もちっと、

盛り立ててくれてもいいんだよ？」

だいぶ鷹揚な言い方だ。

大して怒ってもいない。

「盛り立てるべき義理があれば、しますけど」

「えー、あるじゃない？ ほら、ご先祖様、生きていた時はいっぱい活躍してくれてありがとう、みたいなの？ こんなイケメンの遺伝子持っていてくれてありがとう、みたいなの？」

「じいさま……、それは今は置いといて。で、なにしてたんです？ ここんとこ、ずっとお姿見えませんでしたか？」

最後にはつきり姿を見たのは大学生の頃だろうか。

四郎のところには現れているのかもしれないが、少なくとも松木はここ四、五年は会っていない。

「んー、実はさー。ゴローが連れて来たあの女の子、だいぶ特殊な力を持つてるよね？ 僕はただ、あの子を追いかけてきた鬼たちが平安神宮に入れないように陣を張っただけだったんだけど……」

「だったんだけど……？」

嫌な予感で促した。

あまりその先を聞きたくない気もしたが、『じいさま』がこういう回りくどい物言いをするときはきまって「言い訳」である。

既にコトは起こってしまったのだ。

「うん、五芒陣を張っただけのつもりだったんだけど、なぜか、時間軸がぶれちゃって。あれはいったいどういうわけなんだろう？ あるいはそれも世界の秩序のひとつということだろうか。村上春樹風。なんちゃって」

「……」

「……」

「……」

ここまでくれば、偃月も碧媛も、嫌でもなんとなく事情が分かってきた。

「どうやら、この『じいさま』がなにかやらかした、ということの間違いはなさそうだ。」

「黄龍は……、その力が作用する限り、時間の制約を受けない。いや、あの神獣

には時間という概念がそもそもないんだ」

碧媛がひとりごちた。

故郷でいわれていたことが本当なら、つまり、沙龍には条件付きで時間旅行ができるのは確かである。

「え、村上春樹はスルー？ 東野圭吾のほうがいい？」

「じいさま、ちよつと黙ってて——」

「マツキさん、やっぱり哥々は同じ場所の違う時間に飛ばされたってことか？」

「その可能性はある……、いや、今となってはその可能性しかない……、かな？」

松木も困り果てた顔をしている。

「……」

「……」

「……」

三人にじつとりと視線を向けられた『じいさま』は焦りながら扇子を取り出し、広げ、パタパタと仰いだ。

「しかし、どうしてそんな余計……、いや、無駄に親切なことを。馨君と木佐君なら、小鬼程度、どうとでもなったでしょうに」

「だって、あの子、シローのお守りみたいなもの持ってたよ？ 身内なんでしょ？ それに、ホラ、あれ」

「シロー兄さんのなにを、ですって？ ……っ!？」

じいさまの指差した方向を見ると、晴天の空に、大きな入道雲が見える。その雲は自然にできたものではないと、すぐ分かった。

禍々しくも、神々しくもある、白きもの――。

神の眷族である小さなイタチが無数に集まって、入道雲に「擬態」しているのだ。

「な、なんだ、あれ？ 昼間っから出るとは非常識なやつらだな」

偃月は無意識に背中に手をやったが、そこに愛刀はない。

「もうすぐお盆だからねえ、スサノオ君も調子にのっちゃったんじゃないかな」  
じいさまが松木から数歩離れて、地面になにか印を書いた。

「スサノオ？ それが沙龍の敵の名か。すさのおのみこと須佐之男命……、日本神話に出てくる神



だな」

碧媛は言いながら、肩にかけていた大きなバッグから長い包みを出して、偃月に手渡す。

中身は小ぶりの柳葉刀である。当然、こんなものを持って飛行機には乗れないので、日本で買ったものだ。自分で使うつもりだったのだが、刀術に関しては偃月の方が上手なので、彼に使ってもらったほうがいいだろうという判断である。

「うん。『初代』ではないんだけどね」

「……？ どういう意味だ？」

「……くるよ」

入道雲を形作っているイタチたちが標的を定めて、矢のように襲い掛かってきた。

が、その時にはじいさまは作業を終えていた。

松木は、じいさまの行動の意味を理解していたので、一步も動いていない。

「詐欺師に使われちゃって君たちも気の毒だとは思うけど……、さいは砕破！」

じいさまが地面に描いた陣が、視界を奪うほどの強力な光を放ち、何百何千と

いう小さな妖あやかしが、その斜光の中に消えた。

一瞬である。

あの無数の敵との長時間の立ち回りも覚悟していた碧媛は、呆気に取られている。

「あなたは、いったい……？」

「僕は安倍あべのせいめい清明といえます。大陸からいらっしやったマドモワゼール」

「……」

長い時間を生きているとどうにも掴みどころのない人物になってしまふのは、碧媛の師匠も同じである。

この平安時代の陰陽師も、ご多分に漏れず奇怪な性格になっているようだった。

土御門家の守護霊にもなっている『じいさま』こと安倍清明に言わせれば、沙龍を排除しようとしているスサノオとは神であって、神ではないという。

彼は「初代」という言葉を使った。「初代」は文字通り神である、という。もしくは、その「神」とは超人的な力を持っていた古代の一族のことかもしれないし、普通の人間だったのが後世の人々によって「祀り上げられた」だけかもしれない。

いずれにせよ、今のスサノオはそれではない、というのだ。

「世界的に見れば珍しいんだけど、日本古来の神々は不老不死じゃないんだよね。神話にも明示されているとおり、わりとあっさり死んじゃったりする。それじゃ、死んだ神は完全に居なくなっちゃうのかというところじゃない。彼らは自分の力と記憶を持った者を転生させて存続させるんだ」

「転生……？」

碧媛が柳眉を寄せる。

「多分、君たちのいう『輪廻転生』とはちよつと違うと思う。普通の人間として生まれてくるはずの者の肉体に、特殊な力と記憶を強引に割り込ませるんだ。だから、二代目以降は純粋な『神』ではないし、普通の人間でもなくなる」

「どうして、また、そんなことを……？」

「理由は僕にも分からないし、彼ら自身にも分かってないんじゃないかな」

「……」

碧媛は、ここ数年、『神』と名のつくもの<sup>の</sup>ことを徹底的に調べている。時には地球の裏側まで行くし、必要なら月にだって行くつもりだ（行ける手段があればの話だが）。日本に来たのも、その仕事の一環なのである。

この国の神は、いま清明が言ったように、世界的に見れば珍しい特徴がいくつかある。不老不死ではないというのもそうだが、<sup>あらみたま</sup>霊魂の二面性というのも特筆すべき点だろう。神の<sup>にぎみたま</sup>霊魂には荒御魂と和御魂があるという。普通なら悪神、善神に分かれるところが、日本の場合、ひとつの神格に両者が共存しているのだ。

「まったく、沙龍もタイミングよく“自称カミサマ”に絡まれているな。……いや、これは偶然じゃない、か。黄龍を助けよという誰かの導きだろうな」

「誰かって？」

偃月が聞いた。

「さしずめ、思い当たるのは一人しか居ないが……」

平安神宮の白洲に立っている碧媛は西の方向を見ている。まだ陽の落ちる気配

はない。水色の空の中に、白い壁と緑の屋根を持つ白虎楼があった。

「……」

ついこの前会ったとき、彼はそれらしいことはなにひとつ言っていないなかったのだが、あのなにも考えていなさそうな脳天気ぶりに騙されてはいけないことも、長年の付き合いで十分承知している。

「それで、問題のスサノオはいまどこに？ 馨君たちを“こちら”に戻す方法はあるんですか？」

松木が急かすように聞いた。

「んー、それがねー、もしかしたらあの女の子と一緒に飛んでっちゃったかもしれないんだよねー……。どこに飛んでったかも僕には分からないし、そもそも、時間軸がぶれたのは僕の方じゃないから、呼び戻す方法とか分かんないし……」

「……」

「……」

「……」

碧媛が、松木に「このじじい、シメていいか？」と聞いていた。

「また“八”か……」

石柱に刻まれた八坂神社の文字を見て、沙龍が呟いた。

日本に来てからは何度かこの数字に遭遇した。

ここに祀られているスサノオが倒したのも「“八”岐大蛇」であるし、この数字は地名やその他固有名詞にもよく使われている。八幡神社、八艘飛び、八咫鳥、八島、八雲……。そういえば、あの控えめな黒田家の従者は無事に京都に着いたのだろうか。打ち合わせ通りなら、黒田倫太郎と共にまだ地下に潜伏しているはずだが、彼が土壇場で誰のもとにつくのか、実は沙龍もまだ読み切れてはいない。

金で動く者なら簡単だ。より大きな資本の方につくからである。

己の信念を決して曲げない人間も簡単だ。彼らは金で裏切ることはないからである。

しかし、八雲のような普通の人間は一番読みづらい。

彼が木佐を大切に思っているのは事実だろうが、それが沙龍の思うレベルと一致するとは限らないのだ。

「なにか気になることがあるのか？」

木佐が動かない沙龍に聞いた。

「いや……。『八』が多いな、と思って」

と、石柱を指す。

「八は日本では末広がりで縁起がいいといわれてるけど、それだけだよ」

「ふーん……？」

沙龍にはよく分からない感覚だった。

まだ、英語圏の「ラッキーセブン」のほうが根拠があるだけ分かりやすい。

(注・野球が起源とされている)

木佐は木佐で、他に気になることがあった。

七世紀に建立された八坂神社は、二十世紀の現代でも変わらず同じ姿を見せている。

三百年を大体の限度として滅ぶ王朝と比すれば、その千三百年という長さは、異例といえた。

王の血が絶え、その肉体は滅びても、建物は人の手を経て千年でも二千年でも建ち続ける。

このような古い街には街の意思ともいえる何かが宿っていてもおかしくはない。

ローマ然り、エルサレム然り。

歴史の古い街には濃い空気が澱んでいる。

それは街自体が時代の激動を、虐げられた人々の怨嗟を、一握りの者たちの栄光を、人々の平穏な暮らしをすべて見てきているからだ。

「周囲の風景がほとんど変わってないってことは、この町はある意味においては時間の流れが存在してないってことじゃないのか……？ 馨はどう思——」

木佐が神妙な面持ちでなにやら聞こうとするも、

「お邪魔しまーす」

いつものように誰にともなく断りを入れ、沙龍は八坂神社の参道に入っ



てしまった。

「……って、人の話を聞けー！」

慌てて追いかけたが、短いコンパスのくせに沙龍はだいぶ前を歩いている。

「まったくもう……」

しかし、木佐はそのまま少し離れて歩くことにした。

こんな状況では、仲良く並んで歩いてもいいことはないからだ。

(敵陣に迷いなく突っ込むってことは、なにか勝算があるのか)

木佐は沙龍の行動をそう判断したのだが、それが大いなる間違いであることにすぐ気付くことになる。

沙龍は、基本的に戦術というものを一切考えていない。

十七年の人生、圧倒的な力で目の前の敵を蹴散らしてきたのが沙龍なのである。神獣の保持者は普段の状態でも常識を超える力を持っているので、小細工などする必要がないのだ。

視界はほの暗いという程度で、夜目のきく者ならそう苦労はしない。参道の左右には、生い茂った木々がざわざわと風を受けていた。大規模火災によって巻き

起こる強風が、ここまで届いているのだ。

参道の先に開けた場所があり、その中央に舞殿ぶでんがある。様々な行事を執り行う、東屋あずまやのような建物だ。四面の軒には提灯がびっしり吊るされており、その全てに火が灯っているので、この舞殿の周囲だけひどく明るい。

沙龍はその灯りの手前で立ち止まっていた。

敵がそこに居たからだ。

「甲斐馨——。大陸より発し、四神を従える力を持つ、中央の土の守護神、黄龍をその身に宿す者——。なぜ、日ひの本もとに舞い戻った」

舞殿に立つ男が言う。

機械的な口調だ。棒読みのセリフのようにも聞こえる。

これは渋谷の氷川神社で聞いた声である。間違いない。

「なんか間違って伝わってるなあ……」

沙龍は腕を組んで、顎を上げた。

この男に挨拶をする必要はない。先に手を出してきたのは向こうなのだ。

木佐は沙龍から数歩下がったところで、舞殿に立つ人間の姿をした男——少な

くともそう見えた——を観察した。

驚くほど、印象が薄い。

顔も体もはつきり見えているはずなのだが、特徴がなにもない。いや、あるのかもかもしれないが、言葉で表現できないのだ。

(なんだ、この男……？ 奇妙だな……)

誰もが認める最高の美女とは、地球上の全ての女性の顔を平均化したものだろうだが、目の前の男もそんな印象だった。

つまり、美しいがまったく個性がない、ということである。記憶に残らなくて当然だ。

男は現代風の装いをしていたが、これも、次に見た時は着物を着ていたとしても、いつ着替えたのか分からないだろう。

沙龍はもとより、敵の装いなどは見ていない。

ただ一点、敵の発する気の流れだけに集中している。

「四神を従えているわけじゃないし、むしろ、キサさんとの個人的な関係で言えば、私のほうが従わされてるんだけど、それはこの際置いておくとして、質問し

たいのはこつちなんだよね、スサノーさん。私は初対面の貴方に喧嘩を売られる覚えはないよ」

「お前の肉体を造った者は、我々とある契約をした。それを破ったのはお前たちだ」

「……!？」

初めて知る事実だ。

沙龍はやつとこの喧嘩の片鱗が見えた気がした。

「肉体を造ったって、つまり、私の両親のこと？ 甲斐弥太郎がなんの契約をしたって？ それに、『我々』ってことは、少なくとも、貴方一人ではなくて、バックには神様連合みたいな団体があるってこと？」

「……」

スサノオは答えない。

ただ、虚ろにも見える瞳で、沙龍を見下ろしているだけだ。

神――。

この国では、八百万の神、といわれている。

山の神、川の神、台所の神——。森羅万象には全てに神が宿っている。

スサノオはその八百万の神の中でも生え抜きのエリートであり、頂点のグループに属している。

そのスサノオにしてみれば、詳しく教えてやる義理などない、といったところだろうが、最終的には「うけい」という言葉を発した。

「古いにしえの約定——。違えてはならぬ誓約せいやくのことだ」

「うけい、か……」

沙龍が以前調べた神話の中にもその言葉は出てくる。

アマテラスとスサノオの誓約うけいとして知られている話だ。

以下は古事記による。

母イザナミの居る根の国（黄泉の国）に行きたい、と嘆くスサノオは、父イザナギに反対され、追放される。

ならば、勝手にしようと、姉であるアマテラスに挨拶してから根の国に行くことにした。アマテラスはというと、弟が攻めに来たと勘違いをする。

そこで、スサノオは身の潔白を証明するために「うけい」をすることにした。

自分から生まれるものが女ならば邪心がないという証明になるので、女の子を生んでみせましょう——、と。

反対に、男なら邪心があるということになるのだが、スサノオは生まれてくるのは女であるという自信があつたのだろう。

ここで、なぜかアマテラスが先に手を出し、スサノオの剣を奪い、噛み砕き、吹き出した息から三人の女神が生まれた。

このアマテラスの行動は意味不明である。ただ、屁理屈をこねるためにやったのではないかと見ることができる。

生まれてきたのが男だったら「あなたの持ち物から生まれてきたのは男だから、やはりあなたには邪心がある」と言うため。そして、もし女だったら「私が生んだものは女だから、私には邪心がない」と言うためではないだろうか。

しかし、その屁理屈は、結果的にはスサノオが主張することになった。

剣を奪われたスサノオは、アマテラスの珠を奪って、男神五人を生む。

そうしてスサノオは言う。珠から男神が生まれたことなど綺麗サッパリ忘れたような顔で。

「私の剣からは女が生まれたので、私は潔白だ！」

これが、アマテラスとスサノオの誓約うけいの全容である。

なんとも不可解な話だが、では、スサノオと甲斐弥太郎の誓約うけいはどのようなものだったのか。

いま、沙龍がスサノオに喧嘩を売られている以上、答えはひとつしかない。

（弥太郎は「黄龍の保持者が大陸にとどまる限り（日本に対する）邪心はない」とでも言ったに違いない）

苦し紛れにそう言っただけなのか、なにか考えがあつてのことなのか、どちらにしても、目の前の事態が変わるわけではなさそうだ。

「つまり、血の話なのか」

さつきから注意深く二人を見守っている木佐が意外そうに呟いた。

いつでも動けるようにはしているが、今のところ、敵に殺気は感じられない。

「甲斐弥太郎は二十代の若さであっさり中国で病死してるところを見ると、本人は自分の余命を知っていて、日本に戻ってくるつもりはなかったんだろう。それで、この国の神々と、いわば不可侵的な契約をした」

沙龍がよく通る声で語り始めた。

これは喧嘩を始めようという態度ではない。ビジネスの口調だ。

「しかし、契約するのは本来、対等な立場で交わされるものだ。だから、それを敢えて『うけい』と言った貴方は正しいのかもしれない。『うけい』は立場の弱い者が強い者に対して行う、自暴自棄の賭けのようにも思える。とすれば、甲斐弥太郎はこの国の神々になにか負い目があったはずだ。それがなんなのか、私には分からないが、それこそが喧嘩の原因だというなら、私はその原因を解決すれば、振り上げた拳はおさめてもらえるのか？」

まずは交渉か、と木佐は少々驚いていた。

チンピラ相手の喧嘩では、問答無用でねじ伏せたのは沙龍の方だった。今回は相手が違ふということだろうか。なにせ敵は神を名乗っている。慎重にならざるを得ないのは分かるのだが……。

「覆水盆に返らず。解決できるような性質のものではない。だから、滅ぼすしかないのだ」

静かに響く声。



「ふーん……。太公望が復縁をせまる女房に言ったセリフか。男女の仲に喩えられちゃ、お手上げだな」

沙龍がそう言うのは、自分が別れた男と縊<sup>よ</sup>りを戻した経験がないからである。

「一度、警告はした。が、お前は去る気はないという。ならば、死ね」

会話の続きのように自然にスサノオが動き、飛ぶような軽やかさで舞殿から降りてくると、巨大な剣を振るい、沙龍に迫った。

「馨!!」

木佐が沙龍の眼前で、その直線的な横なぎの剣筋を止める。

無銘の太刀が震えた。経験したことのない衝撃が手に伝わる。

スサノオのあまりにも正直すぎる動きに、なにか違和感を覚えたのも束の間、

「邪魔をするな、玄武」

「……っ!？」

一瞬の静止。その直後、木佐は数メートル吹き飛ばされた。

桁違いのパワーだ。

確かにこれは人の力を超えている。

（あれは草薙劍くさなぎのつるぎ か!?!）

両刃の巨大な劍は、その持ち主の技量ではなく、劍自体になにか秘密があつて絶大な力を發揮しているように見えた。神話通りなら、スサノオが持つ草薙劍は、八岐大蛇の切り落とされた尾が変化したものである。

沙龍はちやつかりと下がっていて、余波は受けなかった。が、この戦場で立ち止まる余裕は沙龍にもない。スサノオの暴風のような二撃目を両手で受け止めた。衝撃が走る。

しかし、見ていた分、木佐と同じ轍は踏まない。

隙を与えず、直後に、高速で敵の急所に拳を叩き込んだのだ。普通の人間相手なら、これで終わりだが……。

「妙な体技を使う」

スサノオは鋼鉄のように立ち尽くしている。

「不死身か」

思わず苦笑が出た。

予想していたとはいえ、これほどノーダメージだと、今までの十七年の修業は

なんだったのか、という無力感に囚われる。初めての体験だ。

木佐は吹き飛ばされた後、たいしたダメージもなく着地していた（柔術もマスターしているおかげである）。太刀を拾い上げ、刃こぼれがないことを確認したが、この無銘の太刀では自分に勝機はないかもしれない。一瞬、そう思ったが、迷ってもいられない。

「町は大火事になってるようだが、あれを放っておいていいのか？ カミサマ」  
沙龍は少し距離を取って、友達に話しかけるように言っていた。

国家元首であろうと、監獄の中の凶悪犯だろうと、友達のように接しろ。もし、交渉ごとをうまく進めたいのなら――。

張大哥はそう言っていた。

「……我には関係のないこと」

「ふーん？ 京都に縁はないといっても、こうして神社を造って祀ってもらってるんだから、それなりのことはしないといけないんじゃないの？」

「……」

スサノオは答えない。

脚本通りにしか動かない役者のようでもある。

この大火事のただなかに飛ばされたことには、きつとなにか意味があるのだろうと沙龍は思っているのだが、少なくともそこにスサノオの意思はないな、と思った。

木佐が平安神宮で言っていたように、このタイムリープには沙龍の味方寄りの誰かの意思が働いているのだ。とすれば、スサノオにとってこの事態は想定外であり、ホームグラウンドに引きこもるくらいしか策がないのではないか。

「まあ、火を消す力も自信もなけりや、仕方ないか」

これみよがしにため息を吐いて言う。

スサノオはそんな分かりやすい挑発に乗ってはくれなかったが、沙龍の言葉には反応を見せた。

「同じ水を使うとはいえ、治水工事と火消しは違うもんねー。いつだったか、氾濫ばかり起こす暴れ川を見事に治めた人が居たけどねー」

「……川。肥河ひのかわか？」

それは古代での呼び方だ。

沙龍はそれを知っている。

現代では斐伊川ひいかわと呼ばれている川のことだ。

「そう。出雲を悩ませていたあの、蛇へびのように幾筋いくぢんも蛇行へびぎやうしている川のことだ。支流は、そう、“八本”くらいあったかもね」

「……」

そこまで言っても、スサノオはさつき以上の反応は見せなかった。

夢の中に居るような、虚ろな瞳をしている。

やはり、彼は記憶が混濁しているか、そもそも“覚えていない”のだと沙龍は思った。

「なんの話だ？」

横に並んだ木佐が聞いてきた。

「あとで説明する」

といっても沙龍も確信があって言っているわけではない。こんなものはハツタリだ。

たまたま、そのハツタリがなにやら当たっているかもしれない、というだけの

話である。

「お前がなにを知っているのか知らないが、いま、この場には何の関係もない――」

静止していたスサノオがやおら動いて、人体の長さほどもある巨大な剣で地面を突き刺し、次にそれを振り上げるようにして地面を「割った」。

亀裂が沙龍と木佐の間に走り、二人はとっさに左右に飛びのいた。

「うおっ!？」

さらに、局所的な台風が襲う。

大火事のせいで起こっている強風と、スサノオの殺意と、振り回す剣の圧力があわさってできた、暴風である。

縦横無尽に、その嵐が神社の境内を襲った。

これでは近寄れもしないし、満足に目も開けられない。

沙龍は低木を回り込んでちよこまかと動き、木佐の姿を石垣の裏に見つけて合流したあとは、つかず離れずの距離を保ったまま、境内の障害物を縫うようにして走った。

停まっただけではあの巨大な剣の餌食にされる。

今も、かわした剣の斬撃が横手の松の木をなぎ倒していた。

「うーん、こりや勝てないな。キサさん、いったん逃げよう」

「おい……、なにか考えがあるんじゃないのか？」

「別にないよ？ だいたい、いつも出たところ勝負」

「ハア……」

苛立ちを通り越して、脱力してしまう。

こいつに任せてはいけないのだ、と木佐はやっと理解した。

「まあ、とりあえず、体勢を立て直す時間は必要、か……。南の門から出るぞ」

鳥居を抜けても、今回ばかりは安全かどうかは分からないが、それをゆっくり考えている余裕もない。

「じゃあ、一旦戦線離脱するって、挨拶してくるわ」

やめる、と言おうとしたが、その前に沙龍は驚異的な身体能力をフル活用して、榎の木の幹を数歩蹴ると、忍者のように三次元の移動をしていた。

（なにを考えてるんだ!!）

木佐は今度こそ本気で苛立った。

戦線離脱するから挨拶してくる、だと？

馬鹿なのか？ いや、違った。大馬鹿なのか？

ルールをきっちり守ってくれる人とゲームをやってるわけじゃないんだぞ！

「おーい」

祭殿の屋根の上に立って、沙龍は手すら振っている。

その沙龍の周囲を、白いイタチが数匹舞っている。まるで、主人に「獲物はここですよ」と示すがごとく。

木佐の位置からスサノオは見えないが、どうやら屋根の下に居るようだ。

「私は貴方と殺し合いをしたいわけじゃない。そこで、私も『うけい』とやらをしてみせよう、と思う。あの大火事を——」

と、沙龍は赤く染まっている西の空をまっすぐに指す。

「鎮火することができれば、私にこの国を荒らす邪心などない、という証明に変えてもらう。うん、それがいいな」

スサノオがなんと答えたのかは分からないが、その数秒後に、沙龍の立っ



た場所はすさまじい風圧か飛ぶ斬撃によって破壊された。

「じよわっ！」

しばらく追いかけてこをしたのだろう。

だいぶ薄汚れた姿の沙龍と合流し、八坂神社の南の楼門から外に出ると、二人はこそそそと民家の影に隠れた。

「で、あんな大口たたいた以上、火事を消す算段はあるんだろうな？」

木佐が半分怒りながら聞く。

「なあに、火事なんて、燃えるもんがなくなったらいつかは消えるもんですよ」  
聞いたこちらが悲鳴をあげなくなるほど、最悪に近い答えだ。

「ああ……、カミサマ。僕は世界一の大馬鹿な保持者に出会ったようです……」  
もう、ぐったりと座り込んでしまった。

「つまりね、ヤマタノオロチの正体は出雲を流れる斐伊川ひいかわのことで、あれはしよつちゆう洪水を起こす川だったから、その暴れる川（大蛇）を退治した――すなわち川の治水工事をしたということじゃないか、って説があるわけ」  
安倍清明が淡々と講釈をしている。

聞いている生徒は碧媛一人だ。

松木と偃月は、清明の一計があつて別の場所に向かった。

そのグループ分けは清明が「助手は美女に限る」とだだをこねたからであつて、さらに碧媛も遺構すら残っていない門よりも八坂神社のほうに行つてみたい、と希望したからだ。

「その治水工事をしたのが、すさのおのみこと須佐之男命という、行政の人間にすぎないというところか？」

「そうだね。そして、ヤマタノオロチに吞まれる予定だったクシナダ姫というの

は、古事記での『櫛名田』表記のほうが有名だけど、日本書紀では『奇くしい稲田』という字を使っている。すなわち、氾濫に吞まれる予定だった稲田のことだろう」

「『奇し稲田』——、貴重な稲田を得た、という意味か」

碧媛は八坂神社の敷地の東端あたりにいる。

傍目には清明の姿は見えていないから、妙齡の女性が一人でぼそぼそ喋っていることになるのだが、既に周囲の人影もまばらなので、不都合はない。

やっと陽が落ちて、夕方らしくなってきたところだ。

「神話も現実的な説明をしちやうと、身も蓋もないけど、事実はそのまんまだよ  
ね」

「……」

二人の目の前にある小さな神社には『悪王子社』という名がある。大きな神社の中にある、こういった小さな神社を『摂社せつしゃ』という。

小さいながらも鳥居があり、祠がある。ここは須佐之男命の荒魂あらかみたまを祭っているのだ。

鳥居の横にあった説明書きを読んだ碧媛は、

「なぜ荒魂だけ？ 祭るといふより、鎮める必要があつた、ということか……？」

そう呟いていた。

清明はスツと身軽に動いて、祠の手すりに腰掛ける。罰当たりと怒られそうだが、清明は気にせず、祠の中の扉を開いて碧媛に見せるようにした。

「……中は空だ。これは、どういう意味かな」

普通はお義理にでもなにか入れておくものである。鏡でも水晶珠でも。

しかし、そこには文字通りなにもなかった。

「盗まれたのか、最初からなかったのか、どちらかだろう。そして、その事実を繕う必要もなかった……？」

確認するように清明を見た。

彼は頷いている。

「まあ、最初からなかったとしたら、こんな撰社を作る意味もないんだから、ひとまず『須佐之男命の荒魂』はあつた、という前提で話をしよう。で、僕はつい最近盗まれたんじゃないかと思う。しかも、本人の手によつて」

「“本人”……？　その、何代目かのスサノオに、か？」

「そう。だから盗まれたというより、取り戻したって言ったほうが正解なんだけど」

「なぜだ？　いや……、そうか。単純に考えれば、つまり『なくしたから』か」「うん。詳しい事情は分からないけど、そこらへんに、彼が暴走している理由があるんじゃないかと思う」

沙龍を呼び戻す方法について、少し心当たりがあるから、八坂神社に行ってみよう、と言ったのは清明である。

それで着いてきてみれば、荒魂の話だ。

碧媛はちょうど神の霊魂のことを調べるつもりで日本に来たこともあって、興味津々に参加していた。

同行者が霊体であることはそう大したことではない。

むしろ知識も洞察力も霊力も一流なので、心強い。惜しむらくは肉体がないせいで強力な召喚技が使えないことである。

それについては清明自身がさらりと弁解していた。

「十二天将はゴローに渡してあるけど、『使ってもあまりいいことないよ』って言い含めてあるから、あまりアテにしないほうがいいよ？」

「使わない技を持つことに、意味はあるのか？」

合理主義の碧媛はそう言ったのだが、

「あれはちよつと反則技だからね」

それが清明の答えだった。

つまり、十二天将は対人殺傷兵器としては強すぎるのだ。

一人の自由を奪うのに、対戦車ミサイルを使ってどうする、と清明は言っている。

そもそも、あれは若かりし頃の清明が方位神たちと対話する過程で得た力に過ぎないのだ。

場面を悪王子社の前に戻そう。

「荒ぶる魂、か……。それを、本人が取り戻したとしたら、どうなる？　悪神の復活ではないのか？」

「うーん……」

霊体の清明が祠から降りてきた。

「世間的にはどっちかという英雄だし、海の神ってのはたいてい善神扱いなんだけどね」

「海……？ 水神なのか？」

「うん。意外に知られてないんだけど、スサノオは父イザナギに海原を治めよと命じられたこともあって海神とも水神ともいわれている。けど、さっきも言ったように、実際には治水工事を成したせいで、水との関係が強調されているに過ぎないんじゃないかな」

「なるほど。治水や灌漑の大事業を成した者が水の神とされるのはどこも同じか」

清明のここでの仕事が終わったようなので、提灯のたくさん吊るされた舞殿ぶでんを左に見ながら、西門まで移動することにした。

『神殺し』をしようというなら、それなりの策や装置は必要なのだ。

「だからね、あれは頭のおかしい詐欺師じゃないかと思うんだ」

沙龍は幻覚が見えるほどお腹がすいた、と言って非常食のキャラメルを一粒舐めてみたものの、到底こんなもので腹はふくれなかった。

空き家の中を物色しながら、なにやら恐ろしいことを言っている。

「ネズミでも居ないかな。丸焼きにすればそこそこいけるハズ……」

木佐はその綺麗な顔を存分に歪めた。

「……見つけても独り占めしていいからな。で、神話が神話通りじゃないかもしれないって話は分かった。出雲の製鉄の歴史と照らし合わせれば、スサノオの正体は治水工事を行っただけの官吏かもしれないって話も分からないではない。だから、敵は神にあらず、恐るるに足りず、という馨の言い分も分かる。しかしな……。あの斬撃は一介のペテン師にひねり出せる力じゃないぞ」

「まあ、そうなんだけどね。それ以上は考えてもしょうがないからさ。ただの間で、生まれつきちよつと力自慢の人ってことにしておこうよ」

「そういう問題なのか……？」

ネズミどころか、アリー一匹も発見できず、沙龍は諦めて何も<sup>あが</sup>ない<sup>かまち</sup>上り<sup>の</sup>框<sup>の</sup>よ



うなところに座り込んだ。

この掘っ建て小屋は、放棄されて一年は経っている感じだ。風雨にさらされて、今にも腐った柱が倒れそうになっている。

「とりあえず、今の段階で分かっているのは、敵はスサノオ一人で、奴が怒っている理由は甲斐家の契約違反にあるらしいことと、馨を殺す気であることだけだ」

「うん」

沙龍はリュックサックの中から五百ミリリットルのペットボトルを取り出して、ミネラルウォーターを一口含んだ。

これは映画村の自動販売機で買ったものだ。

木佐も同じ自動販売機でお茶を買って飲んでいたが、すぐ空にして捨てていたので、今はもう持っていないだろう。

ペットボトルの中身はあと二センチほどしか残っていなかったが、沙龍はそれを木佐に渡した。

「……」

木佐は、キャラメルの時も思ったのだが、惜しみなく半分ずつにするこの寛大さをとても好ましく思った。

そのせいで、礼を言うタイミングを逸してしまっただけだ。

こういうことが自然にできるのは、兄弟が居たからだろうか。確かに、偃月は泣き虫で、手のかかる弟だった。飴玉をむりやり口に放り込んで泣くのをやめさせることもあった。

「キサさん、敵をどつくよりも、我々はまず水の確保をしなきゃ」

さっきの八坂神社の手水舎で汲んでおけばよかったのだが、そんな余裕はなかったのも事実である。

水道がない時代に居る以上、これは死活問題だった。

「井戸なら、多分、近くにある。こつちだ」

木佐はそう言って、開け放した引き戸から出て行く。

そして、大して迷いもせず、この闇夜の中を水のある場所まで導いたのだ。

石で造られたその井戸は、沙龍が時代劇で見るものよりはだいぶ粗末だったが、機能は充分だった。

木佐が冷たい地下水を汲み上げてくれた。

「な、なんで分かったの……？」

「水のある場所はなんとなく分かるんだ。昔から」

「そっか……。野生の象みたいだね」

これも彼の特殊能力なのだろう。

やはり水神の加護はこちらにあるのだ、と沙龍は思った。

「前にさ、新宿の熊野神社が浄水場を救ったって話をしたの、覚えてる？」

「東京大空襲の話だろ。覚えてるよ」

「あの後さらに調べたんだけど、スサノオも海神とか水神っていわれてるみたいなんだよね。だから、やっぱり東京はより大きな水神様に護られていて、それは一人のペテン師まがいの神とかじゃなくて、もっと大きな装置として、って意味なんだけど……」

「……？」

なにやら沙龍が支離滅裂なことを言い出した。

木佐は沙龍が何を言っているのか分からない。しかし、本人はスッキリしたよ

うな顔で、一人で喋り続けた。

「あの都市は天海の作った仕掛けのせいで、四神の中でも、北が一番強い力を発揮する場所になってるんだよ。だから、キサさんは新宿の高校に通うことになって、『先代』の水神から東京を託されたんだよ」

「ちよっと待ってくれ。話が飛躍してよく見えない」

「待ってね。順を追って説明する。天海が詠んだとされる歌があったでしょ？」  
ポケット地図を取り出して、以前にも見せたことのあるページを木佐に示した。

桜舞於天

蓮散於海

桜は天に舞い、蓮は海に散る――。

「実はこの二行は前半部分で、あまり知られてない後半の二行があるって話をキサさんの師匠から聞いたんだ」

それが、片側のページに新たに書き込まれてある。そこを指差した。

萩乱於野

梅咲於里

「萩は野に乱れ、梅は里に咲く……。つまり、四季になってるのか」  
木佐の理解は相変わらず早い。

「その通り！ 桜は春の花で、蓮は夏、萩は秋、梅は冬。でも、梅だけ動詞が仲間はずれだよな？ あとの三つは舞ったり、散ったりしてるのに、梅だけエコヒイキされてる。ここに、天海の真意があるんじゃないかと思うんだ。冬、つまり、北を強化したかったんじゃないかって。じゃあ、江戸の北にはなにがある？ 家康が恐れた大名の領地？ でも、武田信玄の甲斐の国は西だし、真田昌幸の信濃国は北西だから、これは違うよね」

「東京の北は埼玉、群馬、栃木だろ。あ、日光か？」

「そうなんだよ！ さすがキサさん！ 北にあるのは日光なんだよ！ 徳川幕府

は莫大な建築費をかけて日光東照宮を作り、江戸の北をがちがちに固めた。つまり、そうまでして恐れたものが『北』にあったんじゃない？ それは何なのかは私には分からないけど、徳川家が恐れた大名家なのか、魑魅魍魎なのか、北方蝦夷なのか、まあ、それはこの際どうでもいいよ。問題は『北の護りを強化した』っていう事実だから。そう。だから、東京を護っていた水神は、自分よりもうってつけの人にあとを託したんだよ！」

やや興奮気味にまくしたてたが、木佐はまだ人事のような顔をしている。

「そうなのか……？ 別に僕は委任状も管理費用も貰ってないけど」

苦笑が漏れる。

木佐には最初から自覚はない。

多分、それでいいのだろう。

あの一千萬都市には、数百年來、天海が作ったシステムがずっと生きていて、そのせいで北方玄武の宿命を持つ者が『東京の所有者』にされてしまったわけだが、それが分かっただけでも、沙龍は晴れやかな気分なのである。

「それで、火事を消すって豪語していた話はどうつながるんだ？ というより、

「火事云々よりも、スサノオを倒すほうが先だろう？」

「いや、火事は最優先で消す。というよりも、消さないと元の世界に帰れないと思うんだ」

「なんだって？ なぜだ？」

「うまく説明できないんだけど、なんとなくそんな気がするんだよ。本当の敵はスサノオじゃなくて、なにかもっと大きなものに試されてるんじゃないかって気がするんだ」

「はあ……？」

沙龍はさつき話した水神の話と、火事を消すことが自分の中ではすんなりつながっている。

八坂神社でスサノオに啖呵を切るように宣言したのも、自分たちは敵を倒すためにここに居るのではなく、火を消すために呼ばれたのだ、という確信に近い思いがあったからだ。

「だから、キサさんは玄武門に行つて。私は朱雀大路に行く」

「……」

木佐は呆れている。

ロジック先行型の木佐にしてみれば、「なんとなく」で行動を決めるなど、とても信じられないのだ。

そうだ。

今さつき沙龍に任せてはいけな、と学んだばかりだった。ここは、「行動する前にちゃんと考えろ」と小一時間ほど説教すべきだろう。

しかし――。

説教した後、どうするのだ？

この不可解な状況を脱するアイデアが自分にあるとでも？

「……」

「なにか問題ある？」

木佐が今までにないほど難しい顔をしているので、そう聞いたのだ。

無理もない。自分の常識に反する結論を出すのは、とても苦しいし、難しいことだ。

しかし、驚くことに、木佐の直感は、沙龍に従えと言っている。



今まで直感で動いたことなど、覚えていいる限りは一度もないというのに。

「偉鑿門いかんもん、いや、玄武門に僕のすべきことがあるんだな？」

「うん」

「分かった……。一人で大丈夫か？」

「うん。大丈夫」

力強く頷く。この自信に満ちた目を信じよう。

木佐は赤く染まった夜空を見上げた。

「さすがに大内裏は無事だろうが……。ここから玄武門まで五、六キロはある。

加えて、あの火事だ。回り道もせざるを得ないだろう。到着するまでに二、三時

間はかかりそうだな」

「じゃあ、三時間後に」

時計合わせはした。

ここからは単独行動である。

「料亭が閉まる前に戻れるといいんだけど」

沙龍は二粒目のキラメクを口に放り込んだ。

## 13 歪んだ時間

四郎が土御門邸に引きこもる原因となった十年前の事件は、彼らにとってはその予兆も前触れもなく、いきなり始まった。

それもそのはずで、それまで、四郎たちは安倍晴信あべはるのぶという名前も存在も知らなかったのだ。彼が江戸時代に生きていた土御門家の直系だということも系譜には載っていないかった。全ての記録をハルノブ自身が改ざんしていたからである。

だから、一郎以下三人の兄の命を呑み込んだ事件の全貌と首謀者についても、四郎は後で『じいさま』から聞いたのだ。

江戸時代中期、安倍晴信という男が大陸に渡り、陰陽道ではない左道を体得し、時空間を自由に行き来できる術を得たという。

そして、ハルノブは土御門家の祖である安倍晴明が生きていた平安時代に現れ、あろうことか本人に対して「十二天将を貸してください」と言ったらしい。なんのために使うのか、と問えば、己の野望を叶えるため、と答えた。

しかし、清明にしてみれば、その野望が国家転覆だろうが地球平和だろうが、どうでもよかったようだ。

「僕は使うことを前提としている人にはあれは渡せないと言って断ったのさ。そしたら、まー、エライことになっちやってねえ……」

後に清明が四郎に語った話だ。

ハルノブは時の帝に取り入って、清明の所属していた陰陽寮を潰そうと画策を始める。

結果、政変にまで発展する騒ぎとなり、数多の死者を出した。為政者の誤った一言で、人は何人死ぬのか——。それも、ハルノブの『実験』の一つであったという。

ハルノブはそういう狂信的な気質を持った男だった。そして、不幸にも、人心を弄する天才でもあった。

最終的に、そのクーデターは清明と賀茂保憲かものやすのりによって阻止されたのだが、追い詰められたハルノブは逃走し、京の都には大火災が置き土産として残された。

現在——という言い方は少々語弊があるが——、木佐と沙龍がそのただなかに

居る。

木佐が言っていた『安元の大火』は、もつと時代が下った後の話であるし、いふなれば歴史的事実である。

が、彼らが今まさに体験している火災は、歴史上、あつてはならない事件なのだ。

その後、晴明は寿命をまっとうしたが、ハルノブという狂人のことが気になつて、「この世」に留まり、土御門家の守護霊となつて歴史を見守つてきた。

案の定、ハルノブらしき人物は色んな時と場所に現れ、その時代を翻弄する。時には民間の中に紛れ、また時には権力者のそばに擦り寄り、その都度、死者を出し、また、それを愉しんでいた。

そのハルノブがいったいなにをしたいのか、といえは、晴明はもはや狂人のすること、と切り捨てて、最近は考えてもいない。それが、ハルノブにとつてはますます面白くないようで、自分を一顧だにしないこの先祖のことを、ハルノブは生涯恨み続けることになる。

十年前の一九八八年の京都に現れた時には、またも『実験』と称して京都の街

まがつかみに禍津神を呼び出し、その破壊力を調べるつもりだったようだ。

京という街は、千年以上、人の怨嗟を吸収してきた街でもある。負のエネルギーはそこかしこにふきだまっている。それらを取り込んで膨れ上がった禍津神の暴走はもはや人の手では止められないかに見えた。

が、それを一郎は己の命を使ってやり遂げた。ただ、一人分では足らず、もう二人分の兄弟の命も使わざるを得なかったが、晴明の協力もあつて、かろうじて、四郎だけは生かすことができた。五郎はその頃、分家で暮らしていたので、巻き添えにならずに済んでいる。

そのような経緯があるので、目の前で三人の兄を失った四郎は、ハルノブに対する恨みが五郎よりも強い。

十年間、ずっと不機嫌な顔をしているのも、その恨みがちつとも晴れることがないからだ。

じいさまは、いつも、そんな四郎を宥める役になっている。

自分も兄たちと一緒に死にたかったのに、なんで助けた、と四郎がじいさまを責めたこともある。勿論、それは言っただけいけないことだと四郎も分かっている

のだが、母にも弟にも愚痴は言えないから、じいさまに言うしかないのだ。

「そう焦るな、シロー。人生は長いぞ？ お前など、まだ寿命の半分も生きていないではないか。やーい、この若造ー！」

それがじいさまの口癖だった。

しかし。

一九九八年八月三日の土御門邸では、珍しくはつきり姿を現した清明が、これまた珍しく四郎を叱咤していた。

碧媛たちの前ではすつとぼけたが、清明には『黄色い龍の遺伝子を持った女子と水神の生まれ変わりのような美少年』が飛ばされた先の見当もついていないし、どういう力が働いてそうなったのかも、大体分かっていない。

すつとぼけたのは、五郎の前でハルノブの話をしたくなかったからだ。五郎は十年前の事件の詳細は知らないことになっている。もしかしたら、色々と察しているかもしれないのだが、清明も四郎も、当時十六歳だった五郎に余計な宿業を背負わせたくなかったのだ。

「シロー、お前はあの子に二重の借りがあるはずだよ」

「借り？ なんの話です？ しかも、二重とは？」

四郎は早めの夕飯を終えて、まだ仕事をする気でいた。

が、じいさまが現れたとあつては、全ての予定をキャンセルせざるを得ない。

「一つは過去の因縁。お前が昔、香港でドジった時に助けてくれた男が居ただろう。そのことと関係がある。そして、もう一つは、これから起こること、お前はあの子に感謝しなきゃいけない羽目になるからさ」

「……」

香港だって？

二十年近く前の話ではないか。

確かに、あそこでは大きな借りを作ったことがある。その借りを未だに返していないのは事実だ。

晴明はスサノオのことは短く説明して、それよりも、なぜあの二人組が千年前のあの日に飛ばされたのか、推測しうる理由を語った。

「そりゃ、ハルノブの起こした無茶な事件は色々あるさ。でも、あの火事だけは規模が違うんだ。数万つという死者が出た。それを今更助けることはできないだ

ろう。歴史はそういう風に進んでしまったからね。つまり、この街はなかったはずのものを無理矢理抱えることになってしまった。それはとてつもなく大きな負荷だよ。そこに、救世主みたいな、時間なんか関係ネエっていう子が来たのさ。街はどうすると思う？」

「まさか……、間違った歴史を修正させようという、街の意思が働いたとでもいうんですか？」

「そのまさかだよ、シロー。僕の五芒陣が時間軸にはじかれた時、大きな火が見えたから見当はついた。飛ばしたのは土地神の力だね」

「土地神の？　そこまでの力があります？」

「もちろん、時の流れを無視できる黄龍の存在がなきや、できない荒技さ」

「……」

神獣の力はそこまで反則級なのか、と四郎は思った。

魔王クラスだ、と思った自分の感覚は間違いではなかった。

「……分かりました。ハルノブの後始末なら動かないわけにはいきません」

四郎は立ち上がってスーツの上着を取ろうとし、やめた。



本来の仕事なら、動きやすいほうがいいに決まっている。

碧媛は、晴明と別れた後は、徒歩でまっすぐ西に向かっていた。

晴明が言うには、四条通りと天神川が交差するあたりがかつての都の西端だろう、とのことだが、沙龍の正確な居場所が分からない以上、臨機応変に動くしかない。

偃月は「半分血が同じだからって分かるわけない」と泣き言を言っていたが、無理だろうが、根性で探してもらおうしかないのだ。

でなければ、彼らは永遠に時の迷子になってしまう。

平安神宮に落ちていたのは西園寺が一つだけ回収し忘れた、沙龍の発信器だった。せめてあれを持っていてくれれば、なんとかかなったかもしれないが、場所は同じでも違う時間の中に居る彼らの信号が拾えるかどうかは分からない。

『二人とも、大事なことだからよく聞いてね。陰陽は四つのパターンがあるって話をこの前したでしょ？ 陽中の陽、陽中の陰、陰中の陽、陰中の陰』

早足で歩きながら、碧媛はふと大姐ターチエの言葉を思い出ししていた。

長期の仕事でよく村を留守にしていた碧媛は、あまり沙龍や偃月の教育に加わっていなかったが、長女の慧媛けいえんは熱心に教師役を買って出ていたものだ。

香林や豊隆も子供たちに稽古をつけたり、サバイバル術を教えたりしていたが、学術方面は主に慧媛が担当していたようだ。

その青空教室を、なんとはなしに眺めていた時の記憶だろう。

『神獣は全ての五行と全ての陰陽を備えた存在だから、黄龍様もこの四つに対応しているの。つまり、召喚の仕方によって、四つの違った形態になるってこと』

『じゃあ、わたしが普段召喚しているのはどれなの？』

『陽中の陰ね。沙龍は基本的に陽の氣を持っているから、その状態で召喚するとそうなるのね』

この時、碧媛は不思議に思った。

陰陽では、女性はふつう「陰」とされる。なのに、沙龍は違うらしい。なにか、そこに保持者の秘密があるのかもしれない。

『これから、体内の氣を陰に転じる方法を教えてあげるから、そうすると、陰中

の陽で召喚できるようになるわ。その方が多分、被害を抑えられるはずよ』

『あとの二つは？』

『そうねえ……。陽中の陽はとても条件が厳しいし難しいから、もう少し大きくなってからね。それと、陰中の陰は殺戮と破壊しか生まないといわれているから、使わない方がいいと思うの』

慧媛はそんな風に言っていたが、結局、その二つの方法は教えたのだろうか？  
確か、陽中の陽も、陰中の陰も、四神が揃っていないと召喚できないはずだったのだが……。

（沙龍はそもそも黄龍を召喚するのか？）

それは最大の懸念事項だった。

体術だけで敵を撃退できるなら切り札を使う必要はないし、使うたびに死人を出す黄龍召喚は、沙龍も本音では使いたくないだろう。

しかし、碧媛も清明も、沙龍が最終必殺技を放つ前提で動いている。

なぜなら、歪んだ時間の中に取り込まれてしまった以上、時間の制約を受けない黄龍の力を借りるほか、そこから脱出する方法がないからだ。

(せめて、万全の体勢を整えてやることくらいしかできないが……)

碧媛は目的地まで来たのを確認して、周囲を見た。

ごく普通の市街地である。コンビニがあつて、マンションがあつて、やや幅の狭い道路がある。

少し広いところを探そう、と碧媛は歩き出す。

陽は落ちたが、うだるような暑さは続いていた。

松木はじいさまに言われたとおりに、玄武門のあつた場所から南下し、朱雀門跡まで来たところだった。

千年前はここに立派な門があつたはずだが、今は影も形もない。

「昔は、通り抜けはできなかつたはずなんだけどね」

「ミカドのお城だもんなー」

偃月はいまいち事態の重要性を理解していない。

松木について来たが、まだどこか観光気分である。地図を確認して、そういえ

ばこのあたりは、昨日、木佐と一緒に見学した二条城のちょうど西側だと気付いた。

木佐の説明もスマートだったが、今日は松木と一緒に行動してみて、マイルドな人あたりと、その博識ぶりに感動している偃月なのである。

なぜ、沙龍の周囲には優秀な人材が集まるのだろうか。

本人は人徳だとふんぞり返って言いそうだが、ごく単純に考えれば、力のあるところには良くも悪くも人が集まってしまうということなのだろう。

力を持ったばかりに余計な因業を抱え、苦勞を背負い込み、消えない傷も負う。

沙龍の背中への刀傷は、偃月にとっては直視するのが辛い古傷だった。

「さて、偃月君。ここまでで、なにか感じるものはあった？」

「いや、二姐アルチエは分かるはずって言ってたけど、哥々の気配らしきものはちつとも感じないな……」

「そうか。困ったね」

と言っているが、松木もそれほど深刻な顔はしていない。彼の場合は単なる

ポーカーフフェイスかもしれないが、じいさまが具体的なことを何一つ教えてくれないので、危機感はあまりない。羅城門跡までたどり着けばなんとかなるだろう、と思っっている。

それに、沙龍はあの力と共にある限りほぼ無敵だろうから、あまり心配もしていない。

「偃月君は、神獣の姿を見たことはあるの？」

かつての朱雀大路、今の千本通の南下を再開しながら松木が言った。

「何度かある。召喚するたびに死人が出るんで、哥々は最初の頃は使うのを嫌がってた」

「死人が？」

「黄龍様は地対空ミサイルみたいなもんだ。細かい制御ができるわけがない。標的を確実に吹っ飛ばすが、アリゾナの無人砂漠でもない限り、必ず巻き添えは出る」

「ミサイル、ね……」

なかなかシユールな喩えだ。

さらに、偃月は「追尾機能がある分、パトリオットよりも始末が悪い」と付け加えた。

「でも、マツキさんのイエイエの爺々のいうとおり、もし、哥々がどこか別の時代に飛ばされたんだとしたら、最終的にやることは一つしかないんだよなあ……」

そう言って、立ち止まる。

すでに夜の空になっているが、人通りも車通りも多い場所なので、まだ夕方の続きのような風景である。

「だとしたら、哥々は、この街の東西南北の中心、つまり、この大路のど真ん中に居るんじゃないか……？　時間はズレても、場所がズレるはずはない」

## 14 私の龍に食われて死にな

朱雀大路と呼ばれる大通りは、木佐が「滑走路ほどもある」と言っていたので、すぐに分かった。

それを聞いた時はいくらなんでも誇張だろうと思っていたのだが、実際目にしてみると冗談抜きでジャンボジェットが飛び立てそうだ。

沙龍はその広い大通りを、逃げ惑う人々の流れに逆行するように歩いている。

この世界には、今、黒と、赤に近い橙色の二色しかない。闇の黒と、火の赤。その二つがこの都を支配していた。

火の熱気、人々の悲鳴、荒れ狂う風の音――。

しかし、どこか、よくできた立体映像を見ているのではないかという感覚もある。この地獄のような風景は、あくまでも過去の風景でしかないのだ、と。つまり、これは京という街が記憶し、自分に見せている記録映像ではないか、とも思う。それもまた、一面においては事実だろう。



「ああ、そうか……」

この時、沙龍はこの時間旅行を仕組んだ者の正体に気付いた。

最初は四郎がなにかしたのだろうと思っていたが、木佐にも言ったようにこの大掛かりな事件の主犯ともいべきは「もっと大きなもの」であるはずだ。

黄龍を召喚する度に体験する、走馬灯のように流れる過去の出来事からしても、あの神獣は秩序だった時間の流れの中には存在していない。

ならば、この千年の跳躍の裏には、その黄龍の性質を利用した、この街の総意ともいべき存在がいる。それは、桓武天皇がこの地に四神の加護を呼び込む以前から存在していた古来の土地神であり、京という街を形作っているその他全てのものである。

木佐は「巻き込まれた」のではない。京という街が火事を消してもらったために水神を呼んだのだ。主役は自分ではない。木佐小次郎なのだ！

「ここらへんでいいのかな。だいぶ真ん中あたりだと思っただけど……」  
呟いてみても、行き交う人々は誰も反応してくれない。

地図は頭に入っているし、ここが朱雀大路であることは間違いないとしても、

東西を走る道の名前が分からないのは致命的だった。道路標識などは見当たらない。

とりあえず誰かに聞いてみよう、と一番そばに居た人に声をかけた。

「あの一、すいませーん」

「……」

まだ若い女性である。比較的よい身なりをしていたが、一人だった。連れの方とはぐれたのかもしれない。なにやら悲愴な顔をしている。

「あの一、もしもーし……」

「……」

反応がないので、諦めて、次に、大きな荷物を背負った中年の女性に声をかけた。こちらは、だいぶ薄汚れた、単衣の着物を着ている。

「ちよつとすいません、道を」

「……」

女性は疲れた目をしたまま、沙龍を見ることなく、足を引きずって歩いていてしまった。

次。

小学生くらいの子供の手をひいた男に近付いてみる。

「その人ー、ちと道をお訊ね申すー」

これは時代劇で覚えたセリフだが、平安京で暮らしている一般市民に、ちよんまげの時代のサムライ言葉が通じるとは思えなかった。

どっちにしても、沙龍の声も姿も認識していないのなら、意味はないのだが。

「……」

親子はやはり沙龍に気付くことなく、足早に去っていく。

次。

「ちと、道を……」

「はいはい、どうしたの？」

訊ねようとした人とは別の場所から反応があったことに、沙龍のほうに驚いた。

横手を見れば、明らかに周囲の者とは違う格好をした男がすぐそばに立っている。白い綺麗な着物を着ていた。

中年というほど歳は取っていないようだが、さりとて若造ともいえない。微妙な年齢だ。

男は一人ではなかった。背後に部下のような者が数人居る。

「あらやだ、どうしちやったの。着の身着のまままで逃げてきた感じ？　でも、ちよつとそのおみ足は目の毒ねー」

口調は下町のおばちゃんだが、どこか品がある。声はだいぶ野太い。

男は、沙龍の短パンからのびた白い足が気になるようだった。持っていた竹筒のようなものをかたわらの部下に渡すと、自分の上着を脱いで、それを沙龍に羽織らせた。

そして、満足そうに、

「うん。これでいい」

と、微笑んでいる。

この短パンはファッションだから気にしなくてもいいのに、と弁解する隙はなかった。

「あ、……ありがとうございます。えつと……、私が見えるんですか？」

「ん？　ということ、貴女はやっぱり普通の人じゃないのかな？」  
にこやかに聞いてくる。

この雰囲気は誰かに似ているな、と思った。考えるまでもない。松木だ。つまり、色んなことに余裕のある人の物腰である。

しかし、都の大火事というこの事態に、少しも慌てた様子もないとは、大した人物だ。

「普通の人間のつもりなんだけど、どうも、ここの人たちには見えてないみたい  
です」

「なるほど。姿を消すことができるってことか。でも、鬼には見えないねー。第  
一、こんな可愛い鬼が居たら、我が陰陽寮は困ってしまうよ」

男がそう言ったところで、部下の一人が急かすように言った。

「殿との、北西のほうに火の手が移動しているようです」

「北西か。まあ、内裏を避けてくれるなら万々歳だな。清明が風を起こしてくれ  
てるんだらう」

彼らもそちらに向かう勢いだったので、沙龍は慌てて聞いた。

「あの！ 四条通りってどこですか？」

朱雀大路与四条通りが交差するあたりが沙龍の目指す場所なのだ。これは聞いておかねばならない。

「四条に行きたいの？ すぐそこだよ」

と、男が指差したあたりを、ちょうど、ものものしい格好をした一団が西のほうに走っていった。

警備員か消防団か、そういった団体だろうというのはなんとなく分かる。行政の機能は死んでいないようだ。

「今の人たちが通っていった道がそうですか？」

「うん」

「……」

ほとんど自分の勘は当たっていたようだ。

あの交差点がまさしく京のど真ん中ということになる。

「困ったことがあるのなら、力になりますよ。唐土もろこしの姫君？」

「いえ、大丈夫です。えっと……」

「私は賀茂保憲。かもの やすのり 陰陽頭おんようのかみ を務めています。何かお困りでしたら、中務省なかつかさしやう の

陰陽寮まで訪ねてきてください」

男はそう言っておきながら、

「まあ、貴女が困るっていうのは、よほどのことだと思いますが」  
軽く付け足した。

ちよつと捉えどころのない男だった。

オカマ風かと思いきや、肝の据わった偉丈夫にも見える。

「では——」

颯爽と去っていく。

男は何もかも承知しているような口ぶりだったが、また会えるのだろうか？

沙龍は羽織らせてもらった上着をコートのように着なおして、呼吸を整えた。

静かに、深く、息を吐く。

この世界の住人に認識され、この世界のものを身につけたことで、なにか、別の力を得た気もする。

「よし……」

3Dの映像の中に放り込まれたのではない。今、朱雀大路に立っている自分は間違いなく『此処』に存在する。

携帯電話の画面で確認すると、約束の時間まであとちょうど五分だった。

木佐は玄武門まで無事にたどり着けただろうか。いや、それは心配すまい。彼なら万事そつなくうまくやるはずだ。

「……!？」

突然、黒と赤の世界に、線のように白いものが光った。二筋、いや、三つの光の軌跡が同時に襲い掛かってくる。

が、沙龍は瞬間、そのうちの二つを気合で跳ね飛ばし、一つは、じかに片手で捕らえていた。

頭を掴まれた獣はキーキーと断末魔の悲鳴をあげている。イタチのような、キツネのような、白い妖あやかしである。

道端に落ちた二体は気絶しているだけだが、沙龍はこれが無意識でやったようだ。

「毎度毎度、邪魔してくれる。お前らみたいなチビっこが、私に勝てそうか？」



ああ？ どう見たって捨て駒にされてるだけだろうが！」

ガシツと掴んだ頭を、こちらに向かせ、言い聞かせるように言った。

よく見れば愛嬌のある顔をしているが、所詮、低級の物の怪である。沙龍の言っていることを理解しているかどうかは分からないし、そもそも自分の行動理由も分かっているに違いない。

「本物のカミサマが可憐な女子高生を襲えって言うか？ 言わねえよ。そういうのは、悪徳詐欺師っていうんだ。早く気付けよ！」

「ピュイー！」

イタチは暴れるのをやめ、涙目になって命乞いをしている。

沙龍の気迫に恐れをなしているようだ。

足元に気絶していた二匹はビクツと連続で体を震わせて起き上がると、一目散に逃げ——、いや、数メートル走ったところで同時に立ち止まった。

仲間が人質に取られているのに気付き、それをどげんかせんといかん、とばかりに果敢にUターンしてきた。

「ほー……」

しかし、もとより沙龍の敵ではなく、片手片足であしらわれてしまった。

一匹は踏みつけ、一匹はもう片手で掴み、結果、両方の手にそれぞれイタチがぶら下がっている。

「で、お前らはどんな『契約』をさせられたんだ？ 言っておくが、私はあの詐欺師よりも百万倍は強いぞ。こつちにつくほうが得策だ」

「……プ？」

「ん？ 通じてんのか？ もし私の下僕になるなら、市販の茶碗蒸しくらいは食わせてやるが、どうする？」

「プ、ププ？」

「なんかその鳴き声、ムカつくなあ……。下僕よりも、食材になるか？ そういえば、だいぶお腹がすいてたんだった」

「プッ、ピュイイイイイツ！」

木佐が居れば野生動物（厳密には違うのだが）との交渉もすんなり成立しただろうが、沙龍の脅迫はそこまでだった。

真打ちが登場したからだ。

つまり、この三匹は搜索部隊だったということか。

沙龍は軽く舌打ちして両手のイタチを道の端に放り投げるようにすると、大路の中央に走り出た。その動きは素早い。

丁度、人通りは絶えている。スサノオの巨大な剣が翻った。

どんなに武器が大きかろうが、支点を抑えれば無力化できる。基本中の基本だ。沙龍は白刃の下に入り込んで、男の握る柄つかを止めた。

草薙劍くさなぎのつるぎは錆付いて下げることのできなくなったレバーのように一ミリも動かない。

視線が間近で合う。

ひどく印象の薄い男の、どこを見ているか分からぬような瞳孔が不気味だった。

「あの火事をどうにかしたら、消えてやるって言ってるのに……。逃げるチャンスをやったのに……。よほど死にたいようだな！」

沙龍は笑っている。

もう見逃してやるつもりはない。

「死ぬのはお前だ。誓約を破った甲斐は滅ぶ運命にある」

「そんなのは知ったこっちゃないんだよ、この詐欺野郎が。私の父親があんたに何を約束しようが、私にはそれを果たす義理はないんでね！」

沙龍には、喧嘩相手に義理を通すような美学はない。

交渉が決裂した以上、あとは肉弾戦のみだ。

（一分で決める！）

沙龍の感覚では、もう約束の時間まで二分は切っている。

時間は正確に合わせなければならぬ。なにせ、初めての試みだ。失敗は許されない。

長い祝詞に十五秒はかかる。なら、あと一分でこの勝負をつけなければならぬ。

さつき八坂神社で戦った時、正面側に打撃を加えても無駄だった。なら、今度は背後を取って、延髓えんずいか脊椎に拳を叩き込むことだけに集中する。

しかし――。

簡単に背中が取れるわけではない。

反対に、沙龍のほうがまともに剣撃を食らって吹き飛ばされ、朱雀院の高い土塀に激しく体を打ち付けた。

「ゲホッ……」

肉は大して斬られていないが、内臓はだいぶやられた。が、黄龍の上乗せ分があるので、通常の人体よりは遥かに頑丈である。

停止してるところを、容赦なく斬撃がくる。沙龍は土塀の上部、軒を掴んで懸垂するようにヒョイと体を持ち上げ、その攻撃をかわした。

すばしっこさなら負けはしない。この小さな体の最大の利点である。

（あと五十秒……！）

倒すのは無理でも、十五秒だけ敵の自由を奪えばいい。それで、終わりだ。

もちろん、それをさせないためにスサノオは全力で、息をつかせず、沙龍を殺しにきている。

激しい攻防が続いた。草薙剣が地面を割り、粉塵が舞い上がる。夜空に舞う火の粉が、いっしょくたになつて躍った。

三匹の白いあやかしたちが、オドオドしながら顔を見合わせていた。

一九九八年の羅城門跡では、なぜか松木がボロボロに傷ついて座り込んでいた。ほとんど気を失いかけている。

代わりに、その場に立つのは四郎である。

「まったく……。じいさまのいいつけをそうまでして守る必要があるのか？　ここで使わずにいつ使う。死んでしまつては元も子もないだろうが」

聞こえてないだろうと思つてぼやいたのだが、

「こうして、いざという時はいつも兄さんたちが助けてくれるので、僕は甘ちゃんな末っ子でいられるんですよ」

末弟は弱弱しく微笑んで言った。

「……」

松木を襲つたのは例の眷族たちだが、なぜここまでやられっぱなしになつたのか、四郎には理解できなかつた。

本気を出せば、十二天将を使わずとも、無傷で終わった戦闘だろうに。

「なにか、気を取られるようなことでも吹き込まれたか？」

「そこまで未熟ではないつもりなんです。この体たらくですからね。なにを言っても言い訳になりますね」

「……」

四郎はそれ以上追及しなかった。

なにか予定外のことがあったのは事実だろうが、松木が言いたくないなら無理に聞き出してもいいことはない。

それよりも、久しぶりに放つ大技に集中しなければならぬ。

「十二天将、丙ひのえの朱雀。さて、力を貸してくれるかどうか——」

四郎がそう言うのは、十二天将たちはもともと晴明の式神だからだ。晴明が名指しした五郎の言うことはきいても、四郎の言うことは素直にはきかないかもしれない。

順序よく印を結んで、異次元へのチャンネルを開く。

手ごたえはあった。

時間切れだ。

スサノオの猛攻をしのぎながら、多少のダメージは受ける覚悟で、沙龍も九字を切った。

「東方青龍——」

宙返りをしながら、東の空を見た。頭がどこを向いていようと、方角は本能的に分かる。

黒く染まった地平線の中には、さつき戦場にした八坂神社があるはずだ。

その八坂神社が、いま、戦っているスサノオのホームグラウンドであるはずの八坂神社が、沙龍の祝詞に答えるように一条の青い光を天空に吐き出した。

(えっ!?)

見間違いか、と思った。

あり得ない。

スサノオが協力するはずはないか。むしろ、なにがなんでも『これ』は阻止したいはずだろう。



だが、それを考えている暇はない。

迫った一振りを避けきれず、肩口を斬られたが、構わず続けた。

「西方白虎——」

またスサノオの攻撃がくる。が、祝詞を続ける。

北以外は、誰も居ないはずなのだ。だから、この文言はお飾りにすぎない。

しかし、沙龍はその時、凜とした声を聞いた。よく知っている、身内の……。

（西は任せろ！ ……を預かっている）

碧媛の声が頭の中に綺麗に響く。

なにを預かってるって？ ねえ、二姐ってば。

「南方朱雀——」

朱雀大路の先、羅城門がある方向にも、呼応するように炎のような光が立ち昇る。

あそこになにがあるというのだろう。誰が居るといふのだろう。

千年前の都に、いったい、誰が？

見当もつかない。

(哥々、こつち)

今度はとても近くで偃月の声が聞こえた気がした。

次にあの巨大な剣が襲ってきたら、もう逃げ場はない。

それでも沙龍はこの祝詞を続けるつもりだ。退く道は知らない。たとえ目玉一つになっても、その目に敵が映る限り、私を害する者はすべて屠ほふってやる——。

「……!？」

その時、白い閃光がスサノオに張り付いたように見えた。

三つの刃のような煌きらめく光が、まるでスサノオの手足を縛るように巻きつき、自由を奪った。

その隙に、沙龍は祝詞を完成させることができたのだ。

「北方玄武——！」

大内裏の先には、間違いなく木佐小次郎が居るはずだ。

そして、きつと同じタイミングで、召喚呪文を唱えてくれている。

「古の盟約の下に、四方将神の力をここに借り……」

「やめろ、この、あやかしどもが——！」

しかし、スサノオが彼らを振りほどいた時は遅かった。

（キサさん以外の三人は誰だか知らないけど、四神の力が発動したこのフィールドがあれば……！）

今までは制御する者の居なかった、陰陽五行における最強最悪の力を、いま、心置きなく放つことができる。

「我、唯一の神獣にして無二の存在、黄龍の全ての力を解放せり——！」

沙龍はスサノオの驚愕の表情の前で、会心の笑みを漏らした。

「お前らは“八”が強いんだろうが、残念だったな！ 私の龍は大地の守護神に

して、中国における聖数“九”を司っている。『九龍』カオルンに食われて、死にな—

—ッ！」

凶悪な光の渦の中に出現した金色の龍が、その長い体を無尽に躍らせ、ハンドラーを害するもの全てを次々と呑み込んでいった。

スサノオを構成していた有機体も、北西の空に燃えさかっていた炎も、焼け落ちた建物の残骸さえも——。

全てが咆哮と共に呑み込まれていく。

「……あれが、黄龍なのか」

木佐小次郎は、いつしかふりしきる雨の中で、立ち尽くしていた。

京の空を覆うほどの神獣の姿に、魅了とも畏怖とも違う、理解の及ばない感情が湧き起こる。

(……なんだ?)

その時、木佐の身体の中で、ひととき大きな鼓動の音がした。

視界が揺れる。

目の前に無数の景色が走った。

古いフィルムを超高速で早回しをされたような感じだ。

(誰だ……?)

人の形をしたものが写っている。

ある時点で映像がゆっくり回り始めると、それが自分であることに気付いた。

ベビーベッドに寝かされた赤ん坊が、こちらを見て笑っている。確かに、この

ベビーベッドは見覚えがある。畳の上に置かれているので、どこかミスマツチな

観は否めないが、祖父の代から使っていた舶来品とかで、当時はとても高価なも

のだった、と誰かから聞いた。

やがて赤ん坊は歩き始め、転び、泣いて、また起き上がる。

母親を見上げる、無垢な瞳。この世に自分を害する者など居ないと信じている目だ。

そのフィルムは、ずっと、その子供を画面の中央にとらえ、まるで成長記録のように彼だけを追いかけていた。

ところどころに傷の入った、色褪せたフィルム――。

「いや……、違う、これは僕じゃない……」

違和感に気付いた。

「黒田……清春きよはる」

木佐がそう呟いた時、

「よく分かったな。会ったこともねえのに」

彼はそこに信じられないものを見た。

「お……、父さん？」

テンガロンハットを被った黒田倫太郎がそこに居た。

## 15 黒田家の事情

沙龍は偃月の背中につきぽりおぶさった状態で、「早く早く」と弟を馬のよう  
に急かしていた。

黄龍召喚後はとても動くことはできない。たいてい失神して、数時間は目を覚  
まさないのだが、今はドーピングをしているのであと少しはもつという。

目には隈が何重にもできていて、何日も徹夜している締め切り前の漫画家のよ  
うな鬼気迫るものがあつた。

その沙龍の背中や肩には、三匹の白いイタチが乗っていて、せわしなく頭を動  
かしている。新しい主人を心配しているようだった。

急かされてる偃月はいまいち状況を理解していない。なぜ急がなくてはいけな  
いのかも分かっていないのだ。

「だから、うっかりしてたんだけど、その玄武門は、現代では、黒田家のお屋敷  
の近所つうか、まん前なのよ」

「うん……。それは分かったけど、別に、問題ないんじゃないや？ コジローさんの実家だろうか？ むしろ、好都合じゃ？」

「アーホーかー。キサさんと黒田のじーさんはほとんど敵対してんだってば。強引に跡継ぎにしようとしてんだから、その待望の孫が目の前に戻ってきてるなら、捕まえて座敷牢にでも閉じ込めておくくらい、やりかねないんだよ」

「うーん、跡継ぎやら座敷牢やら、この現代にナンセンスだなー」

「だから、早く……。私も、もうあんまり起きてられ……。ない、し……」

黄龍が厄災の全てを呑みこみ、京の火事が突然の雨によって完全に鎮火すると、時が整然と流れはじめた。

沙龍と同じ血を持つ偃月が、朱雀大路の同じ場所に居て「引っ張ってくれた」おかげで、沙龍は無事に「こちら」に戻ってくる事ができたのだ。

しかし、木佐はどうだろう。まさか、「むこう」に取り残されてはいないだろうか。

それがまず心配で、木佐の姿を確認すべく、現代での偉鑿門跡いかんもんに行こうとしている。距離にして二・五キロほどだ。偃月の足なら走れば十分もかからないだろう。

うが、わりとのらくら歩いている。だから沙龍は急かしているのだ。

さらに、木佐が無事だったとしても、場所がまずい。そこは木佐が絶対に帰りにたくない「黒田家」のまん前なのだ。

「うーん、闘ってるのは見たことないけど、コジローさん、あの物腰だし、相当強いだろ？ 哥々のは心配しすぎって気もするんだが」

「……」

木佐が万全の状態なら、確かに心配は要らないだろう。

しかし、沙龍には心配しなければならぬ理由があるのだ。

「私が一番最初に黄龍を召喚した時のこと、覚えてる？ いや、覚えてないよね。ユエはまだちっちゃかったし……」

沙龍は忘れもしない。

初めて人を殺した日だ。正確には沙龍の召喚した黄龍が暴走して村の人間の命を奪った、ということなのだが、忌まわしい記憶として強く心に刻まれている。

「四、五歳の頃だったかー？ おぼろげには覚えてるけど」

「あの時、私はパンクしかけたんだ。自分自身の過去の記憶はどうってことはな



いんだけど、黄龍に膨大な情報を見せ付けられて。多分、あれは黄龍自身が記憶してきた、いや、記録してきたものなんだろうけど、その負荷が大きすぎてね……」

それは悪夢といってもいい。沙龍でもかなりダメージを負った。

有史以前から地球を渡り歩いてきた神獣の持つ情報量は文字通り桁が違う。それが、召喚時には一瞬にして個人の前に流れるのだ。

普通なら、飽和して精神が壊れてもおかしくはない。

沙龍が人を殺し、神獣の存在を間近で体験してもなお正気でいられたのは、やはり魂の器ともいうべきものが普通の人とは違うからである。

恐らく、木佐小次郎もそれと同等のものを持っている。でなければ、自分の中に人外の力を飼うことはできない。

しかし――。

「いくらキサさんが冷静な人でも、この『初体験』に普通の精神状態では居られないと思う。だから、急げって言ってるの！」

「急ぐ必要はない。もう、着いた」

「……!？」

ぐったりしていた沙龍が顔をあげると、そこには、異様な場面が展開されていた。

木佐小次郎がうつ伏せに倒れており、テングロンハットを被った黒田倫太郎が、二人組に銃を向けている。

二人組のうちの一人は、スーツ姿の八雲だ。後ろの老人をかばうように腰を落として身構えていた。彼の左手には日本刀がある。

「なーんか、面倒くさいことになってるなあ……」

と、偃月が面倒くさそうに呟いた。

四郎が凶体のでかい弟を持ち上げようとした時、横から助ける手があった。あまり助けにはならなさそうな白い細い腕だったが、見た目よりは腕力がある。

「なんとかあったようだな」

碧媛が松木の朦朧とした顔に言うと、松木はかすかに微笑んで頷いた。

「貴女は……？」

「安心しろ、味方だ」

碧媛はそうとしか答えなかったが、四郎にはそれで十分だった。じいさまはもう消えている。いつものことだ。

「五郎、黒田の御曹司はいいのか？」

「あっちは、馨君が向かったようだから大丈夫でしょう」

松木がかろうじて聞こえる声で言う。

喋るのも辛そうだ。

「……」

松木は黄龍召喚後の沙龍はまったくの役立たずであることを知らないようだ。一言言っておくべきか迷ったが、偃月が一緒なら大丈夫だろう、と碧媛は思った。

偃月は昔から沙龍の危機には冗談のように戦闘能力が上がる。要するにシス・コンなのだ。

ただ、その力の源が、蒼龍会の襲撃事件以降は純粹な家族愛ではなく負い目に

なってしまったことも碧媛は知っていた。

今回、本当の父親を知ったことも、偃月にとってはマイナスに働くのではないかと少し心配もしている。

『黄龍の保持者』は村では英雄であると共に、生贄でもあった。唯一無二の力を手に入れる代償というものが当然あるのだ。村の者は皆それを知っている。

だから、姉思いの偃月はきつとこう思うはずだ。

なぜ、自分が保持者にならなかつたのだらう——、と。

なぜ、沙龍だけが黄龍という重い枷を背負わなければならなかつたのだらう——、と。

偃月はこの先色々と思ひ悩むに違いない。碧媛はそれを心配しているのだった。

沙龍はすばやく状況を見てとり、偃月にささやいた。

「一番厄介なのは従者だ。アレに勝てるか？」

自分はもう満足に動けそうにないので、代わりをしてもらうつもりでいる。

「任せろ」

頼もしい答えが返ってきた。

しかし、なぜ、八雲と黒田倫太郎がにらみ合っているのか。

沙龍は、少なくとも、八雲は倫太郎に対して悪感情は持っていないと判断したのだが、なにやら彼らの間にも深いものがあるようだ。

「なるほど、ここで裏切るたあ、お前らしいぜ、八雲。結局、お前はどこまでも親父の狗だってことだな？」

その倫太郎は、古風なりボルバーを構えている。恐らく、コルト社のMKⅤシリーズと呼ばれているものだろう。

殺傷能力は十分すぎるほどありそうだが、あんな扱いにくそうな拳銃は上海では誰も使っていないかった。

「……」

八雲はだんまりで、この張り詰めた空気の中では影のように存在感を消している。

それも当然で、この対立は、黒田作之助と黒田倫太郎、つまり黒田家の先代と現当主の親子間でなされているのだ。

「放逐された当主に尽くす義理も礼もないということだ」

老人が静かに言った。

立ち姿に一分の隙もない。

頭髪はだいぶ薄く白くなっていて、皺の刻まれた顔は歳相応に見えたが、後ろ姿だけなら四、五十代と見まごう。

「あんたの出張る幕なのか？　ロクに立ってもいられない病人がこのこ出てくるんじゃないよ」

沙龍が知っている情報でも、黒田作之助は末期の癌に侵されており、余命一年もないという話だ。

病魔は気力ではねのけているのだろう。このサムライ・スピリッツには尊敬するよりもただただ呆れる。

「……その若人たちは、何の用か」

作之助がそう言った時、沙龍は偃月の背中から降りて、よろけそうになりなが

らも数歩歩いた。

「失礼、ご老体。以前、手紙を出した者です」

「……手紙？」

「斎藤新助という名で。大きな封書を」

「……！」

作之助は一瞬にして理解した。

大きな茶封筒。

確かに一ヶ月ほど前にそれは作之助宛に届いていた。

差出人の名前は、よりによってあの忌まわしい名前だった。この二十年、一度も聞かなかつたが、一度も忘れたことのない名前だ。

性質の悪い悪戯かと思つたが無視もできず、開封した。

「そうか……、あれは貴女が……」

沙龍をまじまじと見つめる中、作之助の驚愕はますます大きくなっていった。

「御前！」

老人が自分の感情に耐えられずによろけたかに見える、そばに居た八雲が慌てて

体を支えた。

この黒田作之助の反応には、倫太郎も驚いていた。

いついかなる時も冷静沈着で、動揺など誰にも見せたことのない黒田作之助が、よろめくほど驚いているのだ。いったい、なにに……？ この女子高生に……？

「……」

そういえば、沙龍がやけに自信満々だったことを思い出した。

ロシアとは大違いだ。そう思ったのだ。

そうだ、魂は同じでも、性格は変わる。

そんなことはよく知っている。何例も見てきた。

今度の器はスターリンですら敵になりそうにない、と倫太郎が思ったのは、昔、スターリンの近くで仕事をしていたことがあったからなのだが、それは勿論、今生こんじょうのことではない。ひとつ前の過去生いエイエイ（前世）だ。

「爺々イエイイエイ、私もちよつとフルマラソンを走ってきたのでフラついてますが、まずは我が親友の具合を確かめさせてください」



沙龍はそう言って偃月をチラツと見たのだが、偃月が動く前に倫太郎が答えた。

「心配すんな、気を失ってるだけだ」

「なにがあった……？」

振り向いて、倫太郎に聞いた。

「まあ、黄龍様出現のとばっちりだな。アレの母親の視点で、一番きつい感情を再現されちまったもんだから、身がもたなかったのよ」

「……」

やっぱりそうだったか、と沙龍はため息をついた。

しかも、恐らく一番最悪なパターンだ。

「大丈夫なの？」

「俺の息子だ。あれくらいで壊れるほどヤワにはできてねえ」

「……」

沙龍自身、偃月に支えられながら、木佐のそばまでやってくると、まずはうつ伏せの体を抱き起こした。

呼吸と脈を調べたが正常だ。外傷もない。

顔色はあまりよくないが、それは自分も同じだ。常識外れの時間跳躍をして、大掛かりな技と一緒にぶっ放してきたのだ。とにかくクタクタである。

ピタピタと木佐の頬を叩いてみた。

大きな反応はないが、眉間が少し動いた。

「よかった……」

安堵の顔を見せ、沙龍は木佐の上に倒れこんだ。

「じゃ、ユエ、あと、よろしく——」

倫太郎は「おいおい」という顔をしているが、偃月はこのまま寝かせてやるつもりでいる。

ドーピングは故郷の村で作っていた生薬の効果によるのだが、せいぜい数秒もてばいいところを、根性で数分間もたせたのだ。もうとつくに限界は超えている。

「さて——」

偃月はすつくと立ち上がった。

まるで、これからお菓子を配りますよー、という保父さんのような表情だ。

「コジローさんを連れていこうっていう無粋な輩は、哥々に代わって俺が相手をするが、どうする？」

柳葉刀を抜いて、微笑みながら言っている。

沙龍が言った通り、厄介なのは八雲だ。病体の老人よりも、飛び道具に頼っている倫太郎よりも、恐らく、強い。

ただ、倫太郎は敵にはならないだろうが、偃月はこの場の相関関係はほとんど理解していないのだ。

向かってくる者が敵、殺意を放っている者が敵、という、ものすごくシンプルな思考でここに立っている。

「御前、小次郎様は必ず、私が――」

八雲が悲壮な決意をにじませて言うも、

「もう、よい」

老人は首を横に振った。

「御前……!?!」

「もうよいのだ、八雲。小次郎の心は黒田からとつくに離れている。それを、早く認めるべきであつた」

「し、しかし……！」

八雲は納得ができないようだ。

「なんとも驚いたね。頑固一徹、誰の意見も聞きやあしない親父様が、いつたいこの数分でなぜにそんな物分りのいいことになつちまつたんだ？」

倫太郎も不可解な顔をしている。

彼にとつての一番難物はこの老人であつた。最悪の場合、刺し違えても息子を守るつもりでいたのに。

「知りたければ、斎藤新助を名乗つたその少女に聞け。勘当した息子に話すことはなにもない」

「……」

作之助はとても疲れているようだった。

本来なら、病床にある身体なのだ。当然である。

だが、肉体の苦痛はほとんど感じていない。彼の中に押し寄せてきたものは、

長年の後悔と、それを察して封書を寄越した斎藤新助を名乗った者の狡猾さ、いや、あざやかさである。

「彼」の意図は最初分からなかった。

しかし、その正体を知った今、「彼女」が何を望んでいるのかよく分かる。

「申し訳ありません、御前。言いつけを破ります！」  
八雲が走り出た。

既に抜刀している。

目指すは、木佐小次郎の前に立ちふさがる李偃月だ。

(速い——)

体の動きは並だが、刀の振りの速度が尋常ではない。

しかし、偃月は落ち着いて八雲の攻撃をさばいた。相手の速さが分かるということは、ある程度動きが読めている、ということだ。今まで、読めないほどの達人に出会ったことはない。

激しく撃ち合う金属音。倫太郎には互角に見えたが、作之助は少年のほうが格上だと分かった。

あれは若さゆえの怖いもの知らずとは違う。八雲のように小さい頃から道場に  
通つて己の腕を磨いてきた人間とは、根本的に違う存在なのだ。

京都風に言うならば、鬼、といつてもいいかもしれない。

柳葉刀というのは、基本的に片手のみで完結する武器である。だから、もう片  
方の手は別の攻撃に使う。それが彼らの戦法である。

八雲が血を吐き、勝負はついた。偃月が、拳打で動きを封じたのだ。

剣に生き、剣に死す覚悟の彼らに言わせればこの戦い方は邪道だろうが、偃月  
は人の殺し合いに正道や邪道があるとは思っていない。

膝をついた八雲は意識はあるようだが、既に動けなかった。戦闘意欲も失つて  
いる。

「爺々イエイエは？ やるのか？」

偃月が作之助に聞いた。

「いや……。彼の命をとらずにいてくれたこと、感謝する」

「そうしないと、二姐アルチエに怒られるからな」

ニパツと笑顔で言う。

死闘を演じた直後にする顔ではない。だから、彼らは「鬼」なのだろう。

「やれやれ。二人を背負って帰るのはシンドイな」

仲良く気を失っている沙龍と木佐を見下ろして、偃月がぼやく。

倫太郎がそばに来て言った。

「小次郎は俺が担ごう」

「ん？ ミスターがコジローさんの爸爸パーパ？ 似てないなあ」

「はつきり言うぜ。こいつは、まあ、母親似だからな。で、あんたは、この嬢ちゃんの弟かい？」

「えー、なんで分かったん？」

「顔が同じだからな」

倫太郎は笑っていた。

16 斎藤新助の正体

翌日の土御門邸では昼を過ぎても沙龍がまだ昏々と眠り続けていた。

木佐はさつき目を覚まし、松木はそれよりも早くに起きて、心配する藤子とうしに「大丈夫だよ」と言っていたが、どことなく元気はなかった。

偃月は通常通り、朝早くから走りに行つて、さらにまだ見足りないから観光してくると言つて、碧媛と共に街に繰り出して行つた。

医師免許を持っているその碧媛が「沙龍は転がしておけばOK」と言っているので、放つておいてもいいのだろうが、この姉弟は過保護なのか放任なのかいまいちよく分からない。

「なんていうか……、血なのかな。なんだろうね、あの底知れぬパワーは」

松木は木佐に付き合つて食卓につき、コーヒーだけを飲んでいた。縦に長いテーブルだ。ここは洋間に改装されており、異人館のような内装になっていた。

床は足音のしないほどの深い絨毯が敷き詰められ、壁にはレンガの暖炉やフラン



ス窓が並んでいる。

アンティーク調の家具はどれも使い込まれてはいるが、綺麗だ。この部屋に限ったことではないのだが、掃除やメンテナンスが隅々まで行き届いているのが一目で分かる。

「碧媛さんは、確か、血はつながってないですよ」

頬張っていたカツサンドが食道を通っていくのを待って、木佐が言った。

以前、沙龍が簡単な家系図を書いて説明してくれたが、それによると沙龍と偃月が異母姉弟で、碧媛だけはこの二人と血筋が違う。

「そうなの？ にしては馨君と碧媛さんは似てるよね。なんていうか、根性の部分が」

「偃月君いわく、同じ家で育てば色々似るものだそうです」

「ハハッ。それは言ってる。最近、木佐君も馨君に似てきたもんね」

「……そうですか？」

木佐があからさまに嫌そうな顔をしたところで、白いワンピース姿の藤子がワゴンを押して現れた。

背後には手を出そうとしつつもなんとかこらえているタキシードを着た西園寺。仰々しい衣装に決して負けない二人である。まるで映画の中の住人のようだ。

「コーヒーのおかわりいかがー？」

藤子は大きなワゴンをも木佐の斜め後ろあたりによっこらせと止め、聞いた。

大好きなゴロー叔父様の世話を焼きたいところを、客である木佐に先に声をかけるあたり、しっかきしている。

ワゴンの上には陶器のコーヒーポットやフルーツなどが乗っていた。

「ありがとう、じゃあもう一杯もらおうかな」

「はい」

木佐は最初は色々な感覚が麻痺していて、食欲があるのかわからないのかも分からなかったのだが、よくよく考えてみれば昨日、映画村で掛けそばを食べて以来、ほとんど何も口にしていない。

そこで遅い朝食を用意してもらった。案の定、食べ始めると空腹だったことを思い出し、二食分ほど平らげた。

今はやっと胃も落ち着いて、普段飲めないようなブルマンを飲んでいるところだ。

「馨はお腹空いてないのかな……。十二時間も目が覚めないって珍しい……」  
独り言のように言ったが、もちろん、松木は聞いている。

「……心配？」

「え？ ええ、まあ」

少々バツの悪い顔をしている。

「……」

松木は性分で、こういう真面目でシャイな少年少女はすぐからかいたくなるのだが、木佐にそれをやると嫌われるのも分かっているので、なんとか堪えた。下心があるのだ。松木も木佐の前では頼れる大人で居たいのである。

ちなみに、偃月に対しては「天地がひっくり返ろうとも手を出すな」と沙龍からきつく釘を刺されている。その釘がなければ、とりあえず口説くくらいはしていただろう。

藤子と西園寺が去ってからしばらくして、松木は席を立つと、どこからかメモ

を持ってきた。

これ、と、木佐の前にそのメモを置く。

祇園の住所とそこに住んでいるであろう人の名前が書いてあった。

「〃斎藤〃？ 誰です？」

「昨日、気を失った木佐君をここまで運んできてくれた人がね、そこに滞在しているから、って」

みなまでは言わなかった。

松木も具体的な指示は聞いていないのだ。

「……カウボーイみたいな、イカれた格好をした中年ですか？」

「えーと、うん。多分、その人」

「……ここに来い、と？」

「いや、それは言っていなかった。ただ、その住所だけを伝えてくれって」

「……」

「その人、馨君のことも心配してたみたいだから、僕の解釈で言えば、元気になったら二人で顔を見せに来い、ってことじゃないのかなあ……」

「……」

チラッと見ると、木佐は視線を落として強張った顔をしている。

ここで、「松木さんはどう思います？」とでも聞いてくれれば気の利いたアドバースもできるのだが、早く大人になりたがっている木佐にそれは無理な相談だった。

「ちよつと、馨の様子を見に行つてきます」

木佐はメモをGパンのポケットに入れていった。

襖を開けた途端、目があつた者たちが、ビクツと固まつた。

「猫……?」

どこから入ってきたのか、猫が三匹、沙龍の敷き布団にたかっているのだ。

木佐を見て、逃げるか、媚びるか、無視するか、そのどれもできずに固まつてしまつたようである。

みな、野良猫にしては毛並みが綺麗だ。一匹は真っ白で、どうもこれがリ―

ダー格らしい。沙龍のお腹の上の一番いい場所を陣取っている。枕元に居るのは三毛、足元にうずくまっているのは茶トラだった。

「……」

「プ？」

木佐を不思議そうに見上げた白猫が近付いてきた。

「……」

「プ？ プ？」

そのリーダーの行動につられて、もう二匹も木佐の足元に擦り寄ってくる。

「ププ？ プ、プー」

「……」

あやうく猫の鳴き方を忘れるところだったが、この三匹が猫だろうと、猫に化けたなにかだろうと、木佐にはどうでもよかった。

寝ている沙龍の布団のそばには、立派な白い着物が几帳面に畳ひたたんである。不審に思ったて広げてみると、ずいぶん大きい。直垂ひたたれと呼ばれるものだろう。男物だ。

沙龍のものとは思えないのだが、これを沙龍が着ていたのだろうか。

その直垂を、元通りに畳む方法を知らなかったもので、掛け布団もタオルケットも掛けずにお腹を出して寝ていた沙龍の上に掛けてやった。

「なあ、どうして火事を消せば元の世界に戻れるって分かったんだ？ そろそろ手品のタネを教えてくださいよ」

目を覚まさないのを承知で話しかけた。

フウ、と座り込んだまま頬杖ついてため息をつく。

猫三匹が膝の上によじ登ってきたが、好きにさせた。

「まだ起きないのか。京都まで強引に連れてきたのは馨なのに、僕を一人で行かす気か？」

沙龍が昏睡しているから言えるのである。

起きていたらとても言えはしない。

むにーっと頬を引っ張ってみたが、これでも起きる気配がない。

その顔がとても無防備で滑稽だったので、思わず「プツ」と笑った。

「茶碗蒸し作っても起きないかな、こりゃ」

「ちやわん、むし……？」

「……」

まさかと思い、半信半疑で覗き込んでみたが、完全に寝言のようだ。今度は安堵のため息をついた。

「馨はどう思う……？ いや……、馨なら、どうする？」

もし、あの陰気くさい旧家に育って、人間関係にも恵まれず、ただひたすら孤独に生きてきたとしたら――。

沙龍なら、それでも、母親を見捨て、勝手に家を出て行った父親をあつさり許し、一緒に飲み食いもできるかもしれない。

そして、絶対権力を持つ祖父をもとせずに説得し、やがて自由を勝ち取るのだろう。

「……」

何もかも負けている、と思う。

育った環境が違うせいなのだろうか。それとも、生まれ持った気質のせい？ 両方だとしたら、もう絶望的だ。

フウ、ともう一度ため息をついてから、木佐は立ち上がった。三匹の猫が転が



り落ちる。

「いいさ、行ってくるよ。……夕飯までには戻る」

京都育ちの木佐には、そのメモの示すところがどういった場所かは分かる。若い頃の黒田倫太郎が遊興の限りを尽くしていた場所だ。いわゆる色街である。今は午後三時という時間なので、まだあたりは静かだった。夏の夜は遅い。置屋の並ぶ通りを横切って、閑静な小路を行く。

目当ての場所は、昭和の時代からそのままの姿であろう、木造の二階建てだった。門などはなく、路面にそのままドアが設置されていた。表札は出ていない。呼び鈴なども見当たらなかった。その木戸をノックした。

「ごめんください」

固い声で中に呼びかけると、すぐに明るい女性の声がした。

「はい。今行きます」

明らかに玄人だと分かる、四十手前くらいの女性が引き戸から姿を現した。

この境界の女性は恐らくみなそうなのだろうが、美人だった。エキゾチックな、目の大きな西洋顔である。典型的な京美人だった木佐の母親とは正反対のタイプだ。

「すみません、僕は……」

説明しようとした矢先、女性が目を輝かせた。

「あら？　もしかして、小次郎ちゃん？」

「……はい」

親戚のおばさんだろうか。記憶にはないのだが。

いや、そうではなく、彼女はきっと父親の昔の愛人かなにかで、子供のことも情夫から聞いて知っている——、という安っぽい物語が一番想像しやすい。

「まあ、やっぱり！　真由美ちゃんにそっくりなものだから。いやー、会えて嬉しいわあ。こんな美少年になってるなんて。えーと、まだ成人はしてないのよね？　今、高校生？」

「高三です」

「そうなのー。……あ、ごめんなさいね。一人ではしゃいじゃって。私、真由美

ちゃんとは従姉妹なの。小次郎ちゃんが小さい頃にも、何回か会ったことあるけど、忘れちゃったわよね？」

「すみません」

母親に従姉妹が居たという話は知らなかった。

木佐家は親戚づきあいがほとんどなかったし、母方の祖父は木佐が生まれる前に既に亡くなっていたので、その祖父の兄弟のことになるともうお手上げだ。

「あ、倫太郎さんに会いにきたのよね？　上がってくださいな」

「……」

別に会いにきたわけではない。向こうがプレッシャーをかけたから仕方なく来たのだ、と弁解したかったが、快活な彼女は「さあさあ」と急かしている。

つやつやに光った廊下の先に、オープンな居室があるようで、そこから黒田倫太郎がまるでこの家の主人のように気軽に顔を出し、

「よう——」

と声を掛けてきた。

（ああ、帰りたいたい……）

咄嗟にそう思ったが、昨日のことは一応礼を言っておかねばなるまい。そう、一言礼だけ言って、帰るつもりで来たのだ。

黄龍出現の余波をまともに受けて発狂しそうになった自分を現実に引き戻したのも、黒田家に拉致されそうになったところを阻止してくれたのも、土御門邸まで担いでいってくれたのも、すべてこの国籍不明のイカれた男であるのは間違いないのだ。

「昨日はありがとうございました」

だから、几帳面に正座してわざと他人行儀に言ったのだ。

しかし、

「あ？ なんの話だ？」

ちやぶ台の前であぐらをかいている倫太郎は、一方的に話を変えた。そらした、とは木佐は気付かなかった。

「それよりお前な、きつと誤解してるだろうから最初に断っておくが、あの美人女将は俺のカノジョじゃねえぞ。真由美の従姉妹で、小学校の時の同級生なんだよ。まあ、木佐のじーさんが早くに死んだもんで、家同士の付き合いはなかった

みたいだけだな。木佐のじーさんに妹が居てな、それがこの美人女将の母親つーわけだ」

お茶を持ってきてくれた女性の肩をポンポンと叩きながら倫太郎が言う。

「そうなのよ。母は木佐から嫁いで姓が変わり、私も五年ほど前に結婚して斎藤姓になったから、名前の上ではすごーく遠い親戚になっちゃうんだけどね」

女性は斎藤よしえと名乗った。

「〃斎藤〃……」

木佐が思わずその名を繰り返す。

倫太郎はその様子を見て、

「やっぱりお前もなんか知ってるんだな。この美人女将の旦那のほうかな、遠い親戚つか子孫らしいんだわ。例の斎藤新助の。俺もそれを突き止めて、今回ここを訪ねたら、なんとびっくり、その嫁さんが真由美の従姉妹のよしえちゃんじゃねえかってんで。まー、驚いたね。世間は狭いわ。んで、そういう縁もあつて、ここに泊めてもらってんのよ。女一人で無用心なんで、まあ、ボディガードも兼ねてな」

どこをどうしたら、あの厳格な黒田家で育ってこの物言いになるのだろうか、と木佐は思う。

あの祖父にどこまでも反発した姿が「これ」になった、ということか。

「一人？ 旦那さんは？」

木佐がよしえに聞く。

「亡くなったのよ、残念ながら」

「え……？」

聞けば木佐も覚えている数年前の飛行機事故で帰らぬ人になったのだという。

まだ新婚だったので毎日泣き暮らした、とのことだが、今はだいぶ落ち着いているようだ。

倫太郎がそのしんみりした場をぶったぎっていきなり話し始めた。

「まず、斎藤新助ってのは実在する。『練兵館』を作った斎藤弥九郎の父親の名だ。この弥九郎ってのが幕末の頃の有名人で、天才剣士といわれてるんだが……。要するに、新助にしろ、弥九郎にしろ、とっくに死んでるはずの歴史上の人物なわけだ」

倫太郎はズズッと茶を飲んだ。

木佐は、よしえが出してくれた資料を見ている。これは、よしえが提出した斎藤家の家系図を参照に、宇佐美が作製したものだ。

「で、ここに、奇妙なことに、二十年前、黒田家に『斎藤新助』を名乗る男が現れた。俺はその頃から放蕩三昧で家に寄り付いてなかったから知らないんだが、八雲の話によると、そいつは親父の前で『自分は練兵館ゆかりの者だ』と言ったらしいぜ。つまり、単なる同姓同名じゃなくて、あの斎藤家の者だって自己主張したわけだ。しかし、本物の斎藤新助はとっくに死んでるはずだから、これは、子孫が同じ名前をつけてもらった、ってことになるのか？ それとも、単なる詐欺師か、精神病患者なのか？ 小次郎、お前は思うようよ？」

なんだか妙なことになってきた。

倫太郎は斎藤新助の謎解きをしたいのか、それとも、謎はもう解けていて、それを木佐に聞かせるために呼んだのか。

恐らく後者だろう。木佐はそう判断した。

「詐欺師ではないでしょう。何かを盗まれたという事実はないみたいですよ」

「盗まれたというなら、サムライの一番大事な面子ってやつがごっそり盗まれたんじゃねえのか？」

「え……？」

「八雲の話によると……っていつても、あいつも当時まだ十歳くらいだからな。あんまりアテにはならねえが。親父は斎藤新助を一角の剣士と判断して、しばらく滞在させたらしいぜ。だが、仕合ってみても、門下の誰一人としてこいつに勝てなかった——、とくれば、黒田家の面子は丸潰れだろうよ」

「対外試合をしたんですか？」

「らしいぜ。まあ、うちも道場は構えているが、一流の看板掲げているわけじゃないから、流れ者に負けたところで看板持つてかれる、なんてことにはならなかったんだらうが。しかし、負けっぱなしってのはどうにも具合が悪い。そこで、まあ、よくある話なんだが、花園の師範代をうちの門下ってことにして、斎藤新助と試合させたらしいのさ」

「花園の師範代って……」

木佐も通っていた居合道場がある場所だ。「花園」は地名である。



黒田家とは昔から行き来があつて、黒田の子弟はみな通うことになつてゐるのだ。

そこに、一人の師範代が居た。腕は誰もが認めるほどで、京都では敵なしと言われていた人物である。

「その師範代が、例の……？」

倫太郎は、察しのいい息子に頷いてみせ、

「斎藤新助がいい加減空気を読んで手を抜いてくれたのか、師範代が評判通り強かつたのか、まあ、とにかく、勝てた。それでなんとか最後の砦は守つたつてわけだ。が、その件があつたせいで親父は師範代に頭が上がりなくなつた。増長するような男でもないが、無意識のうちに十二家の人間が流れ者に負けるようではいけない、と思つたのかもしれない。青春きよはるの指導に熱が入つたのも、そういう背景があるのさ」

「……」

しかし、だからといって長男の死を斎藤新助のせいにするのは筋が違ふ。

倫太郎の口調の裏にはそんな主張があるように思えた。

「話は戻るが。黒田の家に現れた斎藤新助は、もちろん江戸末期に生きていた本人じゃねえ。しかし、子孫や分家を調べても他に新助って名前は出てこない。

じゃあ、誰なんだ？ 神道無念流の技を持つ、恐ろしく強い男——」

「……」

それを聞かれても、木佐には分からない。

沙龍からは「甲斐弥太郎と斎藤新助は同一人物かもしれない」としか聞いていない。

しかも、その情報源は八雲なのである。

「八雲少年はな、この斎藤新助の強さにすっかり魅せられちゃまって、まとわりついてたそうだけ。で、斎藤も八雲にだけは色々話をした。門下の連中は嫉妬と畏怖で奴を遠巻きにしてただろうからな。」

そこで、八雲が聞いた話に、妙な符合が一つある。斎藤が言った『馨』という名前だ。まだ結婚もしてねえのに、子供を持つ気でいること、しかも、もう名前を決めていて、それを十歳くらいの少年に伝えるって、意味が分からねえだろ？ どういうつもりでそんなことしやがった？ 普通に考えてたら永遠に答えは分か

らねえ。

俺はな、小次郎。こいつは、黒田の血の呪縛も、甲斐馨がやがてそいつを断ち切ってくれることも、全て知っていたんじゃないかと思うぜ」

「予知能力でもあったと……？」

「そんなオカルトな話じゃねえよ。奴は自分の抱える宿命と、黒田の家に漂う空気と、そして、ちっちゃい清春を見て、そう思った。いや、願った——。双方にとつて、一番いい結果を、な」

「じゃあ……、やっぱり斎藤新助は馨のお父さんなんですか？」

木佐が聞くと、倫太郎は黙り込んだ。

じつと腕を組んでいる。

しばらくして、

「まあ、結論はそういうことなんだろうな」

と、自信なさそうに言った。

「……？」

「あの嬢ちゃんのお父さんは弥太郎というそうだな。なんとも古めかしい名前だ。そ

う思わねえか？」

「ええ、まあ……」

そうだ。自分も似たようなことを言った記憶がある。

下手するとそれは明治時代の名前だ、と。

「つまり、ここからは俺の推測なんだが、寿命のことはひとまず置いておいて、単純に名前だけを見れば、弥太郎ってのは斎藤新助の長男ってことにならないか？ 弥九郎は九男だ。昔は子沢山だから、それくらい居ただろうよ」

「……どういうことですか？」

「つまりな、斎藤弥太郎と名乗ると、有名人の斎藤弥九郎をすぐ思い出されて関連を問われてしまうから、正体を隠すためには偽名を名乗る必要があった。しかし、本名である甲斐はもつと名乗るわけにはいかない。だから、咄嗟に身近な名前を名乗った、ってことじゃねえのか？ 親父さんの『新助』ならどこにでもあのような普通の名前だ」

「……なぜ正体を隠す必要が？」

「おいおい。お前、東京の高校では首席らしいが、変なところで抜けてんな。」

『黄龍様』だぜ？ 明治政府は最初から甲斐家をひそかに追っかけてたんだよ。いや、明治政府が知っていたってことは、恐らく徳川家も知っていただろう。だから、この追いかけてつこには数百年の歴史がある」

「しかし……、甲斐という名はどこにも」

木佐は、もう一度家系図を見た。

「本当に抜けてんな。つまり、保持者の因子を持っていたのは斎藤新助の最初の妻だ。これが甲斐姓なんだろう。弥九郎たちは母親が違うはずさ」

「……」

木佐は呆然としながら、今度は別の視点でその家系図を見た。

斎藤新助には子供が十人以上居たと記されている。

当時は生まれてすぐ亡くなったり、大きくなる前に亡くなるケースも多かったから、その中でも成人したのは二、三人だろう。

その一人が甲斐弥太郎だとすると……。

「年齢にはどういうカラクリが？ それが本当なら、甲斐弥太郎は十八世紀末の生まれで、黒田家に現れた時は二百歳くらいってことになりますか」

「うん、それはなあ、俺もよく分からねえが、保持者の一族は短命だったり、長命だったりするんじゃないか？」

倫太郎は適当に言ったのだろうが、それはほぼ当たっている。

木佐は話題のことはよそに、長年疎遠だった父親と、案外普通に話すことができてこの状態を奇妙にも可笑しくも思った。

自分は、この父親の所業を許してはいない。とても無責任で最低でどうしようもないロクでなしだとも思っている。

しかし、もっと毒気のある人物だと思っていたのに、その毒は自分には向けられないのだ。それが分かると、拍子抜けした。

確かに、倫太郎のほうが小次郎を苦手とする理由はどこにもない。そもそも、それほどの時間を共有してもいないのだ。

「で、お前、土御門の若様んちに戻るんだろ？　ちよつと甲斐馨に聞きたいことがあるから、俺も一緒に行くわ」

などと、木佐の返答も待たずに仕度を始める。

(この人と一緒に歩くのはものすごく遠慮したい……)

と、テンガロンハットを見て思う。

「じゃ、よしえちゃん、ちよつと行ってくるわ」

「はい。小次郎ちゃん、また来てね！ 会えて嬉しかったわあ」

斎藤よしえが玄関まで見送りに来てくれた。

「僕も母の親戚の方に会えて嬉しかったです。伯母さん。っていうのは失礼ですか。よしえさんといった方がいいですよね」

「まー、倫太郎さんの子供とは思えないイケメンだわあ」

「なに言ってるんだよ、祇園の帝王と呼ばれた俺の栄光を知ってるだろう」

と、倫太郎はよしえをつついている。

二人は仲がよさそうだが、これは昔なじみとしての間柄だ。男女の深い関係には見えない。

「あの……、もしかして、母と祖母の墓を掃除してくれたのは、よしえさんですか？」

ふと思い出したので聞いてみた。

「え……？ 木佐家の？ 嵐山のお寺よね？ うーんと、ごめんなさい。去年の

お盆にはお墓参りに行ったのだけど、それ以来は行ってなくて……」

「そうですか。いえ、いいんです。ありがとうございます」

よしえに別れを告げ、鴨川を渡り、河原町通を歩いた。

昨日は千年前の同じ場所を歩いたのだ。妙な気分である。

しばらく無言で歩いた後、

「お父さんだったんですね」

とだけ言った。

何が、とは言わないし、聞かれなかった。

さつきまで饒舌だった倫太郎も気味が悪いほど大人しい。

「馨は昨日っから眠りっぱなしです。まだ起きる気配もないです。行っても無駄足になるかもしれませんか？」

「そうかい。まあ、だが、俺の勘ではそろそろ起きるだろう」

黒田倫太郎とは、こういう人だっただろうか。

百億歩くらい譲って、なんの偏見もなく見てみると、「祇園の帝王」と呼ばれていた理由が分からなくもない。また、それが癩に障った。



「馨に聞きたいことってのは？」

話題もないので聞いてみた。

「うーん……。お前は昨日寝てたから、知らねえか。あの嬢ちゃん、うちの親父になんか啖呵切ったのよ。昨日、親父が出張ってきたのは覚えてるか？」

「おぼろげには」

気を失う前後に、黒田作之助の姿を見たのは覚えている。

十五で黒田家を出て行って以来、ずっと、あの祖父に対しては後ろめたさのよくなものはあった。東京でされたことの仕打ちを差っ引いても、である。

きつと東京の高校を選んだことをよく思っていないだろう、自分を恨んでいるだろう、と思っていたのだが、昨日見た作之助の表情は、決してそういったものではなかった。

「嬢ちゃんが親父に封書を送ったらしいんだが、その中身がなんなのか、ちよつと興味があつてな」

「封書……？　もしかして、あれか……？」

「知ってんのか？」

「大きな業務用の封筒を送ろうとしてたのは知ってます。いつもは探偵から色々送られてくるので、馨のほうから送るのは珍しいと思って」

「同棲中のカップルかよ。まったく、隠し事もできねえな」

「カップルじゃないから、隠すようなことが何もないんですよ」

木佐は苦笑しながら言った。

夫婦や恋人はとかく隠し事が多い。もし、自分たちがそういう関係なら、沙龍は上海でのことも全ては話してはくれなかっただろう、と思うのだ。

「中身も知ってるか？」

「そこまでは。甲斐弥太郎関連で、探偵と連絡を取り合ってたので、そういうものだろうと」

「そうか……。ただ、俺の思ってることが正しいなら……。アレは大した嬢ちゃんだぜ。親父の弱みを一瞬で見抜いて、それで脅迫しやがったんだ。しかも『事前』に』な。遅効性の毒ってのは、じわじわ効くだろうよ」

「おじい様にいったいなんの弱みがあるっていうんです？」

「まあ、俺たちじゃ、思いつきもしなかっただろうな」

倫太郎はそれ以上は言わなかった。  
それが何なのかは、沙龍に聞けば分かるだろう。

## 17 親子喧嘩

行きはバスを使ったが、帰りは歩きで戻った。

どちらも「バスに乗ろう」と言い出さなかったからだ、気まずい時間を長くしてもしょうがないのに、と思いつつ、木佐もやはり言い出せなかった。

京都という街は狭いので、ぶらぶらと歩いていれば目的地には着く。祇園から烏丸通の土御門邸までも一時間はかからなかった。

立派な四脚門が見える頃になって、急に倫太郎が口を開いた。

「なあ、小次郎。ひとつ、話しておきたいことがあるんだが、いいか？」

「すぐ終わる話なら聞きます」

「愛想のねえこつて」

そうは言うものの、倫太郎もすぐ済む話だからこの時点で口を開いたのだらう。木佐にもそれは分かっていた。

そして、倫太郎の口から出たのは、予想を遥かに超えた身勝手な言葉だった。

「俺はな、真由美とお前を捨てたことを、謝る気なんかこれっぽっちもないぜ？」

「……」

「清春を死なせちゃった時、俺は思ったのよ。こんなに悲しい思いをするくらいなら、はなっから大事なものなんてないほうがいいじゃねえか、つてな。だから、俺はもう『家族』はいらねえ。真由美には正直にそう言った。あいつは納得してくれたぜ？　それで、あの家を出て行ったわけよ」

「……」

「まあ、だから、お前が俺を恨むのも嫌うのも当然だとは思いますが、俺を謝らせたいのなら諦めてくれ」

「……」

立ち止まって目を見開いた木佐をそのままにして、倫太郎はさっさと行ってしまった。

なんだって？

今、黒田倫太郎は、とても黒田倫太郎らしいことを言った気がする。あまりに

自然で、聞き返すことすらできなかつた。

倫太郎はスタスタと門をくぐり、玄関を開けてくれた武子に「馨ちゃんは目エ覚めたかい？」と聞いた。

ええ、今起きたばかりで——、という言葉も終わらないうちに「じゃ、ちよつと上がらせてもらおう」と、勝手に上がっていった。

偃月と碧媛も既に屋敷に戻ってきている。今日は心置きなく外国人らしい買い物をしてきたようで、居間に土産物を並べて二人ではしゃいでいたところだつた。

しかし、木佐が珍しく大声を出して誰かに追いつがっているので、「なんだ、なんだ？」という顔で廊下に顔を出した。

沙龍は隣の部屋の布団の上で体を起こし、ボーツとしていた。武子が淹れてくれたお茶を飲んでいる。

倫太郎が笑顔を見せた。

「よ、顔色はよさそうだな」

そこに、ものすごい剣幕の木佐が現れる。

一瞬、それが木佐であるとは分からなかった。

「今更つ、そんなくだらないことを宣言するためだけに、僕の前に現れたっていうのか！」

「……すまねえな。起きたばつかなのに騒がしくて」

と、沙龍に対して言い、

「くだらないだと？ たかだか十七年生きてきただけのひよつ子が……」  
背後の木佐に鋭い視線を飛ばす。

「ナマ言ってんじゃねエ——ッ！」

振り返った倫太郎の鉄拳が、木佐の背後の壁をぶち抜く。木佐は紙一重でかわしていた。本来ならその拳は、木佐の綺麗な顔面を撃つ予定だったのだろう。

燃える瞳をした木佐が即座に反撃した。倫太郎の腹に一撃、拳が入る。

だが、鉄はボディのほうだったようだ。ビクともしない。プロレスラーのようだ。

もともと、打撃技はそれほど得意ではないのだ。柔術ではそこは鍛えない。

木佐は迷うことなく攻撃方法を切り替えることにして、身を屈め、筋肉質な倫

太郎の脇を抜けて、床の間にあつた日本刀——銘は分からない——を、掴むや否や、抜いた。

鞘は勢いそのまま投げ捨てる。

それを見て倫太郎が愉快そうに吼えた。

「ハッハー、小次郎、敗れたり、だぜ、マイソン my son—」

「ふざけるな……っ！」

「あ……」

親子喧嘩が始まってしまった。

沙龍は頭が働いていないのもあつて、この事態をどうこうする気もない。

木佐がぶち切れてしまったのは、恐らく、溜まり溜まったものが爆発したせいだろう。なまじつか、さつきまで普通に対話できていた分、その反動もあるのかもしれない。

既に廊下側の襖は倫太郎によって蹴り倒され、庭に面した障子戸は激昂した木佐に切り刻まれている。

「僕は！ 謝ってほしいわけじゃないっ！」



木佐が叫びながら、そこらへんのものを斬り倒している。

とぼつちりで色んなものが飛んでくるので、沙龍はとりあえずどこかに避難すべく、まずはパジャマ姿の上に、掛け布団がわりにしていた直垂をとりあえず羽織った。

四郎は銃声が聞こえても大して動じてない。自室兼仕事部屋で、書類を見ている。

顔も上げずに、別の机で仕事中の宮脇に言った。

「騒がしいな。何を壊してもいいが、一郎兄さんの柿右衛門だけはやめてくれ、と言ってきてくれ」

客間に飾ってある柿右衛門の壺は一億はくだらない逸品らしいが、四郎がそう言うのは金額の問題ではなく、大事な遺品だから、である。藤子にとっては父の形見になる。

その壺は骨董が趣味だった一郎が大事にしていたものなのだが、『小汚いセコ

ハン』を有り難がる趣味は四郎にはない。

「ご心配なく。あそこに飾ってあるのはレプリカです」

「そうなのか。ずいぶん用意周到だな」

「そりやもう、あなたがた兄弟が派手な喧嘩をするたびに、屋敷の建て替えをするハメになってましたから。その手の対策は万全です」

「……」

若かりし頃は確かにそんなこともしていた。

一番上と一番下は性格が穏やかで、争いごとに加わることはなかったが、好戦的な二郎と唯我独尊の四郎は特によく衝突した。

その性格が祟って、香港ではマフィア相手にトラブルを起こしたのだ。五体満足で日本に帰って来たのはマフィア側に居た張という男のおかげである。張はなぜか四郎のことが気に入ったらしく、色々と骨を折ってくれた。

（そういえば、じいさまが妙なことを言っていたな……）

窓の外に目をやった。

庭がだいぶ破壊されている。池に面して造られた釣殿つりどのの屋根がいままさに吹っ

飛んだところだった。

「……宮脇。庭師と大工と弁護士に連絡しておけ」

「心得てます」

四郎はため息をつきながら部屋を出て行った。

「いいのか？ 止めなくて」

野次馬に來た碧媛がのんびり言った。

「うーん……。もうこの際、とことんやったほうがいいような気がするんだよね」

沙龍もおにぎりを食べながら見学している。

偃月は居間に戻ったようだ。ただの親子喧嘩に興味はないらしい。

そこに、ネクタイを締めた四郎が現れた。

シャオチエ

「小姐——」

「……？」

「いきなりで申し訳ないが、貴女はもしかして、張 チャンダーレン 大人の娘か？」

「ハア？」

アヒルが丸焼きターキーを口に突っ込まれたような顔をした。

「なんの話？ それ、張大哥 チャンターコ のこと？」

「フム、違うのか……。では、あの色男とはどういう関係なんだ？ まさか君の情夫ってわけでもあるまい？」

「んー？ 一番誤解なく言うなら、部下ってことになるけど……」

「部下？ 君が、張の？」

「いや。違う。張が、私の」

「ハア？」

今度は、四郎が鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。

「だいたい、なんで張大哥のこと知って……ええええあああああ!？」

いきなり叫んだ後、沙龍は思いっきりよくポンと手を打って、ごそごそと部屋の片隅に置いてあったリュックサックの中から財布を取り出し、さらにそこから上等な和紙で作られた名刺を引っ張り出した。

日本語名の下にあるローマ字表記を読み上げる。

「つちみかどしろうまさおみ!？」

「……いかにも」

その名刺は四郎が一番最初に作ったものだ。今は少しバージョンが違う。

沙龍は名刺の裏をチラッと見てから、それを四郎に渡した。

「そうだった。張大哥からキョートに居る友達を訪ねろって言われてたんだ。すっかり忘れてたけど！」

「……」

四郎は懐かしい名刺を一瞥し、裏に書かれた文字を読んだ。

『お前に貰ったこの名刺を俺の大事なボスに預けておく。トラブルに遭遇していたら助けてやってくれ。——張』

そう英語で書かれてある。

「なるほど……。色々と謎が解けたな」

張は蒼龍会のナンバー2である。とすれば、その上司は一人しか居ない。

この中学生くらいにしか見えない脳天気大食漢が蒼龍会の頭か、と四郎は妙に

納得してしまった。

「この街の歴史を正してくれたことに感謝する」

「……歴史は変えられないよ。シローさん。私がやったのは力技で街に溜まった鬱積を吹っ飛ばしただけ。誰も救えていない」

「それで充分だと思うが？」

「いや……。救いたい人を救えなきや意味ないよ」

沙龍の視線の先には、いつもの冷静さを完全に失った木佐小次郎が居る。

「ところで、小姐。その着物は……」

「ん？ これ？」

と、コート代わりになっている直垂の襟をなでる。

「もしかして保憲やすのりに会ったのか、と、とある人が聞いてくれと言っている」

「ヤスノリ……？」

沙龍は靈感がまるでない。ついでに言うと、あまり記憶力もよいほうではない。覚えておかなくていいことはさっさと忘れるタイプである。だからこそ、張に四郎の名刺をもらったことも忘れていたのだが。

以前、必然に迫られて調べた日本神話のことも、スサノオを倒した今はすっかり忘れただろう。

碧媛は、四郎のかたわらにじいさまの気配を察しているが、特に何も言わなかった。

「これをくれた人の名前は覚えてないけど、ああ、もしかして“そういう”縁でくれたのかな……」

「“そういう”とは？」

「私の近い人が、これをくれた人と縁があったから、あの人は私を助けてくれたってことじゃないかな」

近い人というのは松木のことである。そういえば、松木はこの騒ぎなのに野次馬に来ていないな、と沙龍はふと思った。

この着物はなにか不思議な作用が施されていた気配がある。

沙龍は何度かスサノオのあの巨大な剣に斬られたはずなのだが、あとで確認してみたら無傷だったのだ。きつとこの着物が守ってくれたのだろう。

「……」

沙龍の支離滅裂な物言いを、四郎は言葉以外の部分で無理矢理理解することにした。

あの古いにしえの平安京での賀茂保憲との一瞬の出会いを、沙龍は言葉ではなく体で納得しているのだ。それをロジックで説明しろ、といっても無理なのである。

「だとすれば、コレは一番近い人に返すのが道理かな」  
そう言っつて、沙龍は直垂を脱いで、四郎に渡した。

倫太郎は早々に剣術修業を放棄した人物であるので、最初、この喧嘩は木佐のほうが圧倒的に有利かと思われたが、さにあらず。

木佐は頭に血がのぼっているので無駄な動きが多いし、倫太郎は素手で剣に対応する術を心得ているからだ。いわゆる無刀取りといわれているものである。黒田家では幼い頃にまずこれを徹底的に学ぶ。柔術の技だ。倫太郎もここまでは真面目にやった。

この無刀取りの技を体に染み付くまで覚えてから、初めて日本刀を振るうこと



が許されるのだ。

刀は無敵ではないということを知り、かわす技があるならその上をいかねばならない。それが黒田家のモットーである。

「こざかしい……っ！」

いい加減、逃げ回って攻撃をかわすだけの倫太郎に業を煮やし、木佐はそばにあつた背の高いアカマツの木を切り倒して、倫太郎の逃げ道をふさごうとした。

ミシツと倒れてくるアカマツをころうじて避けた拍子にバランスを崩し、倫太郎は池に落っこちてしまった。

「どわっ!？」

水深は五十センチくらいしかないので溺れる心配はないが、動きは鈍くなる。チャンスとばかりに、木佐は池の端にしゃがんで手のひらを水面につけた。

「ま、待て……っ！」

水中に尻もちをついていた倫太郎はやおら立ち上がろうとしたが、間に合わなかった。

木佐の左手から、倫太郎の居る場所までの数メートル分の水が一直線にバキバ

キツという音を立てて凍りついたのだ。

「……っ！」

これは観念するしかない。倫太郎は中腰のまま凍り付いてしまった。

心臓から上はかろうじて水面より上に出ているから助かったが、なんとも間抜けな姿である。

木佐はまだ喚いている。

「僕は謝って欲しいわけじゃない！ あなたに望んでいることがあるとすれば、おじい様と和解して、しっかり生きて行って欲しいって言うことだけだ！」

「……」

「そして、たまには母のことも思い出して……、墓参りだって、十年に一回なんて……」

言葉に詰まっていた。感極まっているのかもしれない。

ずっとその様子を見ていた沙龍は裸足のまま庭先に降りると、凍っている倫太郎のそばまで来て言った。

「倫爸爸パパ、キサさんに謝って」

「……?」

「あの意地っ張りでアマノジヤツキーなキサさんが『謝ってほしいわけじゃない』って何回言ったと思う? 謝ってほしいに決まってるじゃん。だから、謝って」

「……」

呆れているのか、思考が追いつかないのか、倫太郎は半分口を開けたまま固まっている。

喋れないわけではない。上半身は凍っていないのだ。

「あなたにどんな意地があるうと、曲げられない主義があるうと、それでも、謝って。私はスポンサーだから。この資本主義の国では、どんな無理な要求だろうとスポンサーのいうことは聞いてもらうよ」

「……なんだって?」

かろうじて、といった感じでそれだけ言えた。

が、沙龍は冷酷に言い放つ。

「二回は言わない。日本ではこういう場合『仏の顔も三度まで』と言うんだらう

けど、中国では二回目は死体になるから、だいたい一回で終わるんだ」

「……」

碧媛はニヤニヤ笑っていた。

四郎も興味なさそうな顔をしているが、しっかりと顛末は見届けるつもりのようにだ。

「小次郎、すまん」

と、倫太郎はあっさり屈した。

「別に嬢ちゃんに脅されて仕方なくっていうわけでもないんだが、そのう……、さつき『謝る気はない』って言ったのは、本心じゃねえ。そう言っておけば、前は俺のことを憎み続けることができるだろうと思っただからだ」

「なんでそんな意味不明なことを！」

木佐は怒っている。当然だ。

「まあ……、お前にはまだ分かんねえだろうな。憎む対象がいたほうが、人生、楽になるってことが」

そんな擦れた大人の理屈に納得できるはずもなく、木佐は振り上げた拳の持つ

て行き場がない。

しばらく睨んだあと、大声で叫びたいのを幾分抑えて言った。

「僕は……、母を守れなかった、守る気もなかったあなたをずっと憎んできた。なぜ、強引にでも離婚して黒田の家から解放してやらなかったのか、いや、その前に、僕の兄さんが死んだ時に、二人で一緒にその死を乗り越えようしなかったのも不可解だ。だったらなぜ結婚した——。そんな、形だけの伴侶になんの意味がある。結果、みんなが不幸になっただけじゃないか！」

「……そうだな。お前の言うとおりで」

倫太郎の開き直りに木佐は顔をしかめたが、舌打ちしないだけさすがに自制心がある。

「そうやって、ずっと恨んで、憎んで……。だけど、それでよかったなんて思ったことは一度もない！ 憎む対象なんて、いないほうがいいに決まってるじゃないか！」

「……そうかい。まあ、お前がそう言うならそれでいいさ。分かり合おうとは思っていない」

「勝手に……っ！ 言ってる！ あなたと話すことはもうなにもない！」  
そう言っつて、木佐は持っていた抜き身の日本刀を投げ捨て、引き上げてしまっ  
たのだ。

ふう、とため息をついて、倫太郎は沙龍を見た。

「わりいな。決裂しちまった。もつとうまくやるつもりだったんだが……」

「いや……。キサさんにしては上出来じゃないかな」

沙龍は微笑んでいた。

あれだけ感情を吐き出させることができたのだ。数ヶ月前に比べれば大した進  
歩である。

木佐は縁側まで黙々と早足で歩いてくると、

「すみません、四郎さん。庭の弁償は……します」

顔も上げずに言った。

「いや、しなくていい。結局、張への借りを返してないから、これでチャラって  
ことにしよう」

「……?」

やつとそこで四郎を見る。

三つ揃えのベストにネクタイをきっちり絞めた四郎は冷淡なビジネスマンの印象を与えるが、最初に挨拶をした時よりは情に篤い人間であるように見える。単に、この愛想のなさに慣れただけかもしれない。

(なんだ。僕と同じか)

そう思うと可笑しかった。

夜になってから、ぞろぞろと団体で料亭に行った。昨日、行く予定だった老舗だ。予約をキャンセルしてしまった損失は、四郎がなんとかしたのだろう。

土御門家の総員、四郎、五郎、藤子、そして武子に加え、西園寺や宮脇も同道した。西園寺は藤子のお守役として、宮脇は四郎の秘書として。ゲスト側は沙龍と木佐、偃月と碧媛である。

沙龍はこの場でやつと、黄龍召喚時に四神の力が一部代替とはいえ全て発動したカラクリを知った。

十二天将という、清明の式神たちが肩代わりをしてくれたようだ。青龍は八坂神社の悪王子社の空の祠の中に紙人形が入れられ、祝詞と同時に発動するように細工され、朱雀は四郎自身が召喚した。西方白虎だけは発動方法が違うのだが、その件については碧媛が、

「説明が面倒くさいのでいつか話すから、今は有耶無耶にしておいてくれ」と、四郎や松木を押し切ったようである。

恐らく、いま自分が仙界の関係者だとバラすと、背景や動機、それに李家のもうひとつの秘密も説明しなくてはならないので、沙龍には言いたくなかったのだろう。もちろん、偃月にも内緒だ。

沙龍は、親子喧嘩のあとで倫太郎が押し付けていった通帳と印鑑を、どうやって木佐に渡せばいいのか考えている。

絶対、受け取り拒否するに決まっているのだ。しかし、預かってしまった以上、いつかは渡さねばなるまい。

その通帳のやり取りがあった後、倫太郎は、沙龍が黒田作之助に送った封書の中身を聞いてきた。



「例の自殺した師範代さんの、遺された妻子の行方と、現在の状況を報せただけ」

沙龍はそう答えた。

倫太郎はなんとなく察しはついていたらしい。

「……なるほど」

黒田清春の事故死の責任を問われ、自殺した師範代のことである。

その妻子を探し出すのはなかなか骨が折れた。宇佐美が日本全国の持てる限りのネットワークを使って、やっと探し当てたのである。

倫太郎は名前は変えても、あまり隠れるつもりはなかったのですぐ見つかったのである。

しかし、この妻子は世間というものから徹底的に隠れて、ひっそり暮らしていたようだ。

「多分、キサさんのおじいちゃんは、その師範代を自殺に追いやってしまったことをずっと悔やんでいて、そのせいもあって、キサさんをより強く、より立派な跡継ぎにしたかったんじゃないかなー、と思ったんだ。だって、そうしないと、

キサさんのお兄ちゃん、の死も、師範代の死も、無意味になってしまおうでしょ」

「……まあな」

それにしても大したもんだ、と倫太郎は思う。

沙龍の集めた情報がどれほどあったのか知らないが、それだけで作之助の弱みを見抜いたのだ。直接会ったこともないのに、である。いや、むしろ、人柄を直接知らないほうが偏見なく見れたのかもしれない。

「で、それがえげつない脅しになったわけだ」

「私は脅すつもりで送ったわけじゃなくて、恩を売るつもりで送ったんだけどね。あなたの気になっていた件は、私が調べておきました。安心してくださいて」

「親父は、その妻子の行方を、自分では調べなかったのか？ いや、調べたが、興信所が無能で見つけられなかった、ってことか？」

「さあ。どうだろ。ちよつとは調べようとしたかもしれないけど、この資本主義大国で人ひとり探すのってかなりお金も使うから、よっぽどのがない限り調べる気にはならないでしょ。それに、そんなことコソコソやってれば、いずれ家

族にはバレるからねー。私だって、倫爸爸と事前に連絡取り合ってたこと、実はキサさんにはバレてたんじゃないかと思うんだ」

「まったく。同棲中のカップルかよ」

倫太郎が笑った。

「それで、『齋藤新助』を名乗ったのはなぜなんだ？」

「ああ、それもね、爺々の弱みのひとつじゃないかと思って。なんでも、齋藤新助一人に、黒田門下は全滅したんでしょ？ 爺々にしたら、思い出したくない名前だろうな、って」

「フン……。コエーな。ひた隠しにしてきたであろう親父の弱みをあざやかに見抜いて脅すあんたが、自分の弱みはあっさりバラしちまうんだもんな。まったく、怖いったらありやしない」

数日前、沙龍は倫太郎に弱みを聞かれて、こう答えた。

昔は偃月だったが、今は木佐小次郎だ、と。

偃月がそれほど大切ではなくなったのか、というところ、それは違う。家族は今も大切である。それは変わらない。

しかし、沙龍の中では体を張って命を助けられる人というのは、いつも一人しか居ない。というよりも、一人分しかその枠は作れないのである。

咄嗟の時に、誰を守るか、という話である。

それが、昔は弟だったが、今は木佐だ、と。

そして、それを憚らずに言えるのは、絶対の自信があるからだろう。倫太郎はそう思っている。

「倫爸爸は、爺々と和解はしないの？」

「んー、今回は、小次郎と会えたことだけで満足しとくわ。まあ、八雲の件もあるから、あっちはぼちぼちな」

「ミスター・ヤクモは彼の中ではなににも裏切ってはいないと思うけどね」

「そうか？ あんたにはなんでも分かるんだな。俺はいまいちあいつが何考えてんのか、分かんねえよ」

去り際、倫太郎は妙なことを言っていた。

「小次郎のこと、よろしくな。色々世話になった。じゃあな、ロシア」

「おい……。ロシアって誰だよ」

「すまん、行き着けの飲み屋のフライリピーナだ」

そんな人懐っこい笑みを残して、仙台に帰っていったのだ。

沙龍はその一幕のことはすっかり忘れて、いまは一心不乱に茶碗蒸しを掬っていた。

隣できちんと正座して行儀よく箸を使っていた木佐が、自分の分の茶碗蒸しの器を沙龍の膳に置いた。

「……いいの？　ありがとう」

「……うん」

盛大な親子喧嘩をして、感情のままに叫んだり喚いたりしたことが今になって気恥ずかしくなってきたのか、木佐は口数が少ない。

「もうね、日本の茶碗蒸しは芸術品だよ。キサさんの作るやつもそうだけど、なんでこんなになめらかなんだらう。あー、日本に来てよかったー」

木佐は半分呆れている。

「茶碗蒸しごときで馨が釣れるなら、東京に戻ったら毎日でも作ってやるよ」

「え！　ホントに!?　その言葉、忘れるなよ!?　ああああ、録音しておくんだっ

たよ！」

「……」

木佐はいよいよ呆れた顔で黙々と焼き魚を食べている。が、

（一生な）

心の中では笑っていた。

京都滞在中の予定などは最初から決めておらず、めいめい、好きなように過ごし、好きなときに帰ろう、ということだけ周知していた。

碧媛は出雲に行く予定があるらしく、翌日、朝早く出て行った。沙龍も偃月も、あつさりしたものである。特に沙龍は丸一日寝ていたので、碧媛とは数時間しか一緒に過ごしていないのだが、この姉弟たちには暗黙の了解事項があるのである。ろろ。

会おうと思えばいつだって会える、しかし、どこかで野垂れ死ぬようなことがあればその時——という、少し変わった人生観みたいなものだ。

「じゃあ、またな。二人とも、まだ学生なんだから、勉強を怠るなよ。あと、くれぐれも健康には気をつけるように」

「う、うん。碧姐々も気をつけて」

沙龍は高校の通知表は見せられないな、と思った。

「再見！」

偃月はひとしきり手を振った後、

「俺たちもそろそろ引き上げるかー？」

そんなことを言っていた。

「そうだねえ……。ユエはもうだいたいぶ観光しまくったっぽいし、キサさんは早く東京に帰りたがってるし……。じゃあ、今日は自由行動にして、明日、三人で東京に帰る？」

沙龍が「三人で」と言ったのは、松木はもう少し実家に滞在する予定に見えたからだ。

藤子とうこがそれを望んでいるというのもあるのだが、実際、松木にその決定を伝えると「じゃあ、僕はもう少しこっちに居るよ」と言っていた。

帰ることが決まると、偃月は、

「他に見てないところあったかな。あ、大阪まで行ってみようかな」  
などと言いながら、時間を惜しむように出て行った。

木佐は、先に一人で東京に戻る、と言い張っていたが、それはなんとか思いと



どまってもらい、じゃあ明日の新幹線じゃなくて今夜の深夜バスで帰ろう、という妥協案で納得してくれた。

(とつとと帰りたいのは分かるけど……。今回のことで、少しくらい京都の印象、マシになったりしてないのかなー)

と、沙龍はぶつぶつ言いたい気分である。

あるいは、木佐の「早く東京に帰りたい」はもしかしたらポーズかもしれない、とも思う。

沙龍は午前中に屋敷を出て、北野天満宮で宇佐美と待ち合わせた。ここからは黒田邸が近いのだ。

「馨ちゃん、こつちこつちー！」

相変わらず、地味でむさ苦しい格好をしたウサミミが鳥居の前で手を振っている。

花束を抱えているのがこれほど似合わない人間も居ないだろう。

「あれ？ 小次郎君は？」

宇佐美がきよろきよろと辺りを見回した。

面識はないのだが、宇佐美は木佐の顔も名前も性格もよく知っている。

「誘ったけど、行きたくないってさ」

「そっか。……えーと、じゃあこれ。お花とフルーツと、あと、お見舞金の入ったのし袋ね。こういうのは一回だけで終わるようになってんで、結びきりの袋を使うの、これこれ。言われたものは全部用意したけど、本当に一人で乗り込む気？大丈夫なの？」

「大丈夫。一応、この前『挨拶』はした。今日はお見舞いだけだから。長居はしないつもり」

そう言って、宇佐美の用意したものの一式を全部受け取った。

沙龍が持つと、花束で顔が隠れてしまう。

「ありがとう。とりあえず京都での仕事は以上だから。好きに東京に戻って。私たちも今夜バスで帰るから」

「了解です」

業界人のようなノリで宇佐美は大事なクライアントを見送った。大きな花束がよちよちと歩いていく。

この時、沙龍が黒田邸でどういう扱いを受け、なにを話したか、木佐は知らない。ただ、手ぶらで帰ってきたところを見ると、持っていったものを突っ返されたりはしなかったようだ。

夜になって偃月が戻ってくると、お世話になった土御門家の人々に礼を言つて、三人は屋敷を辞した。

午前零時という時間だが、うだるような暑さが続いている。

閑散とした京都駅のバスターミナルには、スーツ姿の八雲が見送りにきている。自分から近付くような真似はしない。少し離れたところで影のように控えている。

木佐は複雑な表情を浮かべ、

「ここまでが『馨の予定』なのか？」

不機嫌な声音で聞いてくる。

「うーん、と、そういうわけじゃないけど……」

八雲にバスの時間を告げたのは沙龍だし、きつと来るだろうと思って言ったわけだが、木佐がここまで渋い顔をするとは思わなかった。

「今回、キサさんに内緒で色々余計なことしたのは謝るよ。ごめん。でも、これが最後だから。八雲さんには挨拶くらいしてあげなよ。あの人はキサさんを守りたかっただけだよ。それだけは真実だよ」

「……」

木佐は口をへの字に曲げてしばらく迷っていたが、沙龍が軽く背中を押すと、慣性の法則のようにそのまま八雲のほうに歩いていった。

(やれやれ)

その後ろ姿にため息をついてから、沙龍はバスに乗り込む。

先に乗り込んで既にシートで寛いでいた偃月が中国語で言った。

「珍しいな。哥々が『弱者』の肩を持つなんて」

「そうだね……」

確かに、以前なら敗者に情けをかけることなどなかった。沙龍の居た世界は敗者イコール死者であったのだから、情けのかけようもなかったのだが。そういう、白か黒の世界だ。

しかし、日本は違う。この国の環境では、自分も変わらざるをえない。その変

化は沙龍にとってとはとても自然なものだった。

窓から、二人の様子が見える。

木佐は難しい顔をしたまま口を引き結んでおり、八雲はやや下を向いて口を動かしていた。視線を合わせようとしなのは、後ろめたさなのか、それとも、従者はかくあるべきと思っているからなのか――。

恐らく、両方だろう。木佐にはそれが分かっていた。

「申し訳ありません、小次郎様。あなたのためによかれと思って甲斐様に接触しておきながら、私は最後にそれを裏切るような真似をしてしまいました。お詫びすら聞いて頂けないだろうと諦めていましたが……」

「それは……、もういい。おじい様に逆らえなかつただけだろう」

「いいえ、違います」

八雲はそこをきっぱりと否定した。

彼にしては珍しい。

「……？」

「私は、あなたが黒田家の呪縛を断ち切っていくことを、本当には望んでいな

かったのです。……しかし、どうすることもできませんでした。私にはあなたをお守りする力も、その強張った表情を変える力もありませんでしたから」

思春期の木佐小次郎が年の離れた八雲に望んでいたのは、同じ方向を見て同調することではなく、正面から対峙しても別の道を示してくれることだったのだろう。

しかし、それは八雲の性格と身分からできなかつた。

「小次郎様。私は黒田家に仕える者です。それはずっと変わりません。これから木佐を名乗っていく貴方のおそばに居ることはできないのです。……ご多幸を祈っております」

そう言って深く頭を下げた。このまま、木佐が去るまで姿勢は変えないつもりでいる。

声をかけるべきだったかもしれない。

しかし、木佐は胸が詰まってなにも言えなかつた。

「……」

バスの方を見ると、沙龍が目を丸くしてこちらを見ている。視線が合うと、両

頬を引つ張ってへん顔をしてみせる。

思わず顔が緩んだ。

「おじい様のことを……、頼む」

独り言のようにそれだけ言って、バスに乗り込んだ。

その間も、八雲はずっと頭を下げていた。

「あづい……もう死ぬ……あづい……」

東京に戻って数日して、偃月が「北海道に行ってくる」と言って旅立ってから、急に元の二人だけの生活に戻った。

学校がないので沙龍は一日じゅう木佐邸の畳の上に転がっている。

近所の魚屋さんで貰ってきた生臭い匂いのする氷を扇風機の前に置いて、少しでも涼しい風がくるように工夫しているようだが、これでは沙龍自身が打ち上げられたマグロのようである。

「私もユエと一緒にホツカイドー行くんだった……、そしたら俊先生にも会えた

し、カニとかウニとか食べ放題だったのになー……」

「フェリーに乗るのが嫌だから行かないって言ったのは馨じゃないか」

木佐はぶつぶつ文句を言うマグロの隣でえんどう豆のサヤを向いている。

偃月はヒツチハイクで本州を北上し、青森からは船で北海道まで渡るつもりだと言っていた。沙龍はそれが気に入らず、東京に残ることにしたのだ。

なぜ青函トンネルを使わないのかと聞けば「船に乗ってみたいから」という単純な答えが返ってきた。青函連絡船は廃止されて十年経つが、その同じ航路を走る青函フェリーはいまだに地味な人気があるのだ。

「なんで船が嫌いなんだ？」

木佐が聞くと、しばらく間があった。暑さでどこもかしこも麻痺しているらしい。

「……………」。日本はどうか知らないけど、中国の船はすぐ転覆するんで、船というものをあまり信用してないだけ」

「ふーん…………？」

えんどう豆がパラパラとボールに落ちる音が、いいリズムを生み出している。



猫三匹が沙龍と同じようにあられもない姿で畳に寝そべっていた。

どうもこの三匹は京都からついて来たらしい。どうやって夜行バスに潜んでいったのかは知らないのだが、気がつくくと木佐邸に居た。

ネズミを捕ってくれるなら歓迎、と木佐はわりと前向きに考えている。実際、この三匹が居候するようになってからは、屋根裏をゴソゴソ這い回る音がしなくなった。

「まあ、可愛い弟には旅をさせろ、ってことよね」

諦めてそう言うと、

「確かに、偃月君は可愛い」

木佐が真剣に言うので、少し不安になった。

「……おい」

じろり、と見ても視線を合わそうとしない。

(まさか、釘を刺しておかなくちゃいけないのは“こつち”だったのか……?)

遊び人の松木には何度も「ユエには手を出すなよ」と言っておいたのだが、常識人の木佐は大丈夫だろう、と最初から除外していた。

（そうだった。キサさんはあっち方面に関しちや、たいして常識人でもないんだった……）

既に何度か修羅場に遭遇させられた沙龍の感想である。

「口説くなよ。ユエはノンケなんだから」

「分かってるよ」

と言っているが、どこか上の空である。

えんどう豆がコロコロン、と音を立てた。

まだ十時前という時間である。今日はなにをしようか、と考える気力も沙龍にはなかった。

じわじわと汗をかきながら、どこか極寒の地に思いを馳せるだけだ。

「あづい……北海道と言わず、北極に行きたい……今すぐ行きたい」

木佐は呆れるのを通り越して、いつそ哀れになったのか、

「区営プールにでも行ってくれば？」

と、提案してみたのだが。

「……」

一瞬、空気が妙な感じになった。

沙龍の反応がなにかおかしい。

「……無駄なお金使うと怒るくせに」

モゴモゴとうつ伏せでそんなことを言っている。

「区営だとそんなに高くないと思うよ。せいぜい二百円とかだろう」

「……いい。行かない」

「別に怒らないって」

「……いい。動きたくないし」

「……」

そういえば、と木佐は思い出した。七月に偃月や松木と一緒に鎌倉に行った時も、沙龍は「水着を持っていない」と言って海には入らなかつたのだ。

その時もなにか引つかかつたのである。

「……馨、もしかして」

「……」

「泳げない、とか？」

「……」

マグロはピクリとも動かない。

凶星か、と木佐は性悪な笑みを浮かべた。ジークフリートの弱点を見つけたよ  
うな気分である。一緒に暮らし始めて、ほぼ無敵に思えた沙龍にも（家事以外  
で）できないことがあったのだ。

ちなみに木佐もスポーツはなんでもこなすが、泳ぎに関してはインターハイに  
出場できるレベルである。

「よし。プールに行こう、馨ちゃん？」

ニヤニヤしながら木佐が沙龍のノースリーブを引っ張る。

「気持ち悪いな……。絶対やだ」

「夏祭りも近いから、屋台、いっぱい出てるぞー？ 焼きそば、たこ焼き、ホッ  
トドッグ……」

「キサさんは私を食い物で釣れるヤツだと思ってるな？」  
くるり、と起き上がって三白眼でにらんだ。

額に畳の跡がくつきりついている。

「違うのか」

「……いや、違わないんだけど！ 食べたいけど！ 私、水着持ってないし！」  
勝ち誇ったように言う。

ここで「買ったらしい」と木佐が言おうもんなら「それこそ無駄使いだ」と言い返せるわけだ。

「この前、鎌倉に行った時も言おうと思っただが、学校の水着持ってるだろう。あれでいいじゃないか」

「えー、あんな色気もなにもないスクール水着イー……」

「色気？ ……色気？」

「ちよつと……。二回も言わなくていいじゃん。そういう反応は失礼ですよ！」

「しかしな、真面目な話、泳ぎは……」

言いかけたが、沙龍のほうが早かった。

「どうせキサさんのことだから『泳ぎは覚えておいて損はない』とか、もつともらしい理由をつけて、親切に教える振りして、私の足のつかないところで手を離すに決まってるんだ」

「よく分かってるじゃないか」

初めて見るような凶悪な笑みで、木佐が言う。

「ホラなー！ だからやなんだよ！ もう、絶対、行くもんか！」

ひしつとそばにあった柱に抱きついて、木材と同化した。

こうなってはさすがに連れ出すのも無理か、と思ったので、木佐は戦法を変え  
ることにした。

一学期の終業式の日以来触っていない鞆の中から、学校関係のプリントを  
ごそと探しだし、しばらく何かをチェックしていたかと思うと、

「馨、学校に涼みに行こう」

などと言い出した。

「夏休み中だよ？」

「休み中も、部活をやってる連中が居るから、門は開いてるんだ。図書館その他  
の施設は閉まってる場合もあるけど、今日は全部開いてる。無料でクレーラー  
きいてる場所で過ごしたほうがいいだろ？」

「んー、まあ……、それなら……」

承諾しかけたのだが、

「プールも水泳部が使ってないレーンは一般生徒に開放されているみたいだから、念のために水着も持っていこうな」

結局、木佐はそこに持っていきたいだけではないか。

「一人で泳げば。私は水着は持っていけない」

「……まあ、とりあえず、弁当を作ろう」

気にせずに台所に立った。

木佐は、沙龍が学校関係のものを仕舞いこんでいる場所を知っているので、知らぬ顔してそこから持って行ってしまえばいい、と思っているのだ。

そして、手際よく一時間もかからずに木佐が作ったのは、豆ごはんおにぎりと昨日のおかずに加えた弁当だった。

「あれ？　なんで三人分？」

キッチンテーブルに乗っている弁当箱を見て沙龍が言った。

「多分、須藤が部活に来てるはずだから、差し入れ分だ」

例の賭けで儲けさせてもらったので、そのお礼のつもりである。

が、沙龍はそんなことは知らないのです、仲がいいのか、と単純に思ったよう  
だ。

「キャプテンの？ でも、お弁当持ってきてるかもよ？」

「それはないだろう。あそこは両親が共働きで、あいつはいつも昼は購買やコン  
ビニで買ってる」

「よく知ってるね」

「一年の時、同じクラスだったからな」

そして、制服に着替えた後、木佐が勉強道具も一式持っていくのを見て、沙龍  
は今から定期試験の勉強をする気か、と聞いた。否、受験勉強だという。

「キサさん、大学行くの？」

「まだ決めてはいないんだけど、一応、受験はする」

「そっか……」

東大への進学率でも必ずランキングするような高校なので、木佐が受験するつ  
もりでいることはなんら不思議ではない。

沙龍はあの高校で初めて「大学受験しない生徒」になるかもしれないが、ほと



んどの生徒が進学するつもりであそこに通っているのは間違いないのだ。

「キサさんは、早く仕事をしたいのかと思ったよ」

「それはある。だから、迷ってるんだ」

そんな話をしながら玄関を出たところで、黒塗りベンツが目の前に停まった。

まるで謀ったかのような登場だ。そこから現れたのは、この暑い中、スーツを着込んだ黒田達彦だった。

## 19 結婚狂想曲

先に降りて後部座席のドアを開けた運転手は八雲ではなかった。年齢はそう変わらないが、いかつい男だ。

「や、小次郎くん、元気そうだね」

達彦が芝居がかった手つきで挨拶する。アメリカかぶれと言われてもしようがない仕草だ。

「なんのご用ですか？」

無表情を貼り付けて応対した。

「登校日なので、今から学校なんです」

半分嘘をつく。自主的な、とつけければ嘘にはならないわけだ。

達彦はにこやかな笑顔を沙龍にも向け、

「相変わらず仲がいいね。学校に行くのなら、このまま送るよ。どうぞ、二人とも乗って——」

と、車内を示した。

思わず身構えてしまう。隣を見ると、沙龍は意外にも「乗ったら？」という顔を  
している。

それを不審に思っ  
て視線で問うと、「嫌なことは早く終わらせた方がいいんで  
しよ？」と言っているのがよく分かる。

「……じゃあ、お言葉に甘えて。車だとすぐですけど、お話があるならいま聞  
きます」

先に達彦に乗ってもらい、自分は左側に座らせてもらった。

沙龍はさっさと助手席に回っている。心得たものである。

歩いても十分ほどで着く距離なので、車ならほんの数分だろう。ただ、甲州街  
道を横切らなければならぬので、そこで少し時間を取られるかもしれない。

車内は当然ながら、クーラーが効いていて涼しかった。達彦がスーツを着てい  
られるのもこのベンツのおかげだろう。彼自身は、黒田家に婿入りをした人物な  
ので、武道の心得はない。事実、そういう身体つきはしていなかった。

「今日が忙しいなら、また別の機会を作ってくれてもいいんだけどね」

達彦が切り出した。

「いえ、ご用件はいま聞きます」

木佐はにべもない。

「うーん。相変わらず素っ気ないねえ……。まあ、話自体は確かにすぐ済むんだけど。君たちさ、結婚する気はあるの？」

その一言で車内はシンとなった。

木佐よりも先に反応しそうになった沙龍はこらえている。笑ってはいけない。ここで盛大に大笑いをしてはいけないのだ。

気をそらすために左隣の運転手の顔をチラッと見た。大きな鷲鼻が目につく。

「どういう観点でそうおっしゃっているのか、分かるといえれば分かりますが……。彼女は同居人であって、僕たちはそういう関係ではないんですが」

木佐の返答はとても理性的である。

抑えた感情でサラリと言う。

「んー、まあ、そういうことにしておいてあげてもいいんだけど、大人としてひとつ忠告するなら、世間は決してそう見ないし、本家の人たちもそれは同じだっ

てことかな」

「……」

本家の人たちといつても、いまはもう祖父くらいしか思い浮かばない。

「僕はね、小次郎くんが十八になったらすぐ結婚したらいいと思うんだ。日本では女の子は十六、男の子は十八で結婚できるわけじゃない？　それで、結婚すれば民法の成年擬制も適用されるから——」

「単独で法律行為ができる、とおっしゃりたいわけですね」

「うん、そうそう。さすが学校一の秀才は法律のこともよく知ってるね」

沙龍は「せーねんぎせいってなんすかね？」と隣に小さい声で聞いていた。

まさか女子高生に気軽に話しかけられるとは思わなかったのか、運転手は戸惑いつつ、

「結婚すれば成人と同じ扱いになる、という話だと思います」

と同じく小さな声で真面目に答えていた。

次の角を曲がればもう学校につく。沙龍は降りる用意をしていたが、後部座席の二人はまだ話を続ける気のようにだ。

「さっきの君の家もさ、買う時に僕の同意書とかが必要だったわけじゃない？でも、結婚すればそういうわずらわしいことがなくなるわけだから、小次郎くんにとつてはいいことだと思うんだよね。あ、僕が後見人であるのが面倒だから、という意味じゃなくてね？ まあ、他にも色々理由はあるんだけど、もし、将来結婚するつもりなら、早いに越したことはないんじゃないかって思つて。なんだったら、小次郎くんの十月の誕生日に籍を入れちゃったらいいよ。お義父さんもね、本音では歓迎だと思うんだ」

「どういう意味です？」

「いや、だって、余命短いんだから、やっぱり生きてるうちに孫の結婚式とか見てみたいものじゃない？」

かなりズレたことを言っている。

が、この曲者叔父のことだから、これはわざとかもしれない。

「まあ、考えてみてよ。僕は後見人として、協力は惜しまないからさ」

「叔父さん、さっきも言ったように、彼女と僕はそういう関係じゃないので、その話はどこまでも平行線です。諦めてください」

「……そう？　でもほら、おじい様を安心させるために形だけっていう手もあるわけじゃない？　小次郎くんだったって、二年間とはいえ、僕の監督から解放されるわけだし」

達彦は、木佐と沙龍がどういふ関係だろうが、どうでもいいようだ。とにかく結婚させたいだけなのである。

その腹は、といえは、東京に腰を落ち着けさせたい、というだけの話だろう。

「とにかく、僕にその気はないですから。失礼します。送っていただいてありがとうございます」

一方的に言つて、車を降りる。

沙龍が校門に背を預けて待っていた。

体育館には活気の溢れる声が響いていた。

進学校なので運動部の業績はそれほどいいわけではないのだが、やはり、サッカー、野球、バスケットなどの花形スポーツははそれなりに力が入っている。

コートでマナージャーらしき女生徒と話していた須藤が、ドア付近で見学していた木佐と沙龍を見つけてこちらにやって来た。

「よお、どした。お前ら、仲いいな」

「ちよつと図書館に勉強しに来ただけさ」

と言つて、木佐は説明もせず包みを差し出す。

「……お？　なんだ？」

「キサさん特製お弁当だよーん」

仏頂面の木佐の代わりに沙龍が答えてあげた。

「ああ、本当に差し入れに来てくれたのか！　すまないな。ありがたくいただくよ」

「差し入れはついでだ」

あくまでも木佐はそう言い張る。

可愛い奴め、と沙龍は思った。

「今から練習試合やるから、ついでに俺の雄姿を見ていけよ」

「さつきから練習見てたんだよ。すごいね。ダンクシュートかっこいい」



沙龍はそう言ってあげたのだが、

「あれをなー、試合でも決められなきや意味ないんだけどな」

須藤は謙虚にそんなことを言っている。

勧められるままに、しばらく見学していった。

沙龍たちの他にもチラホラ見学者たちが見受けられる。他の部活の生徒が休憩中に冷やかしに来ていたり、部員の彼女が見守っていたりするのだ。

練習試合ということなので、みな、それほど勝敗にはこだわっていないようだったが、そこは運動部である。開始早々じわじわと白熱してきた。

須藤はさすがにキャプテンだけあって、目立つ動きをしている。何度か三点シュートを決めていた。

「まさか、叔父があくるとは思わなかったよ」

木佐が試合を目で追いながら、やっとその件についての感想を漏らした。

なんと言っているいいものやら思いつかなかったので、だいぶ心にもないことを言っている。

「一番最初にあの叔父さんと会った時にさ、キサさんがトラブル云々って言って

たのは、こういうことを予見してたってこと？」

「ここまで具体的なことは想像してなかったけど……」

そう答えたが、これも半分は嘘である。

達彦が木佐と沙龍の仲を勘違いして「結婚」の二文字を持ち出すことは容易に想像できた。むしろ、その可能性があったからこそ、当初、沙龍を遠ざけようとしたのだ。

倫太郎も早婚だったし、旧家ではよくある話だった。いまだに、生まれた時から既に許婚いいなずけが居たりする世界である。

「いずれあの叔父のことだから、なにがなんでも僕を東京に縛りつけようとするだろうな、とは思ってた」

「結婚が、東京に縛り付けることになるの？」

「なるだろう。結婚すれば、就職せざるを得ない。叔父は、僕が京都を嫌っているのを知っているから、東京で就職するだろう、と読んでるのさ」

「ふーん……」

ホイッスルが鳴った。

前半十分が終わったようだ。

義理は果たした、とばかりに木佐は引き上げ、沙龍は須藤に手を振ってから木佐の後を追った。

お昼の時間になっていたので、華道部の部室で同じお弁当を食べ、その後、木佐はプールの話など忘れたかのように図書館で勉強を始めていた。

沙龍はまったく勉強する気はないので、隣の椅子でシエスタである。

よくもまあ、三分で眠れるもんだ、と感心する。

(……)

ラクガキしたくなる顔だ。

なぜこんなお気楽な人間が出来上がったのだろう、と木佐はつくづく思う。

勉強の手をふと止め、窓の外を見る。

校庭では野球部員たちがせつせと汗をかいていた。

暑苦しい限りだが、彼らにとっては今日のこの日も青春の一ページであることは間違いない。

ここの生徒たちは、やがて大学に行って、どこかの会社に入り、結婚して、一

生を終える者がほとんどだろう。

その人生の中で、この高校で過ごした日々はどういう位置づけになるのだろうか。

また、自分はどう位置づけたいのだろうか。

そんなことをボンヤリと考える。

(結婚か……)

木佐には無縁の言葉である。

一生するつもりはないし、結婚という制度に対して思うところもない。

しかし、伴侶となると、話は別だ。

そういう存在は居たほうがいいのか、それとも、失うことを考えれば最初から居ないほうがいいのか――。

そういえば、本音かどうかは分からないが倫太郎が気になることを言っていた。「失うのが嫌だから、もう『家族』はいらない」と。

あの自分勝手な言い訳を聞いた時、頭に血がのぼったのは、自分も同じだったからだ。

つまり、木佐も、母と祖母を失って、もうこんな思いをしたくないと思ったからこそ、心を閉ざして生きてきたのだ。

それが、父親の口から聞かされると無性に腹が立った。同族嫌悪というものかもしれない。

(そうか……。あれは負け犬の理論なんだな)

それに気付かずに実践していた自分と、それに気付きながら開き直る父の身勝手さが、時間を置いた今となってはどうしようもなく情けなく感じる。

(なにをやってるんだろうな、親子二代で……)

それ以上、余計なことは考えたくなかったので、数学の問題集に戻った。

沙龍はまだ起きない。

書きかけの手紙の上に突っ伏して寝ていた。

俊先生へ

お元気ですか？

京都旅行から戻ってきて一週間が経ちました。

わりとあちこち見たような気がしますが、一番楽しかったのは太秦映画村でした！

歴史を解さない奴、と一緒にいった（頭もよくてイケメンの）友達にはさんざん言われましたが、かつこつけてもしかたがないので、素直に白状します。

あとは平安神宮というところが、強く印象に残っています。ちよつと北京の紫禁城に似ていました。

京都には、友達の病気のお祖父ちゃんが居て、本当はその友達と一緒にお見舞いに行くことが目的だったんだけど、それは叶いませんでした。

近くまで連れて行けただけでも進歩なのかなと思ってます。

私の祖父は、事故で私を庇って死んでしまいました。それが今だに（未だに）。これは日本人でも間違える人が多いので注意）忘れられません。

冗談好きな楽しい爺々だったので、あんな風に死ななければならなかった理由はなんだったんだらうと、考えても無駄なことを子供の頭で考えたりもしま

した。

だから、友達のお祖父ちゃんのこともついついお節介を焼いてしまうのかもしれないませんが、血のつながりのあるなしを考慮すべきだったかもしれない、と今回少し反省しています。

どうということかという、実は、私とその死んだ祖父は血がつながっていません。

だから、割と淡々とした関係を気付けた（築けた）のかもしれない、と思うのです。

私は血縁者というのは弟しか居ないので、血のつながった親子や祖父孫関係というものが本当には分かっていないのかもしれないかもしれません。

血のつながりがあると憎しみも深くなったりするんだろう、ということは分かりますが、それを自分のものとして理解することはできませんから、どうしても人事になってしまいます。

それが友達には嫌だったんじゃないか、と思います。（そうでもないみたいで

す）

その友達のお祖父ちゃんはとても厳格な人で、友達はあまりいい感情を持っていないようですが、私には普通の武器用（不器用）な爺々に見えました。

東京はまだまだ暑いです。

次のお手紙は学校が始まってから書きますね。

再見！

甲斐馨

夕方近くになって沙龍はいきなりガバツと目を覚ました。

「ほう！ 寝すぎた……。……。？」

枕にしていたチラシの裏には、手紙の下書きを書いておいたのだが、あちこち赤ペンで添削されている。

「……」

添削したであろう、肝心の木佐の姿はなかった。



勉強道具は残っているので、休憩しにいったのかもしれない。

「そろそろ閉館ですよー」

図書館スタッフが、館内に残っている生徒たちに声をかけて回っていた。

どうやら四時間近く寝ていたらしい。

慌てて自分の荷物と木佐の荷物をまとめると、外に出た。

木佐は渡り廊下の途中にある、広場のベンチで文庫本を読んでいた。

沙龍に気付くと、顔をあげる。

「起きたのか」

「図書館、閉館だってー」

「ああ、ありがとう」

開いたままの鞆と、そこに詰め込んだものを渡すと、木佐は礼を言いながらも引きつった顔をし、自分で入れなおしていた。

筆記用具などが鞆の中でひっくり返っているのだ。どうしてキッチンとチャックを閉めてから入れてくれないのだろう、と思う。

「さつき、須藤がこれくれたぞ」

ベンチに置いてあった紙パックのジュースを渡す。まだ冷たかった。自分の飲みかけの分は、反対側においてある。

「え？ 私にも？ お弁当作ったのはキサさんなのにね。キャプテン、優しいな」

五時のチャイムが鳴った。

夏休み中は校門が閉まるのも早い。

「じゃ、夕飯の買い物して帰るか」

「うん」

これもまた、日常的な青春の一ページなるのだろう、と木佐は思うのだった。

北海道から戻ってきた偃月が、そろそろ香港に帰るというので、最後の日は盛大なパーティーを開くことにした。

その頃になると松木も東京に戻っていたので、木佐邸に来てもらった。

未成年が三人も居るのでアルコールは控えようね、と松木は言ったのだが、特殊な環境下で育った沙龍と偃月にはそのあたりの抵抗がない。なにせあの村には

「一人で馬に乗れるようになれば一人前」という基準しかなかったのだ。

「まあ、確かに日本も昔は十二、三歳くらいで元服したんだけどねえ」  
しぶしぶという形で、酒宴になってしまった。

木佐は小さい頃から行事ごとに飲まされていたので、日本酒の味は分かるのだが、沙龍が普段水のように飲んでるビールの良さはまだよく分からない。

偃月は中国酒なら大体いける口だ。

「まったく、末恐ろしい子たちだね」

松木は、今日は酩酊しないようにしようと思った。保護者然としていなくてはならない。

ちやぶ台に溢れんばかりの食事はほとんど木佐が作ったようだ。

産地直送のトラックで戻ってきた偃月が、そのトラックの運転手からお土産に貰ったという野菜がふんだんに使われている。

ポテトサラダを頬張りながら、沙龍は、

「今度は水産関係のトラックで戻ってきてね」  
などと言っていた。

「俺はだいぶ日本を堪能したから、今度はコジローさんたちが香港に来るといいよ。案内するから！」

日焼けした顔が爽やかだ。

だいぶあちこち歩き回ったようである。

「ああ、それはいいな。高校を卒業したらいくつか行きたい国があるんだ」

「ほ、ほー？」

沙龍が奇妙な顔をしてみせたのは、木佐のバックパッカーぶりが想像できない

からだろう。

「馨は行かないのか？」

「香港は行ったことあるし、私はあんまり海外旅行に興味ないんだよな。キサさん、一人で行っておいでよ」

「じゃあ、馨君は僕と一緒に国内旅行しようね」

「マツキーと行ったら、予算が十倍くらいかかりそうなんだけど……」

「僕だって、学生の頃は貧乏旅行もしたよー？」

そうやって、松木が大学の頃の話をいくつか披露する。

やはり木佐は気になるようで、学生生活のあれこれを聞いていた。

仕事をしながら大学に通うのは無理ですか、と聞けば、いや、木佐君なら充分できると思うよ？　と言われる。

そのうちアルコールがなくなつたので、松木と沙龍が買出しに行くことになつた。

コンクリートの夜道にはまだ昼間の熱気が溜まっていた。

「そういえばさ」

沙龍が夜空の下で聞いてきた。

「京都であの日、なにがあつたの？」

「……あの日？」

と、一度はとぼけてみるが、無駄だった。日本独特の「それは聞かないでください」というパフォーマンスが沙龍に通じるはずはないのだ。

「私とキサさんが千年前のキョートに飛ばされて、戻ってきた日。マツキーが倒れてたつて、二姐アルチエが言つてたから」

「うん、まあ、ちよつと転んじやつて、つていう言い訳はさすがに通じないだろうけど。大丈夫だよ。目立つ外傷はなかつたし」

「外傷で済んだほうがよかつたんでないの……？ 傷なんて治るんだしさ」

「君はときどきどこかのご老体みたいなことを言うね。びっくりするよ」

そうなのだ。沙龍の言は大人を通り越して、老人の人生観を思わせるときがある。

それは本人も自覚している通り、血のつながらない祖父のせいなのだろう。あの村で一番沙龍のことを気にかけ、また、沙龍が一番影響を受けた人物である。

「あの日は、ちよつと知りたくない事実を知ってしまったんだよ」

「どういったこと？」

沙龍は無邪気に聞いているのではない。

松木のことは既に同志だと思っっているからこそ、対等の立場で訊ねているのである。

その信頼が分かったので、松木も話すことにしたのだろう。

コンビニまでの道のりをゆっくり歩いた。

「以前、兄三人は亡くなってるって話をしたよね。あれは同じ事故で亡くなったんだけど、その当時、僕はまだ高校生でね。ちようど、君と木佐君くらいの歳だったかな。」

若すぎたってことで、その事故の詳細は教えてもらえなかったんだよね。

でも、一応、ああいう特殊なお家柄でしょ？ 普通の自動車事故じゃないんだろうな、とは思ってたわけ。

それで、大学生になった時に、いろいろ調べてみたのね。そうしたら、案の定、表に出せないような話でさ……。

まあ、簡単に言うと、一族の中に一人、厄介な狂人が居てね。その人のせいで兄さんたちが亡くなったことが分かったんだ」

その件は未だに解決していない。その狂人は生きていると思われるからだ。だからといってどうすることもできず、敵が現れるのを待つしかない状態ではあるのだが。ただ、四郎は確実に宿敵を追い詰める方法を考えているようだった。

松木は当然蚊帳の外である。

「僕は分家に行った身だから、関係ないといわれればそうなんだけど、少しは力になりたかったんだよね」

「うん、分かるよ」

「だけど、首を突っ込んでみて、少し後悔してる。実はね、馨君が京都で巻き込まれたのは、その狂人、安倍晴信のやらかしたことの後始末でもあったんだけど……」

「……?」

松木は、安倍晴信という人物のことを軽く説明したが、沙龍がどこまで理解したかは分からない。



「あー、なんかつまり、ハタ迷惑なオツサンがご法度なことしちやったので、黄龍ぶつ放す必要があつたわけね」

と、強引にまとめたとところを見ると、あまり分かっていないようだ。

「あの時、現代の羅城門跡でそのハルノブが現れたんだ。僕は会うのは二回目なんだけど、用件は一回目の時と同じ。つまり『十二天将をよこせ』ってこと。勿論、断つただけど、そしたら、たぶん腹いせだろうけど、彼いわくの『いいこと』を教えてくれた」

「いいこと？」

「冥府の王である泰山府君たいざんぷくくんが人の天命を決めているのは事実で、それは僕の親しい人も例外ではない。ハルノブは冥府のお役所でその『天命ノート』を見てきた——、っていう話さ」

「……泰山府君、ねえ」

日本人が誰でも聖徳太子を知っているように、中国人は誰でもその名を知っている。

地獄の王にして、東嶽大帝ともいわれる、神のことだ。

沙龍は眉唾な顔をしているが、松木はハルノブの言ったこと、正確には「ほめかしたこと」は真実だろう、と確信していた。

「それが、マツキーの『知りたくなかったこと』なの？」

「うん、そうだよ」

松木は、誰の寿命があと何年、というような具体的な話はなにもしなかった。それはハルノブとて明言はしなかったのだ。

ハルノブはこう言っただけである。

『あの一族は非常に短命でね。大抵が二十代のうちに亡くなる。子供さえ作らなければ、その反対に、数百年でも生きることができらしいが、なんとも因果なものだよ』

勿論、その内容は沙龍には告げていない。

ただ、時空の狭間でこの国の歴史を見てきたハルノブが言っているのだから、それは本当のことなのだろう。沙龍の言っていた甲斐家の話や、木佐から聞いた斎藤新助の話とも部分的に符合する。

それが松木にとっては衝撃であり、なんとも昏い予言となってしまったのだ。

しかし、沙龍はとりあわない。

「ハタ迷惑な狂人のいうことだからな」

なぜ、松木がそんなことくらいでショックを受けたのか分からない、と言いたげだ。

それでいい、と松木は思う。

十七歳という若さで、人生これからというときに、あと数年の寿命ですと告げられるのは、あまりにも残酷だ。

(なにか、天命を覆す、それこそご法度な方法があるなら、徹底的に調べてやる  
さ)

一方、木佐邸に残った二人は、沙龍が居たらできない話をしていた。

「哥々の背中に、大きな刀傷があるの、知ってるか？」

偃月はずっとその話をしたかったようだ。

「……見たことはある」

木佐はわざと素っ気なく答えた。

「そっか……。あれは、ひどいよな。すごく、痛々しい。哥々は全然気にしてな

いけど、それでも……」

ギョツと唇や拳に力が入る。

「あの傷は、俺をかばったときのものなんだ。俺が弱かったばかりに、哥々が死に掛けて……。もう、あんな後悔はしたくないんだ」

偃月は普段、木佐と似たような生活をしているようだが、勉強以外の時間はほとんど修業に当てているようだ。

自責の念が強いのだろう。それがいまの偃月を作っているように見えた。

「だから、まずは足手まといにならないように、俺は強くならなくちゃいけない。コジローさん、しばらくは哥々のこと、頼みます」

そう言われても、即答はできなかった。

「……任せておけ、と、自信をもって言えればいいんだろうけど。僕も、もしかしたら足手まといになるかもしれない。実際、京都では真っ先に気を失った」

あの、神獣出現時の、熱湯と氷を混ぜ合わせたような奔流が思い出される。

そして、不規則に、無情に、突きつけられる夢幻の時間。

今後は、あれを制御していかなくてはならないのだ。自信がある、とはとても

言えない。

「でも、僕は自分の役割というものが分かって、なんていうのかな、とても喜んでいる。いや、違うな。それが自然だと感じてる、といえばいいか」

英語は便利だ、と思う。

日本語では言えないこともすんなり言えてしまう。

「そか！ なら無問題だなー」

偃月の眩しい笑顔が全てを肯定していた。

空港までは遠いから来なくていいと言われたので、翌日、新宿駅まで沙龍だけが一緒にについていった。木佐と松木は遠慮したのだ。

そうして、ひまわりのような偃月を見送った。

碧媛のときと同じように、あっさりした別れだった。

九月に入ってから、暑さがやわらぎ、沙龍もそれに比例して元気になっていった。野生動物のようだな、と木佐は一人で笑っている。

沙龍の読み通り、二学期になってからは江戸川渡の雄叫びを聞かない。十月の文化祭の準備があるので、一生徒を追い掛け回すどころではなくなってきたのだろう。あれでも演劇部の部長なので、いまが一年で一番忙しい時期のはずである。

華道部はなにかするの、と木佐に聞いたら、作品の展示だけ、という。

クラスの出しものは、三年生は準備期間を取らなくていいように、伝統的に模擬店を行うことになっているらしい。進学校らしい配慮である。

「焼きそばがいいよ！ 簡単に作れてよく売れる。たこ焼きはネタ作るのにわりと手間かかるからねー」

小川タマミが経験者っぽいことを言っている。

「うん、焼きそば、いいね」

沙龍は食べ物なら基本的になんでもいいのである。

休み時間の雑談なので、いまここで決める必要はないのだが、無党派層を取り込んで主流は作れる。

少数意見ではわたあめや、たい焼きという案も出ていた。

「文化祭に呼びたい人が居るんだけど、来てくれるかな……」  
沙龍は鉄太郎のことを言っている。

この前会った時、連絡先は聞いておいたのだが、誘ったら来てくれるだろうか。

「え？ だれだれ？ 男の人？」

タマちゃんが興味津々に聞いてきた。

「うん」

隣の須藤が「あれ？」という顔をする。

そして、遠慮がちに後ろを見ると、木佐は文庫本を読んでいた。

（この二人は、付き合ってるんじゃないのか？）

当然、須藤はそう思っていたのだが、木佐のいまの無反応ぶりを見るとだいぶ疑わしい。

「外部の人って結構来るの？ 在校生が声かけて来てもらうんだよね？」

「うん、結構来るよー。家族とか友達とかね。あと、イチオー、うちも進学校だからさ。受験生たちが見学に来たりするね。カレシとかカノジョを呼ぶ人は少な

いけど、居ることは居る」

「そっかー」

沙龍とタマちゃんはまだそんな話をしている。

須藤もいま感じた疑問を口にするようなことはなかった。

結局、その日の帰りのホームルームで模擬店の内容が決まり、多数決で焼きそばとラムネを売ることになった。

「馨はラムネ担当な」

木佐がボソツと言っていた。

沙龍に料理は鬼門なのである。

それよりも本人は、

「アルコールがないと鉄さんは来てくれなさそうだなー……」

そっちを気にしていた。

帰り仕度をして一緒に廊下に出たが、今日は木佐の部活があるので途中で別れることになる。

「鉄さんって、例の、上海に居た雀士だろう？ 一度、打つてるところを見てみ



たいな」

木佐は麻雀がそこそこ打てる。

どこで覚えたのかは知らないが、あれは将棋よりも頭脳を鍛えるゲームだと言ったたまに一人でパソコン相手に戦っている。四月に沙龍が部活の一覧を見ながら「麻雀はないのかな」と言った時に、真っ先に反応したのはそういう背景があるのだ。

「再起不能にさせられるよ？」

沙龍はニヤツと笑って言った。

「そういうレベルか……。怖いな」

「そもそも、私が一目惚れしたくらいだからね！ 鉄さんが牌を切る姿はめっちゃくちやかっこよかったよ。ただ、もう勝負事はやめたって話だからな」

「十歳くらいの子が、雀牌を打つ男の姿に一目惚れってのもどうかと思うんだが……」

文化部棟への渡り廊下が見えたので、木佐とはそこで別れた。

夕飯の買い物をしておくように、と言われたので、茶碗蒸しの具を色々と思

浮かべながら校門を出る。

そこで、タイミングよく携帯電話が鳴った。

「……もしもし？」

画面は出るのを躊躇する名前だったが、出ないわけにもいかない。

『水上です』

「あ、はい、お久しぶりです」

わざとビジネス口調にした。

直接、電話で話すのは久しぶりだ。

『もしかして、しばらく東京には居なかった？ 夏休みだから中国に帰ってたり

するのかなって思っ——』

「ああ、いえ、帰っていたわけじゃないんですけど……」

京都に行くことも、行ったことも、水上には伝えていない。特に伝える必要もなかったからだ。

『ごめんね、何度も電話して。ちよつと、甲斐さんに聞きたいことがあって。春日部長が、少しでも歳が近いスタッフのほうが電話もかけやすいだろう、って言

うもんだから——』

と、そこを強調する。

上から言われて仕方なくかけてます、と言いたいらしい。

小賢しい大人のスキルだ。

で？ ご用件はなんでしよう？ と、木佐の達彦に対する態度を真似て言ってみたいものだ。水上がもう少し厚かましい人間なら、言っていただろう。

『ちよつと、保科が行方不明になっちゃって』

水上がやっと本題に触れた。

声が固くなっている。

「……保科、悠ゆうさんが？」

下の名を思い出せなくて一瞬焦ったが、確か一字で、俊しゅんと似たような音だったな、ということから思い出し、事なきを得る。

『うん。一度、三人で会ったよね？ 新宿のアイランドタワーで』

「はい、覚えてます」

『その保科が、八月末から夏休みを取ってたんだけど、休みが明けても会社に出

てこなくて。無断欠勤はしない奴だから、なにか事故に巻き込まれたんじゃないかってことで、ほうぼうに連絡してるんだ。てつきり帰省しているんだと思っただけ、北海道の実家に電話したら本人は来てないし、連絡もないっていうんだよね』

なるほど、それで自分の名前が出てきたのか、と沙龍は思った。

保科俊は、沙龍のことをどう説明したのだろう。もし「仲のいい文通相手」でも言ったのなら水上がなにかを疑ってもおかしくはない。

「……そうですか」

『甲斐さんは、保科からなにも連絡ないよね？ 弟さんとは、お礼状の件で何度か手紙のやり取りをしたって聞いたんだけど』

「連絡はきてないです」

『ん、そうだよな……。ごめんね、突然』

保科悠が夏休みとして事前に申請していたのは八月三十一日から九月四日まで。

四日は金曜なので、出社するのは七日の月曜からになるのだが、その月曜に出

社してこなかったもので、当日、上司である春日が固定電話や携帯電話に連絡してみたが、応答はなかった。夜には部下にアパートまで行って見てくるように言ったが、留守だったという。

翌日になって、春日が函館の実家に電話してみると、母親と弟の保科俊から話を聞くことができた。それによると、帰省するという連絡はなく、それ以外の連絡も来ていないというのだ。そもそも、保科悠は、いままで夏休みに帰省したことは一度もなかったようだ。年に一度、年末年始に帰るだけだったという。

そこで、保科悠とは仲がいい水上に、大学時代の友人や、入社当時の同僚などにも連絡してみてくれ、と春日から指示があつたのだそうだ。

『行方が分からなくなって一週間になるからね。ご家族には搜索願いを出してもらったんだけど、警察は事件性がないと動かないし、もし、自分から姿をくらましたのなら、探す手立てもないんだよね』

「そうなんですか……。心配ですね」

お義理でそんなことを言ってみたが、あのラグビー部出身の、声の大きな保科悠が、自ら失踪するなどありえるだろうか？

人知れず悩みを抱えていて、人生行き詰って、ふと失踪したくなつた——、という可能性もなくはないが、それなら長期休業するなり、会社を辞めるなり、いくらでも方法はある。

(……なにか、事件に巻き込まれたのか)

そんな気がした。

チクチク、と、どこかでなにかの警告音ならぬ、警告感覚がしている。

痛くはないが、気に障る、というレベルである。まるで、あまり敏感ではない厚い皮膚の上を、たいして尖つてもいない針でつつかれるような……。

保科悠が行方不明になったことと、甲斐馨という存在はなにか関係があるんだろうか？

あるいは、「李沙龍」が？

まさか、『蒼血の沙龍』が？

(……)

しかし、偃月は保科俊はシロだと言っていた。

沙龍はその判断を信じているし、手紙を見る限りでもそれはあり得ない。

『こんな殺伐とした話でごめんね。今度、また、食事にでも誘うよ。甲斐さんのほうは、学校生活とか、マンションのほうとか、なにも問題はない？ 大丈夫？』

「はい、大丈夫です」

『……そう。じゃあ、またね』

水上はまだ話したそうだったが、さすがに同僚の安否の話ついでにデートに誘うわけにもいかないと思っただろう。

沙龍はしばらく携帯電話のせせこましい操作をして、必要な番号をパソコンに移動させ終わると、折りたたみ式のその機械をバキツと握りつぶした。

すれ違う人が居たらさぞかしびっくりしたことだろう。粉々になった残骸はコンビニのゴミ箱に捨てた。

もつと早くこうすべきだったかもしれないが、もしかしたら、沙龍自身、面倒だと思いつつ、猫をかぶるのもたまには楽しいと感じていたのかもしれない。

それから、スーパーで買い物をし、家に帰った。

「ただいまー」

「オカエリナサイ」

ブリキの見た目はレトロなロボットが、最新式のセンサーを働かせて出迎えてくれる。

西新宿のマンションから、木佐邸の玄関に移動しただけで、このロボットの役目はずっと変わらない。

主人の気配を察して三ネコが寄ってきた。

「ぶぶー、ぶ」

「ネコの鳴き方はニャーだって、言ってるじゃん」

「ぶ、ぶにゃー？」

「そうそう。ネコらしくね」

彼らにはエサを食べさせてやらねばならない。そういう『契約』だ。

猫缶を開けて、与えてやった。

この三匹はずっと名無しだったのだが、やがて、白ネコがマサムネ、三毛がキク、茶トラがクニツナ、と呼ばれるようになった。日本刀マニアの木佐がつけたのである。そのせいか、沙龍が主人だったはずなのだが、木佐にも服従するよう



になった。むしろ、ネコたちは木佐のほうが好きみたいで、よく擦り寄っている。沙龍に対しては甘えるようなことはしなかった。

あとは風呂掃除をしておけば、沙龍の仕事は終わりである。

六時前には木佐が帰ってきて、夕飯の準備を始める。エプロンをつけながら、冷蔵庫の食材を見て、なるほど、と思う。茶碗蒸しと、あとはもやし炒めでも作ろう。

つけっぱなしのテレビからは台風接近のニュースが聞こえていた。

21 居なくなった悠さん

甲斐馨 様

初秋の候、ますますご健勝の事とお喜び申し上げます。

八月に馨さんから頂いたお手紙の返事が遅れましたことをお詫びします。

もうお聞き及びかもしれませんが、兄が行方不明になったという報せを受け、こちらでもほうぼう探しまわっております。

母も私も心当たりがまったくなく、途方にくれておりますが、もしかしたら、ふらりと一人旅にでも出かけて、山で遭難などしたのかもしれない、また、それぐらいしか思いつかない、と兄の同僚の方も仰ってました。

神隠しというのは子供に使う言葉なのでしょうが、まさにそうとしか説明できないような状況だそうです。

行方不明になった前後、東京での目撃情報もないそうです。飛行機や新幹線の

チケットを買った形跡もなし。こういう状況では警察は動いてくれません。捜索願いは出したのですが、警察の方には「死体が見つかればご連絡はします」と言われてしまいました。

心配といえば心配なのですが、実は、母も私も狐につままれたような不思議な感覚のほうが強くて、明日にでもひよっこり帰ってきそうな気がしますし、どこか見知らぬ地で既に土になっているのかもしれない、と諦めています。

自ら失踪するような人間ではないので、こういった経緯でこうなったのかは気になっております。

馨さんにも問い合わせ連絡などで、色々ご迷惑をおかけしていると思います。が、なにかお気づきの点があれば、どんな些細なことでもかまいませんので、うちの病院か、または東京の水上市さんという方のところへご連絡いただければと思います。

落ち着いたらまたご連絡しますので、今回はこれにて失礼します。

保科俊

北海道の保科俊からその手紙が届いたのが九月末である。

西新宿のマンションに郵便を取りにいくのが面倒になったので、転送サービスを利用するようにしたのだが、その第一号として東新宿の木佐邸に届いたのがこの手紙だった。

保科悠は一ヶ月もの間、ずっと行方不明のままである。

会社の同僚や、大学時代の友人なども、みな、そろって心当たりがない、という。

「一人で旅行するようなタイプじゃないねー。休みの日っていったらパチンコかテレビって人でしょー？」

学生時代、ゼミで一緒だった友人の弁。

「夏休みどうするんだって聞いたたら、たまった洗濯しなきゃーって言ってたのは覚えてるよ。学生んときに付き合ってたカノジョとは去年別れたって話だし、それ以降は女っ気はなかったと思いますね」

同じ課の、机が隣の同僚の証言。

「惰性で付き合ってた感じはあったので、それが嫌になって去年、円満に別れました。お互い冷めてたので、あの人も未練はないと思います。いなくなった心当たりですか……？　そうですね……。借金を作るような人でもなかったし、要領よく立ち回られる人だったから、そういうわれても、思い当たるようなことがないんですよね」

去年別れた彼女の話。

……と、こんな具合で、保科悠に関しては、失踪した形跡も、失踪する理由もまるで見当たらないのだ。

今日届いた保科俊からの手紙と、上記関係者たちの証言をまとめた宇佐美からの報告書をちやぶ台の上に散らかしたまま、沙龍は畳の上に寝転がった。

報告書は、さっきバイク便で届いたものだ。深夜を過ぎているというのに、都内の仕事人たちはみなワーカホリックなのだろうか。ご苦労なことである。

開け放った障子の先は、暗い竹やぶになっており、そこから心地よい夜風が吹いてくる。

書類が数枚飛ばされそうになったので、新しい携帯電話を重石がわりにして、留めておいた。

静かな夜である。

三ネコはみな夜遊びに行っているようだ。

「まだ起きてたのか」

木佐が廊下から顔を出した。

「忘れてると思うけど、明日から冬服だからな。朝バタバタしないためにも、ちゃんと用意しておくように」

「あ、忘れてた」

「やっぱり……」

木佐が居間にやってきたので、沙龍も体を起こし、二人分のお茶を淹れた。

二学期になってから本格的に受験勉強を始めた木佐は、それまで十一時には寝ていた生活をやめ、夕飯の後は二時頃までみっちり勉強をしている。

ノンストップはさすがに疲れるので、いつもだいたい一回は休憩をいれるのだ。

「ふー、熱いお茶が美味しい季節ですねー」

「これって、伊藤園のお徳用のか？ 安いわりには、意外にも美味しい……」

「フフフ、淹れ方にコツがあるのだよ、明智君」

料理は壊滅的にできないくせに、沙龍はなぜかお茶を淹れるのは上手だった。どうやら、昔、手ほどきをした人物が居たようだ。

木佐は、散らかった書類の中に「保科」という文字を見つけ、そのまま眺めている。

「ちよつと気になってたんだが、八月に偃月君が北海道に行ったのは、もしかして、保科俊を“見”に行ったのか？」

「そう……。放っておいてもいいって言ったんだけど、間諜だと困るからって」

「カンチョウ？」

「うん、密告者っていったほうがいいのか。社会主義の国では結構あるんだよ。隣人がどうもアヤシイ。敵国のスパイカモシレマセン、って当局に密告するんだ。ごく普通の一般人がね」

「ああ、間諜、ね。なるほど……」

土壌が違う、といわざるをえない。

日本でも反共にやかましかった時代は、そういったタレコミも横行していたかもしれないが、今は時代が違う。

一般人はより軟弱に、セクトはより過激になった日本では、両者の距離が開きすぎてそういった問題が発生する余地がないのだ。

保科俊がたとえば沙龍の秘密に気付いて、甲斐家を追う当局——それがどういった組織なのか存在すら不明だが——に密告するかもしれない、というのはいくらなんでも偃月の考えすぎだろう、と木佐も思う。

しかし、そういった用心深さが染み付いているからこそ、彼らは二千年間の長きに渡り『龍穴』を守り続けてこれたともいえるのだ。

沙龍が『保持者』であることも、偃月にとっては同じく守らなければならない秘密なのである。

「それで、シロだったんだろう？」

「うん。わざと怪我して病院にかけこんだらしい。でも、俊先生のところって小児科なんだよね。おまけに、ユエは旅行者だから保険の問題がややこしいわけ。」



だから、総合病院の外科にでも行け、って窓口で追い返されるところをさ、先生が出てきて、その場で止血して絆創膏貼って『お大事に。はい、次の人ー』だって。最初っからたいした傷じゃないってのも分かってたみたい」

「いい先生だな」

「うん」

「それで、なぜ保科悠は行方不明に？ 保科俊がシロなら、彼だってシロだろう？」

「シロはシロだと思うよ。だから、『巻き込まれた』んじゃないかな」

「もう、死んでると思うか？」

「……多分」

木佐は「そうか」と言って、部屋に戻ろうとした。が、

「『多分』？ 半信半疑ってことか？」

眉間にしわをよせて言う。沙龍のあやふやな物言いを非難しているのだ。

「ああ、いや、半信半疑じゃない。九十九パーセント死んでると思う」

「……そうか。馨も気をつけろよ」

と言って、今度こそ部屋に戻った。これからまた数時間集中して勉強して、風呂に入ってから寝るのが木佐の毎日だ。

沙龍はもう一度畳の上に寝転んで、あれこれを考えていた。

恐らく、保科悠は殺されたのだろう。誰に？　なぜ？　その部分を宇佐美に探らせているが、大した事実は出てきていない。

嫌な予感だけがずっと正体不明のまま、まわりついていた。

翌日、渡すものがあるといって新宿中央公園まで宇佐美に呼び出され、学校帰りに行ってみると、調査にだいぶ進展があったと知らされた。

宇佐美は顔色が悪い。あまり健康的な生活はしていないようだ。

「その公安とやらが保科悠を消したっての？」

二週間経ってやっと出てきたのはその二文字だった。

正式名称、警視庁公安部。悪名高き特高（特別高等警察）を前身に持つ組織の名だ。

「まだ確証はないんだけど、その可能性が大きいかな」

よっころしよ、と噴水前のベンチに座る。

ここなら盗聴される心配もないだろうが、どう見ても二人の関係は援助交際的なものには見えない。

宇佐美が話を続ける。

「保科悠さんの勤めるMグループってのはね、日本でも有数の財閥で、『ロケツトから消しゴムまで売ってない商品はない』といわれているくらいのもメガ企業なわけ。ここの創業者一族は顔パスで総理官邸に入れるっていう都市伝説があるくらい、金と力を持ってる。彼らが内容の良し悪しは別として『目立ったこと』をすれば公安が出張ってくるのは分かるさ。でも、保科悠さんは所詮一社員であつて、創業者とは親族関係でもなんでもない、となれば……」

「と、なれば？」

「こつちも相当気合入れてかからないと、あのきちやない東京湾で泳ぐハメになるかな……って。馨ちゃん、僕と連絡取れなくなったら殺されたと思ってね。大事なものはこの貸金庫に入れておくから」

そう言って、封筒を渡した。中に小さな鍵が入っているようだ。

「言うほど、怖がってるようには見えないけど？」

「まあ、クライアントが大物だからね」

「持ち上げてくれても、なにも出せないんだけど……。それで、ウサミミの推理は？」

「なにか別口であの会社の暗部を探っていた作員が、偶然まずいことを知ってしまった保科悠さんを消したんじゃないか、って感じ？」

「別口って？ たとえば？」

「保科悠さんのM重工は表向きは宇宙開発とか楽しそうなことやってるけど、裏ではちやっかり武器弾薬を造ってるわけだからねー。表に出しちやいけない話はいっぱい抱えてると思うよ」

「ふーん……」

宇佐美は座ったときと同じく「よっこらしよ」と言っ立ち上がった。

高層ビル群がオレンジ色に染まってきて、道行く人も車も、どんどん増えてきた。これから帰りのラッシュが始まる。

「で、どうするの？ 犯人が分かるまで続ける？ 僕の勘では、保科悠さんの失踪は、馨ちゃんとは関係ないように思うんだけど……」

「……」

沙龍はベンチに座ったまま、細長いビルの一角を見ている。

ここはかつて淀橋浄水場のあった、水神の加護の領域である。

水に守られた場所。

本来なら、大陸の神の入り込む余地のない都市なのだ。

rrrr……

沙龍の携帯電話が鳴った。

宇佐美に手で合図をして、電話に出る。四郎だった。

『一種の警告だと思ってもらってもいい』

と、前置きをして、四郎は一方的にあることを告げた。

『公安の中に外事課というセクションがある。国際テロの対策をしているところだ。M重工は東アジアの各都市でも羽振りよくやってるから、内偵されていたんだらう。現地のマフィアとも仲良くやってる連中だからな。それで、東アジア方面の涉外担当だったが、ここ半年くらいの間で異動になったスタッフが居るはずだ。名前は分からないが、そのスタッフが狗である可能性が高い』

京都府警と懇意にしている四郎が、独自のルートで掴んだ情報だそうだ。

沙龍は、眉間に皺を寄せたまま、ほとんど相槌とお礼くらいしか喋っていない。

電話を切った後、

「ウサミミ、銃は持ってる？」

唐突に聞いた。

「あのねえ、僕、警察を辞めて十年以上経ってんのよ？ 平和の国、日本で銃な

んか持ってたなら、銃刀法違反で捕まっちゃう」

「……じゃ、柔道とかカラテの心得は」

「このメタボなお腹見てそういうこと言う？」

両手を広げて肩をすくめてみせる。

沙龍も笑った。

「なら、水神様に勝てるように祈ってて。まがい物でも、侮れないからね」

「まがいもの……？ 神頼みは最後の最後だよ。なにか、判明したことで

もっ？」

「保科悠を殺した犯人が分かった。——水上慎太郎だ」

「みなかみ……？ えーと、確か、ちよつと前まで保科悠さんと同じ課に居た人だっけ？ 今は新宿の別の部署に居る人？」

宇佐美は沙龍の周囲の利害関係者たちは大体把握している。

水上という男のことも、顔と名前は押さえてはいるが、度外視していた。たいして重要人物ではないと思っていたからだ。

しかし、その男こそが公安の狗と聞いて「ああ、なるほど」と思ったものだ。

警察という組織にも色んな種類の人間が居るが、水上ほど、幹部にとって都合のいい『駒』は居ないだろう。

「今の電話って、もしかして？」

「そう。京都に住んでる、ラスボスみたいな人」

それだけで通じる。

「土御門の若様は桜田門の誰とお友だちなのかねえ……。怖いな」

「友達じゃなくて、『弱みを握ってる関係』なんだろうけど」

どこの世界も人脈ほど怖いものはない。

下は殺しあっている、上は赤坂の料亭で極上の日本酒を酌み交わしていたりする。

上海とたいして変わらないな、と沙龍も思った。

その世界から抜け出すことは結局できないのか。

そこには、金と権力しかないというのに。

「……」

沙龍は、宇佐美の言った『お友達』という言葉が引っかかっていた。携帯電話を取り出し、さっきの着信に掛けなおす。

コールは二回でつながった。

相手が声を発する前に、まくしたてた。落ち着いて見えるが、内心はだいぶ穏やかではない。

「ねえ、シローさん、張大哥になにか言われたの？ でなければ、誰にも何も言われてないのに、親切に知り合いの警察幹部と連絡を取って、教えてくれそうにない極秘情報を苦勞して聞きだしたりなんかしないよねえ？」

さつきは聞くのを忘れたのだが、張と四郎の間でなんらかの取引があったとし



でもおかしくはない。

「そう心配しなくても、張とはそういう殺伐とした仲じゃない。懐かしい自分の名刺を見た、という国際電話をしたら、『外事に気をつけろ』と言われたただだ」

「……どういうこと？　遠く離れた上海に居る張が、どうしてそんなこと知って……」

最後まで言い終わらないうちに、沙龍はある可能性に気付いて、ハツとした。

見張られていた西新宿のマンション。

あれが、素人の達彦の仕業であるはずがない。

見張っていたのは、二人居たのだ。水上と、恐らくは、上海からの……。

「操<sup>ツァオ</sup>！」

中国語で毒づいた。

あまり品のいい言葉ではない。

該当する日本語は「くそつたれ」が一番近い。

「なにか問題があるのか？　張が私にその件をほのめかしたのは、君を心配して

いるからだと思うんだが、それが気に障るようでは、まだまだ子供だな」

ムカツ、としたが、かろうじて罵倒の言葉は呑み込んだ。

「ゴシドウ、ゴベンタツ、マコトニアリガトウゴザイマス。私は子供らしい子供時代を過ごせなかったんで、日本には子供っぽいことをしに来たんですよ！」

「なら、なおさら問題ないじゃないか」

四郎は笑っている。

「そうですね！」

なぜだろう。四郎の声を聞くと、落ち着いた。

人が死んで、知りたくない事実を知って、投げ出したいのにも、それでも、ケリをつけなければならぬ。上海のときにやっていたはずの決裁がいまはひどく負担に感じる。が、四郎もそんな毎日を送っているのだろう、と思えば、奇妙な連帯感が沸いた。

「ウサミミ、頼みがある」

沙龍はさつきから、背の高いビルの一角しか見ていない。その視線の意味が、やっと宇佐美にも分かった。あそこはM重工の新宿支社が使用している一角なの

である。

「命を差し出すこと以外なら、なんなりと」

西新宿のビル群に、飛行機用の赤い電灯が全て灯る時間になると、だいたい帰りのラッシュは終わる。

残業組はこれからまだひと仕事あるのだが、だいたいこの時間を境に、オフィス街の人口は一気に減る。

水上も今日の仕事を終え、高層ビルから出てきたところだった。

「だいぶ風が強くなってきましたね」

ビジネス英語で話す相手は、上等なスーツを着た中国人のブローカーで、一月ほど前から取引をしている。

年齢は四十近くに見えるが、案外若いのかもしれないし、もっと老けているかもしれない。

映画俳優のだれそれに似ていて渋くて素敵、と女子社員たちがひそひそと話題

にしていたが、中国人特有の、決して本音は見せない柔らかな物腰で、いささか不気味な感じはある。金払いはいいので、これからも会社としては取引を続けることになるのだろう。

「ああ、ハリケーンでしたっけ？ ひどくなりますか？ 皆さん、とても落ち着いていますが」

「日本ではこの季節の風物詩になってますから。よっぽどの大型台風じゃない限り、どこも通常運転ですよ」

とはいえ、ビル風も上乘せされ、周囲の風足が強くなっている。

足早に歩く二人の目の前に、そんな強風にはビクともしない体型の男が立ち止まっていた。

明らかに、水上を待っていたようである。

面識はない。が、知っている男だ。

「……。ミスタートختهイエン董天、すみません、今日はまだ別の仕事がありますので、  
はい」

水上はそう言って、どうぞ、と手で駅のほうを示した。

特に約束をしていたわけでもないの、そう言われては行かないわけにはいかない。

「そうですか。ではまた。ごきげんよう」

いかにも上流階級に属するチャイニーズが使いそうな英語だ。

董天は顔に張り付いたような愛想笑いを見せると、颯爽と革靴を鳴らして歩いていった。

「や、すみませんね。水上慎太郎さんですよ。あ、私、こういう者なんです  
が——」

宇佐美は懐から名刺入れを取り出そうとしたが、

「宇佐美稔——さん」

水上はその名刺を見る前にフルネームを呟いた。

「……あら。どこかでお会いしたことありましたっけ？」

「会ったことはないと思います。が、僕はあなたを知っていますよ。なにせ職場のパソコンのリストに詳細に載ってますから」

「それは、本当の職場って意味？」

水上は答える代わりに苦笑した。

公安に属する水上が、極道上がりの警官経験者という、ちよつと特殊な経歴を持つ宇佐美のことを知らないわけではない。

日本中の『要注意人物』たちはひそかにリストアップされて、桜田門の建物の中の、特殊な権限を持つ者たちはいつでも閲覧することができる。公安などはその『特殊な権限』の最たるものだ。

「今日の私はただのメッセンジャーでしてね。クライアントが水上サンに会いたがつてるんで、連絡してもらえませんかね？ お伝えすることは以上です」

「……」

水上はしばし言葉を失っていた。

宇佐美の、いや、沙龍の意図が分からない。

自分の正体を知ったであろう彼女が、改めてなんの用があるというのだろうか。

「しかし、彼女の携帯電話はつながらなくなってますよ。……まあ、賢明な判断だとは思いますが。いささか遅かったくらいですね」

「通話履歴を押さえられていたこと？ 馨ちゃんは最初から知ってたよ」

「……？　じゃあ、なぜ……」

「使いつけたのかつて？　あの携帯電話を渡された本当の狙いが分からなかったから、じゃない？　最初は、春日部長の指示だと思っていたみたいだし」

「……」

泳がされていたのはこちらだったのか、と水上は悟った。

しかし、そうでなくては困る。

「宇佐美さん、あなたも愚かな人ですね。今まで通り浮気調査やペットの捜索だけをしていればよかったものを……。なぜ、こんな危険な橋を渡ることにしたんです？」

「さあー、なんでかねえー」

宇佐美は笑っていた。

「あなたが今まで無事に生きてこれたのは、毒にも薬にもならないと“上”が判断したからですよ。なのに、あんな“大物”と関わってしまったのは、日本の警察も黙っていてはくれませんよ」

「確かに桜の代紋は強力だ。一時期借りていたから、よく分かる。だが、無敵

じゃないよ。そんなことは君たちが充分承知してると思うがね」

「……」

「まあ、そんなわけで、逃げるのも、連絡するのも自由だが、未練があるなら会っておいたほうがいい。これは、人生の先輩としての忠告だ」

沙龍はここに来ることだってできたのに、敢えて、水上にわざわざ逃げる時間を与えたのである。

そこには「あなたを害するつもりはない」というメッセージがある。

罨ではないだろう。

水上もそう思った。

「分かりました。どこに行けばいいんです？」

「『東京に来て初めて行った建物』と言っていたよ。ミスター・ミナカミなら知ってるはずだから、って。勿論、私はその場所を知りませんからね？」

時間は、午前零時と指定された。

これを逃したら、もう立場の違う自分たちが触れ合うことはないだろう。



待ち人は来ない方がいいような気がしていた。そうしたところで、誰も困りはしない。

東京から消えた水上は、その後、別の土地で、別の名前で、別の任務をするだけだ。

たとえば、そこで、保科悠と同じように誰かの命を奪うことになっても、それは国家の仕事だからしょうがない。

水上のためには、そのほうがいいのだろう。

しかし、保科俊のため、あるいは、真相を知りたがっている自分のためにも、沙龍はこの貸切の展望台で水上を待つことにした。

(真相……？ そんなの、どうせ、たいした事実は出てきやしない)

利潤を追求する者が居て、いつもやりすぎてしまう者が居て、それを、たしなめる者と、害する者が居て……。

そういう単純な話だ。

そこにあるのは、金と権力。それだけなのである。

（私は、真相を聞きたいんじゃない……）

では、なにを聞きたがつているのだろう。

水上の言い訳を？

では、どんな言い訳なら納得するというのか。

（……静かだなー）

広い展望台には誰も居ない。二十三時までの一般公開の時間が終わると、あとは酔狂な資本主義の申し子たちが一時間百万円というお金を借り切るのだ。

プロポーズをしたり、映画撮影をしたり、人によって用途はさまざまである。

都庁側もいい儲けになっている。もちろん、その儲けは都民のために使われるのだから、誰からも文句の出ようはずがない。

台風接近中ということもあって、展望台から見える東京の風景は、いつもよりは大人しくみえた。

久しぶりに来た冬服が、やはり少し暑い。

色々と野暮用があつて着替える時間がなかつたので、このまま来てしまった。エレベーターの到着音が響く。

遅れて、足音。

「甲斐さん……？」

水上も着替える時間がなかつたのか、Yシャツにネクタイといういつもの姿だ。

上着を脱いでいるのは、武器は持っていません、という意味表示かもしれないなかつた。

「すみません、こんな時間に、こんな場所に呼び出したりして」

沙龍はいつものように他人行儀なビジネス用の言葉で話す。

が、水上は、いつもと少し違う反応をした。

「もし僕がラテン系の色男なら、どうしたの？ 甲斐さんのほうから連絡をくれるなんて、嬉しいな——、って、言っているところだよ」

そして、少し悲しそうに微笑む。

既になにかを覚悟しているのだろう。いや、諦めた、ということかもしれない。

「……ちよつと、保科悠さんのことでお話があつて」

単刀直入に言うと、水上も分かつていたように頷いた。

「ミスターはご存知かと思いますが、私、悠さんの弟さんと文通をしています。日本語の読み書きの勉強になると思って、最初、お礼状の返事が来た時に、そう願ひしたんです」

「……そう。勤勉だね」

「それで、俊先生は、あ、お医者さんなので、そう呼んでいるんですが。悠さんがいなくなったことをとても心配していました」

「……そう」

「私、俊先生にはお世話になつていたので、行方不明の悠さんのことは見つけてあげたいんです。——たとえば、死体でも」

沙龍がまっすぐに水上を見て言った。

これは、へつらうことを知らない視線だ、と水上は思う。

若さゆえではない。恐らくは、いままでの人生で、その必要がなかったのだらう。

「まるで、僕が保科の行方を知っているような口ぶりだね」

「知っていると思います」

「なぜ、そう思うの？」

「ミスター・ミナカミは、本当はM重工の社員じゃないからです」

水上は、虚ろな目で眼下の景色を見ていた。

深夜というこの時間にも、あちこちに光の渦が見える。あの輝く場所には眠らない人々が、そして、隙間の闇には妖魔が潜んでいるのだろう。

実際、東新宿の木佐の家にも、可愛らしい妖あやかしが棲み付いている。

上海が魔都なら、ここ東京は妖都だ——、と沙龍は数ヶ月前に思ったことを思い出した。

「社員だよ？ 給料は毎月きちんと貰ってるし、社員証も本物だ。水上慎太郎という人物は、都内の大学を出て、アメリカの大学院で修士の資格を取り、一年前にM重工に入社した。少なくとも同僚や上司はそう信じてる。仕事ぶりは真面目

だけど、凡庸。特に優秀でも、無能でもない。私生活も無趣味で人畜無害。周囲の人の記憶には残らないタイプ——」

「……」

「それが僕らの『仕事』だからね。目立たず、地味に、周囲に埋没するなら尚よし。もつとも、僕はそう演じていたわけじゃない。元から、そうなんだよ。目立つことが嫌いで、たいした正義感もなく、うすらぼんやりと生きてきた。そういう人間こそ、こういう仕事にうってつけなんだって、人事が言っていたよ」

その自嘲すらも本物かどうか、分からない。

「M重工に潜入したのはね、中国のとある勢力と春日部長の癒着が危惧されていたからだ。それを、調べている最中に、会社側に勘付かれたのか、部署を変えられた。でも、僕の仕事はほとんど終わっていた。春日部長はシロだった。その疑惑を隠れ蓑にして、専務の言いなりになって動いている別のスタッフが居たからね。……まあ、それはこっちの話だ。そうして、丸の内から新宿に飛ばされた僕は、そろそろあの会社を撤退するつもりだったんだよ。二月に、春日部長から、急に成田空港まで運転手をしてくれ、って言われるまではね」

「え……？」

「つまり、君に会ったのは偶然なんだ。信じてもらえないかもしれないけど」

「じゃあ、なぜ、携帯電話を使わせたり、西新宿のマンションを見張っていたりしたんです？」

「最初は、大した意味はなかったんだよ。公安の人間なんてのはね、外国人を見たら子供だろうとスパイと思えつてのが標語になっているから、携帯電話の履歴を押さえたり、動向を調べるのは、ただの確認事項でしかないんだよ。そして、実際、動向を調べて、ああ、やっぱりただの一般人ですって終わるのが普通だ。でも、君は違った。明らかに一般人じゃない。親族のことを調べるのに探偵を雇うくらいならまだ目をつぶれるけど、戸籍を偽造して、私立高校の籍を金で買うって、この子はいったい、何者なんだ？ 僕の立場からすれば、気になるのは当然だよ」

「……それで、どこにたどり着いたんです？」

「金の出所は残念ながら分からなかったよ。しかし、それが逆にあることを物語っていた。こんなに綺麗に洗える方法を知っていて、なおかつそれを実践でき

る国際的な組織は中国には一つしかない。そして、君は上海から来た。まさかとは思ったけど、そうとしか考えられない」

「……」

水上は、沙龍が『蒼龍会』の老板であることを知っているのだ。

沙龍自身はあの組織を抜けたつもりでも、周囲はそう見ていない。

「でもね、甲斐さん。僕はそれをどこにも報告していないし、するつもりもないんだ」

「なぜ？ それがミスターの仕事なのでは？」

「任務は受けていないよ。僕が勝手に調べただけだから」

「じゃあ、なぜ……」

その「なぜ」を説明するのは難しい。

特に、大人になると遠回りして色んな言葉を使わなければならない。

偃月なら「好きだから」というシンプルな思考と言葉で済ませるだろう。

「僕は君に二十七歳って言ったと思うけど、本当はそんなに若くない。童顔だから、都合よくこういう現場仕事を押し付けられてる。就職してから、もう何度目



の任務だったかな。一つの場所には、短くて数日、長くて二年くらい居るから、もうだいたい手馴れてるよ。息をするように嘘をついて、人を騙し、無味乾燥に生きていく。そんな毎日の中で、君と出会って、僕は初めて人を羨ましいと思ったよ」

「羨ましい……？ 私が？」

「そうだよ。君は、コーヒーを自分で淹れたことすらないお姫様だった。なのに、一人でできないことなど何も無い、と思ってる。事実、君は一人でもやってしまうんだ」

(あ……！)

と、声を上げそうになった。

沙龍は、なぜ、「多分」が口癖になったのか、分かったのだ。

木佐にも何度か指摘されたこの口癖のきっかけを作ったのは水上だ。

東京に来た初日、水上にコーヒー道具を一式買ってもらった。その時、彼は「淹れ方は分かるか」と聞いた。「多分」と答えたのは自分だ。

その時、水上はなんとも言えない表情で笑った。

いま思えば、あれは呆れていたのだろう。

しかし、沙龍はそうは思わなかった。なんだかとても儂い、消えてしまいそうな笑顔が印象に強く残って、「多分」という呪文には、この表情をさせる力があるのだと、無意識に刷り込まれてしまったのである。

「君のような女の子が存在することが不思議だったよ。できれば、僕も、君が立っている側の人間に生まれたかった。でも、それは叶わないから、せめて、君がこのまま日本で平穏に暮らしていけるように、僕がこの数ヶ月の間に調べたことは全て破棄してきた。この秘密は守られるはずだよ。そのことで僕を強請ろうとした保科はもう居ないから」

「……保科、悠さんが？」

「保科は、君が思ってるほど善良な人間じゃない。春日部長の影に隠れて、瀋陽や重慶では相当裏金を使っていた。さっき言った、専務の言いなりになって動いていたのが保科さ。会社から見れば重大な背任罪になるけど、一蓮托生なので告発はできない。会社側からすれば、もう別件で逮捕してもらおうか、消えてもらおうしかないっていう段階だった。そのタイミングで保科は『甲斐馨の正体』を知っ

た。だから、居なくなつた。そういうことなんだよ。……弟さんに、伝えるかい？」

「……」

答えられなかった。しばらく沈黙を貫き、最後には「分かりません」と、正直に言った。

「僕が言うことではないけど、真実を教えることが必ずしも最良とは限らないよ。山で遭難して、でも、奇跡的に助かって、記憶喪失になってどこかで生きる可能性もある——、って思わせてあげたほうがいいんじゃないかな」

そうかもしれない。

外国人の旅行者をタダで治療するほど人の好い保科俊に、兄の不正と最期を知らせるのは、荷が重い。

しかし、嘘をつき通すなら、注意が必要だ。ぎこちなさは、文字を通して必ず伝わってしまうだろう。

「僕を軽蔑する？」

首を横に振った。

「ミスター、私はあなたを糾弾するために呼んだわけじゃありません」  
そう言うと、水上はなぜかフツツと笑った。

「君は結局、その呼び方が変わらなかつたね」

「……呼び方ってそんなに大事ですか？ 私、呼び方を途中で変えられるほど器用じゃないので、同級生の親友もさん付けのままですよ」

水上はもう一度儂げに笑って、さつき言ったことを繰り返していた。

「君のそばに生まれたかったよ。そうしたら、僕も少しは君の役に立てたかもしれない。さよなら、甲斐さん。もう一度と会うことはないと思うけど、お元気で」

それきりだった。

沙龍はひどく悲しい気分になって、一人で展望台を降り、一人で歩いて帰った。

木佐がまだ起きていて、熱いお茶を淹れてくれた。受験勉強をしていただけ、と言われそうだが、沙龍の帰りを待っていたのかもしれない。

「少し、疲れた」

と言って、沙龍はすぐ寝てしまった。

水上が拳銃自殺した、という知らせを聞いたのはその二日後だった。

暴風雨の中を歩いて帰ってきたのだから、風邪くらいひいてもよかったのだが、どこまでも頑丈な自分の体が少々恨めしかった。

というのも、高熱でもだして朦朧としたまま寝込みたい気分だったのである。

どんな気分だといわれても、そういう気分なのだ、としかいいようがない。

翌日は記録的な風速のせいで電車が一時的に停まり、学校も休校となった。

沙龍はゴロゴロと三ネコと遊んだり、漫画を読んだりして木佐邸で過ごしていた。が、昼に醤油ラーメンと味噌ラーメンととんこつラーメンを食べた後、お腹が痛いと言い出す。

「イテテ……、あれ？　なんか、ちよっとお腹痛い……」

「食いすぎか？」

木佐が聞くも、

「違う」

○・一秒で否定する。が、ラーメンの袋の残骸を見ればそうとしか考えられない。

しばらくすると痛みはおさまったので、そのまま普段通りにゴロゴロと過ごしていたのだ。

そして、夜になって、夕飯がちやぶ台に並ぶ頃、今度は食べる前に、お腹をおさえている。

「あう……、ちよつと、お腹が……」

「食いすぎか？」

「だから違うって。まだ食べてないじゃん！」

怒る気力もなく、珍しくご飯はいらなないって、そのまま寝てしまったのだ。

翌朝も、調子はよくなっていないという。

「お腹、痛い……」

いつもなら目覚めとともに「お腹すいた」という沙龍が、朝食の目玉焼きの前

でうづくまっている。

さすがに木佐も心配そうな顔をしているのだが、

「食いすぎか？」

「……ねえ、キサさん、昨日っからそのセリフしか言ってないよ。他に言うことないの？」

「そうだな……、じゃあ、なにか悪いモノでも拾い食いたか？」

「……ムカ。ねえ、もしかして、私、ストレスで胃がやられちゃったのかな……」

といつつ、沙龍が押さえているのは横っ腹の部分である。

「……」

「なに、その沈黙」

「いや……」

「なに、その視線」

「いや……」

そして、木佐は、グフフ、と笑った。

「なぜ笑う」

「いや……。馨が？ ストレス？ ……ストレス？」

「ちよつと……。二回も言うのは失礼ですよ！ あ、イテテテテ……」

本格的に痛がる沙龍をしばらく放置して、木佐は出掛ける用意をしていた。

「馨の保険証と、財布と……。着替えはあとでいいか。よし、行くぞ」

ネコをつまむようにして沙龍の体を担ぐと、木佐は大通りまで出てタクシーをつかまえた。

「い、行くって？ どこに？ ……イテテ」

「病院に決まってるだろう。多分、それ盲腸だ」

「あ……。なるほろ」

と、今更ながらにそういう可能性もあったのか、と気付くやいなや、強烈な睡魔に襲われた。昨夜は痛みあまりほとんど眠れなかったのだ。

麻酔を打たれ、朦朧としたまま手術台に乗せられたところまではかろうじて覚えていた。



病室には宇佐美がお見舞いに来ている。

ここぞとばかりにわがままお嬢ぶりを発揮して個室にしてもらったのだが、普段、お金にはうるさい木佐がなにも言わなかったところを見ると、医療費は「普段の生活費」に入らないらしい。当然といえば当然だ。

「馨ちゃん、大丈夫ー？」

「大丈夫なわけないじゃん。お腹切られたんだぞ」

沙龍は病院用の寝巻き姿でベッドで漫画を読んでいるところだった。

「まあ、でも、ただの盲腸でよかったよ」

「フン……。ただでさえ繊細な思春期に揺れる年頃なのに、色々あったもんだから、私はストレス性胃炎的なものかと思ってたのに、なにその不幸中の幸いだよね、みたいな慰め方。腹切られるくらいなら、ストレスのほうがよかったわい」

「だから、何のストレスがあるって言うんだ。馨がストレスでやられるような世の中なら、僕はとっくに死んでる」

宇佐美から渡されたフルーツのラッピングをほどこしていた木佐が淡々と言う。

「……褒められちった」

「褒めてないよ」

「あ、それでさ、馨ちゃん、そこで一緒になった人が……」

宇佐美が言い終わらないうちに、ひよろりとしたスーツ姿の中年が病室に現れた。こけた頬と、開いているか閉じているか分からぬほどの細い目が特徴的だ。

沙龍の顔が瞬時に強張る。

「だから、言ったじゃないですか。くれぐれも誰も信用しないようにって」

「……」

こんな堅気風のスーツを着ているのは見たこともない。

細い目は、愛想笑いを作っているが、ちっとも笑っていないのはよく知っている。

「馨……?」

木佐が、沙龍の妙な様子に気付いて声をかけたが、

「大丈夫。あまり仲のよくない昔の知り合いだ。……えーと? ミスター? お名前なんでしたっけ?」

まさか通り名をそのまま名乗っているとは思わなかったので、そう聞いたのだ。  
だ。

董天。  
とうてん

それがこの年齢不詳の男の通り名だ。

本名は知らない。別に知りたくもない。

「半年ちよつとで忘れられるとは、なんとも悲しいですね。昔のままです  
よ、沙龍様」

「あ、そ。で、なにしに来たの」

「ちよつと沙龍様の様子を見に」

「張が行ってこい、と？」

「まあ、両方ですかね。私も気になってましたから」

「……」

宇佐美は、気まずい空気を察して、なにやらもぞもぞ小声で言って出て行ったが、木佐は残ることにした。

沙龍の態度が初めて見るものだったからだ。

この男は敵なのか？ 味方なのか？ すぐには判断できない。

「東洋医学的に言えば、貴女がこのタイミングで盲腸に炎症を起こしたのは、やはり体のサインですよ。ミスター・ミナカミのこととまるつきり無関係でもないはずです。だから、あまり人を信用しないようにと忠告しましたのに。そんなに、あの日本人に裏切られたことがショックだったんですか？」

「……」

沙龍はあからさまに嫌な顔をしている。その表情を隠そうともししていない。

「嘘をつかれていたり、騙されていたことがショックだったんじゃない。そんなのはお互いさまだ」

「では、なにが？」

「ミスター・ミナカミが死ななきやいけなかった理由が分からない」

「それは、同僚を殺した自責の念と、貴女の正体を公安から守るためでしょう。

……それが、重いんですか？」

「違う、と言いたいところだが……、違わないかな……」

大きな長いため息を漏らした。

毎日人が死んで、それが当たり前になっていたときは、付き合っていた男が行方不明になろうとも気にしなかった。

死ぬ人はそういう運命なのだ、と、もしくは、生きる力が足りなかったのだ、と思っていた。

それが弱肉強食という、沙龍の知るたった一つの世界のルールだったのだ。しかし、この国で人が死ねばそれは大きな事件となる。

人の死は、誰かに傷を残し、残された者は死を悼み、親しい者の幸せを願う。

自分はそういう普通の生活がしたくて、この国に来たのではなかったのか。

なのに、このズッシリとのしかかるものはなんだろう。代償か——、と沙龍は思った。

「しかし、目的の一つは、見事に果たされたようですし」

と、董天は木佐を見て、ニコニコ顔で会釈する。

「It seems things are getting better. (事態はよくなっていると思いますよ)」

木佐にも分かるようにそこだけ英語で言った。

「フン……。用が済んだら、見舞い品を置いて、さっさと上海に帰れよ」  
董天はケーキのたくさん入った大きな紙の箱を木佐に渡して、にこやかに去っていった。

沙龍の嫌いな甘いものばかりである。

「くたばれ、あの野郎」

と、沙龍はこぼしていた。

文化祭に馨が連れてきた雀士は、なるほど、十歳の女の子が骨抜きにされるのも無理はない、と思うような風貌で、野生的な色気のある人だった。

後々の言動からしても、馨はこのタイプに弱いんだろう、と思う。

思わず口説きたくなかったが、あれは女性にしか興味のない目だということも分かったので、おとなしく引き下がった。

どうも厄介なことに馨の好きになるタイプと、僕の惹かれるタイプは重なるらしい。今後は充分気をつけなければ。

しかし、「鉄さん」の馨を見る目はどう見ても「親戚のちっちゃな女の子」だ。彼の中では、馨は十歳のまま成長していないらしい。ご愁傷様。

文化祭といえば、模擬店の仕事の合間に見た演劇部の舞台が、微塵も期待していなかった分、わりと面白かった。

江戸川が脚本を書いて総指揮を取ったという、ミステリー風コメディだった

のだが、元のオリジナルを書いた作家は別にいららしい。「南パンダリーヌ」という、へんてこなペンネームの江戸川の親戚らしいが、よくよくこいつはパンダの恩恵を受けた男なのかもしれない、となんとなく思った。

渡部さんが主役をやっていたが、普段の地味な彼女を知っている分、舞台での生き生きとした美女ぶりには目を見張った。

高校生にして既に人生が決まっているというか、役者にしかなれないような人だというのはよく分かる。

しかし、去年も一昨年も積極的に参加してなかったので、文化部の連中が文化祭というものに対してここまで盛り上がっているのを知らなかった。自分も紛れもなく文化部なんだけど。

華道部の作品を展示している部屋は「ご自由にご覧ください」と張り紙をしてあるだけで、誰かが常駐しているわけではない。

文化祭は二日間行われるが、一日で二十人くればいいほうだ。出口ではアンケートも設置しているが、これも毎年、数人しか書いていってこない。

今年は最終日にそのアンケートを回収したら、ひととき豪快な字で書かれてい



るものがあつた。

見慣れた字なので、無記名ながら誰が書いたのかはすぐ分かるのだが……。

『木佐小次郎さんの作品は構図がビシツと決まっついて一番かつこよかつたです。直也くんのは本人っぽく可愛くまとまっついて素敵でした』

まあ、これが素直な感想なんだろう、とは思つた。

文化祭が終わると、もう三年生たちは腹をくくるしかない。

僕も受験勉強に専念していたのでその年のクリスマスも正月もストイックに過ぎ、翌年の二月の寒い日に受験の全日程を終えた。

「キサさんなら目をつぶつても大丈夫だよー」

と、脳天気な同居人は言っていたが、僕はそれほど楽観視してはいなかった。

胃の痛くなるような二週間を過ぎ、三月に合格発表を見に行った時は高校の時よりも百倍緊張した。

無事に合格することができたのは、とりあえず、九割は僕の頑張り、あとの一割は馨が料理以外の家事を全部引き受けてくれたおかげだろう。

翌日、家に届いた合格通知書を持って、僕は新幹線に乗り、おじい様に会って

きた。

やせ細ったおじい様を見たときは色々と言葉に詰まって、たいした話もできなかったが、僕はおじい様に会う口実として受験をしたのだ、とやつと気付いた。

この時、初めて、八月の上洛時に馨がお見舞いがてら、おじい様となにを話したのか、知った。

「自分が打ちのめした年寄り相手に、麻雀の燕返しツバメ返しの極意をな、熱く語って帰ったのよ。フフ、面白いのう、あの娘は……」

「……」

燕返しといったって、有名な佐々木小次郎のアレではない。

麻雀のイカサマ技のことである。

いったい、なんだって馨はそんな阿呆な話をしたのか。分かるようで分からない。

無理矢理説明するなら、馨がよく言っている『国家元首であろうと、監獄の中の凶悪犯だろうと、友達のように接しろ』ってやつなんだろうか。

八雲の話では、おじい様はもうそんなに長くはもたないだろうということだ

が、自分が死んだらこの土地家屋は父の好きにさせろ、と信じられないことを病床で言っているらしい。

なにがなんでも僕に黒田家の跡を継がせようとしていたあのおじい様が、どうしてこうまで変わってしまったのか。

「変わったのではなく、恐らく……、元に戻ったのだと思いますよ」  
八雲はそう言っていた。

これも、分かるようで分からない。

「馨は卒業したらどうするんだ……？」

東京に戻った日に、コタツでくつろぎながら聞いた。

「私はなんか仕事しようかなー。あ、そっか……。就職活動しなきゃいけないのか。えっと、私って、なにができるんだっけ？ 料理は無理だよね……。えーと、でも、コーヒー屋の店員くらいはできると思うな。昔ね、バイトしてたんだ」

聞いたこっちが不安になるようなことばかり言う。

三日後は卒業式なんですけど！

「だったら……」

ちよつと考えていることがあったのだ。

大学の籍は便利だよ、という松木さんのアドバイスもあって、僕は学生の身分のまま、仕事をすることにした。

計画しているその事業（といったら大袈裟だけど）を馨にも手伝ってもらおう。

この無芸大食は、普通の仕事はできないだろうから、丁度いい。

馨はなんだかんだ言つて、お父さんの足跡をまだ探している（実際に探しているのは宇佐美さんなのだが）。

斎藤新助というのが、甲斐弥太郎の偽名だったというのはほぼ間違いないと僕は見ているのだが、それに関しては、気になることが少しある。

これは碧媛さんの証言なのだが、甲斐弥太郎は「東京にも京都にも行ったことはない」と言っていた、というのだ。

しかし、斎藤新助としては、五十六年前に本郷の一高にも通っていたし、二十年前には京都の黒田家にも行っている。この矛盾はなんだろう。

「甲斐弥太郎としては行ったことないけど、斎藤新助としてはあるよ、ってことかなあー……」

馨はそんなことを言っていたが、これらの疑問は、後に岡山で判明することになった。

これは、また別の機会に語ろうと思う。

「無駄金使わないためにも、そういうのを仕事にして、自分で調べたらいい」  
僕はそう言ったのだ。

毎月、宇佐美さんに調査費用を払っているのは馨とはいえ、進展がないのに実費を払わなければならぬのは、いい加減馬鹿馬鹿しい。

だったら、貰う側にまわったほうがいい。

「え？　つまり、ウサミミの同業者になるってこと？」

「まあ、あそこまで『なんでも屋』になるつもりはないけど、宇佐美さんが前に言っていただろ。ブルース・リーが出てきそうなヤバイ仕事は、自分は能力的に無理だって。だったら、宇佐美さんにそういう仕事をまわしてもらおう。危険を伴う分、ペイはいいはずだ」

我ながら、金の亡者のような目をしていたと思うが、封筒貼りをしたところで稼ぎはたかが知れてるのだ。

個々の能力をいかして効率よく稼ぐ！それが基本である。

「興信所かー。確かに、請け負う側も面白そうだな」

案外、乗り気だ。

深く考えていないからこそこの答えだろう。

「でも、扇風機の修理とか、私はできそうにないな……。家庭教師とか、ベビーシッターとかも無理っぽい……」

宇佐美さんはそんなことまでやっているのか。

確かにベビーシッターは僕も無理だ。

「馨のできないことは僕がやるし、僕ができないことは馨がやればいい」

「うん、そうだね。じゃあ、所長さん、よろしくお願いします」

僕らの進路はこうして決まった。

別にピンカートン探偵社（※アメリカの最大手だった警備会社）のような会社にしようとか、そういう野望があつたわけじゃない。

依頼がなければ、株の売り買いを続けて日々の生活費くらいは稼ぐ自信はあったので、今までの生活がそう大きく変わることはないはずだ。

卒業式の当日に、卒業旅行がしたいと言い出す馨もいい加減行き当たりばったりなのだが、

「じゃあ、日帰りで鎌倉にでも行くか」

と言ったら、なぜかワラワラと希望者が集まって、翌日、数人で行くことになってしまった。

馨が普段仲良くしている小川さんと須藤に加え、なぜか江戸川と渡部さんの演劇部コンビまで居る。

直也も聞きつけて着いてきたのはいいとして、一番謎なのは、松木さんだ。

「昨日、電話で直也君に聞いて、来ちゃった♪」

などと言っていたが、どういうことなんだろう。ちよつと聞くのが怖い。

鎌倉までは電車で一時間。丁度いい距離だ。

そういえば、夏にも行ったのだが、あときはほとんど海水浴がメインだったので、観光はしていない。

今日は有名どころを少しまわって、暗くならないうちに帰る予定だ。

この日帰り旅行で、僕は初めて江戸川とまともに喋ったのだが、こいつに関しては地球人に擬態しそこねた宇宙人という理解でいいんじゃないかと思う。

彼は演じるほうではなく、作る側になりたいのだそう。確かに顔の造りは平凡なので、その奇抜な頭を生かしたほうがいいのかもしれない。

渡部さんとは結構いいコンビに見えるが、特別な関係なのかどうかは不明だ。須藤の割り込む余地があるのかどうかもまったく分からない。

世の中、色んな関係があるので、それぞれに目指したいものを目指したらいいさ（少々投げやり）。

「……？」

長谷寺の周囲の新緑を見ながら、馨が階段で立ち止まって一人でブーツとしている。

「どうしたんだ？」



たまにこういうことがある。

話しかけても、反応が鈍い。

「私さー、こういう、日本のお寺か神社の、濃い緑色の中で過ごしたことがある気がするんだよね」

「……いつの話だ？」

「それが分かんないんだけど、『チンジュノモリ』っていう言葉と一緒にたになつてどこかに記憶されてる感じ」

「チンジュ……？ ああ、鎮守の森か」

「でも、私は中国生まれだからさ。日本の景色は知ってるはずがないし……。これは、私の記憶じゃないのかもしれない」

妙なことを言っていた。

「おーい、早くこないと置いてくぞー」

小川さんと須藤の運動部組は、既にはるか山頂の散策路まで到達していて、こちらに手を振っている。さすがに元気だな。

殿しんがりをのんびり上がってきた松木さんは、スポーツマン風に見えるのだが、実

は体力は全然ない。

馨を先に行かせて、僕は彼を待った。

山の空気が気持ちいい。

「木佐君たち、友達いっぱい居るんだねー」

横に並んだ松木さんは、少し息が上がっている。

「僕らの、じゃなくて、馨の友達って言ったほうが正解ですね」

「馨君は友達作るの上手だよ。一見、とても近寄りがたい雰囲気を持ってるくせに」

「そこなんですよね」

少し上を歩く馨は、直也と大笑いしながらふざけ合っている。

あの二人、いつの間にあんなに仲良くなったんだ？

ああいう二人を見る日がくるとは思わなかった。

「……うん？」

「なぜ、普通の人とは違う、かなりバイオレンスな人生を歩んできた馨が、この日本で平和な学生生活を送れるのか、ずっと不思議だったんです」

「うん」

「過酷な人生を送ってきてなお、馨はなにも絶望してないんだな……って。人に、世界に、絶望しないですむ力があつたんだな、って、最近分かりました。羨ましいって言うより、ずるいなって気はしますけど」

「まあ、それが生まれながらの王者ってもんだからね。その分、しつかりウィークポイントも抱えてると思うよ？」

「弱点……、か。今のところ、僕にはそれらしきものはなにも見えませんが」

「そのうち、見えてくるよ」

「そうですね。……あ、松木さん、それと、直也のことなんですが」

「う、うん？」

「なんであの依存症が、ものの見事に更生したんです？ あなたはいったい、なにをしたんです？」

「えーとね……、それは企業秘密っていうか、全国占い師協会の鉄の掟を破るわけにいかないのです、黙秘させてください。まあ、たいしたことはしてないんですよ。ちよつと、暗示をかけたっていうか」

「……」

どこまで本気で言っているのか分からないが、とりあえずかまかけは成功した。やはり、彼がなにかしたんだな。

この人も、怖い人だ。

本気を出せば、できないことはないんじゃないかって気がする。

占い師稼業のほうは暇そうだし、計画している例の件は、彼にもいろいろと手伝ってもらおうか。

会社名はそんなに凝らなくていいんだ。地名とかをそのまま使えばいい。

そう、例えば、東新宿探偵社、とか。

\* \* \*

俊先生へ

お久しぶりです！

お元気ですか？

今日は卒業旅行で（といっても日帰りですが！）鎌倉に來ています。

大仏は思ったほど大きくなかったような。ちよつとがっかり。

一年間は本当にあつという間でした。

色んなことがあつた一年だったけど、日本に來てよかつたと思います。

四月からは新しい生活が待っています。

去年とは違つた意味でドキドキしてますが、なんとかなるでしょう。

再見！

甲斐馨

保科俊とは、しばらく手紙のやり取りが途絶えていた。

向こうも兄の失踪事件があつて、それどころではなかつただらうし、沙龍は真

実を隠して手紙を書くのがためらわれたからだ。

でも、こういった絵葉書なら自然に見えるだろう、と思えた。

水上慎太郎の件は、どこにも公にはされていない。

M重工の中では退社して田舎に帰った、ということになっており、ほとんど人づきあいをしていなかったせいで、誰もそのことに疑問を持つ者が居なかったという。

東京というのはそういう人たちがたくさん居る街なんだね、と沙龍が言っていた。

四月。

東新宿の木佐邸の表札の横に、看板が一つ追加された頃、保科俊から久しぶりの手紙が届いた。

元気そうで安心したということ、兄のことはもう諦めていて、今は日々の仕事に追われていることなどが達筆な文章で綴られていた。

沙龍も一安心である。

和紙の綺麗な便箋を封筒に仕舞ったところで、メインオフィス兼居間の固定電

話が鳴った。

初めての仕事の依頼かもしれない。昨日、町内でチラシを配った効果が早速あつたようだ。

木佐はいそいそと電話に出ていた。

「はい。こちら、東新宿探偵社」

「終わり」





## 【閲覧の際の注意事項】

当 pdf ファイルは B5 縦書きで作成したもので、見開きにすれば、実際の文庫に近い形でご覧になれます。

Adobe Reader をご使用の方は、設定を以下のように変更して下さい。

1. 「表示」 → 「ページ表示」 → 「見開きページ表示」にする。
2. 「編集」 → 「環境設定」 → 「言語環境」で、「デフォルトの読み上げ方向」を「右から左へ」にする。
3. 「右から左に表記される言語のオプションを有効にする」にチェックを入れる。

© 小龍 2011